平成３１年度入学生

# 授業計画書

－ S Y L L A B U S －

# 【総合文化学科】

島根県立大学短期大学部
松江キャンパス

# 目　　次

学修の心得 …… 1
総合文化学科での履修に際して …… 9
開講科目一覧　総合文化学科 …… 13
総合文化学科学びの概念図 …… 15

## 基 礎 科 目

哲学 …… 17
文学 …… 17
心理学 …… 18
音楽 …… 18
経済学 …… 19
日本国憲法 …… 19
市民社会と図書館 …… 20
数学 …… 20
人間と自然 …… 21
生物と栄養 …… 21
しまね地域共生学入門 …… 22
しまね文化論 …… 23
しまねボランティア研修 …… 23
健康スポーツ概論 …… 24
健康スポーツⅠ …… 24
健康スポーツⅡ …… 25
健康スポーツⅢ …… 25
キャリア・プランニング …… 26
インターンシップ …… 26
キャリア・アップ講座 …… 27
情報基礎 …… 27
情報応用 …… 28
コンピュータ・リテラシーⅠ …… 28
コンピュータ・リテラシーⅡ …… 29
コンピュータ・リテラシーⅢ …… 29
コンピュータ・リテラシーⅣ …… 30

# 専 門 科 目


総合文化基礎ゼミナール …… 33
総合文化ゼミナールⅠ …… 33
総合文化ゼミナールⅡ …… 34
日本語表現演習 …… 35
文化情報表現法 …… 35
文化情報誌制作 …… 36
民俗学 …… 36
日本文化論Ⅰ（表象文化） …… 37
日本文化論Ⅱ（現代文化） …… 37
英米の社会と文化 …… 38
アフリカの社会と文化 …… 38
東アジアの社会と文化Ⅰ …… 39
東アジアの社会と文化Ⅱ …… 39
文学と文化Ⅰ（日本近代文学Ａ） …… 40
文学と文化Ⅱ（日本近代文学Ｂ） …… 40
文学と文化Ⅲ（日本古典文学） …… 41
文学と文化Ⅳ（英米文学Ａ） …… 41
文学と文化Ⅴ（英米文学Ｂ） …… 42
日本文化特論Ⅰ（妖怪学） …… 42
日本文化特論Ⅱ（しまねの祭りと芸能） …… 43
英米文化特論（へるん） …… 43
日本の言語と文化Ⅰ …… 44
日本の言語と文化Ⅱ …… 44
日本の言語と文化Ⅲ …… 45
英米の言語と文化Ⅰ …… 45
英米の言語と文化Ⅱ …… 46
英米の言語と文化Ⅲ …… 46
英米の言語と文化Ⅳ …… 47
中国の言語と文化Ⅰ …… 48
中国の言語と文化Ⅱ …… 48
韓国の言語と文化Ⅰ …… 49
韓国の言語と文化Ⅱ …… 49
しまねの文化を歩く …… 50
しまね歴史探訪 …… 50
異文化理解演習 …… 51
へるん探求 …… 51
文化とガイド …… 52
読み聞かせの実践 …… 52
総合文化研修計画Ⅰ …… 53
総合文化研修Ⅰ …… 53
総合文化研修計画Ⅱ …… 54
総合文化研修Ⅱ …… 54
海外企業研修 …… 55

# 学修の心得

## 1. 大学での学修

大学に入学して最初にすべきこと。それは、入学から卒業までの大学生活全体を見通して、学びのイメージを自分なりに描いてみることです。

大学での学修は、高校までの学習スタイルとは大きく異なります。高校までの時間割は各学年、各クラスで定められていますが、大学では学生一人一人が自分の時間割を作成します。科目数も、高校までと比べて格段に多くなります。学びの関心や取得する資格、卒業後の進路などに基づいて科目を選択し、学期（春学期・秋学期）ごとに週間の時間割を作成し、それに従って大学生活を送ります。つまり、大学では、これまで以上にみずから主体的に学ぶ姿勢が必要となるのです。

各学部・学科においては、それぞれの学びの目的に従ってカリキュラム（教育課程）が編成されています。卒業や資格取得に必要な科目と履修単位数など、履修の仕方にも一定のルールがありますので、そのことをよく理解して計画を立ててください。

松江キャンパスにおける学修の大まかな流れは、学期ごとに以下の１～５のとおりとなります。

以下、この順に従って、学修の流れについてポイントを説明します。

| |
|---|
| １ 学修計画 → ２ 履修登録 → ３ 受講 → ４ 期末試験 → ５ 成績評価 |

## 2. 学修計画

### （1）ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）とカリキュラム・ポリシー（教育課程の編成方針）

各学部・学科は、大学での学修の到達目標として、ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）を定めています。その目標に向けて学修の道筋を示したものがカリキュラム・ポリシー（教育課程の編成方針）です。この２つのポリシーは学修計画の基本となるものですので、よく確認しておいてください。さらに、カリキュラム・ポリシーに基づいた授業科目の編成をわかりやすく示した「カリキュラムマップ」もありますので、参考にしてください。

**※ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、カリキュラムマップは授業計画書を参照してください。**

### （2）学期と授業

１年間を春学期・秋学期の２つの学期に分けています。

授業の実施方法は、時間割により毎週開講される「通常授業」と、時間割によらず、休業期間などを利用して特定の期間に集中して開講される「集中講義」や各種「学外実習」に区分されます。

| 春　学　期 | 秋　学　期 |
|---|---|
| ４月１日　～　９月３０日 | １０月１日　～　３月３１日 |

### （3）授業時間

授業は、通常 1 時限 90 分を基準として行います。本学の基本的な授業時間は次のとおりですが、授業科目によっては集中講義や演習、実習などで授業時間が変動する場合もあります。

| 時限 | １時限 | ２時限 | ３時限 | ４時限 | ５時限 |
|---|---|---|---|---|---|
| 時間 | 9:00～10:30 | 10:40～12:10 | 13:10～14:40 | 14:50～16:20 | 16:30～18:00 |

### （4）単位制

単位制とは、授業科目を履修することで定められた単位数を取得し、卒業、あるいは免許・資格の取得ができる制度のことです。

通常の講義形式の授業（90 分×15 回）を履修することによって、1 科目あたり 2 単位取得できます。

ただし、講義や演習、実技などの授業の形式や授業の時間数によって、取得できる単位数は科目ごとに異なりますので、授業計画書でよく確認してください。

また、単位制の考え方の前提には、**授業以外の自主学習（予習・復習）を確実に行うことが求められています。**

**【単位数と学修時間について】**

**単位数は、1 単位の授業科目を 45 時間の学修を必要とする内容で構成することを原則とし、科目ごとに定められています。**

**本学では 1 コマ（1 回）90 分の授業を 2 時間の授業とみなしており、多くの科目において 15 コマ（15 回）30 時間の授業をしています（科目によっては 7.5 コマ 15 時間等もあります）。**

**1 単位の授業科目においては 45 時間の学修が必要ですから、すなわち 15 時間の授業外での自主学習（予習や復習等）が必要となります（2 単位の科目であれば、30 時間（1 回の授業につき 2 時間）の自主学習が必要ということになります）。**

**単位が認められるには授業時間だけでなく、自主学習を行う時間が前提としてあることに留意してください。**

**（参考）卒業に必要な単位数**

| 学　　部 | 学　　科 | 卒業に必要な単位数 |
|---|---|---|
| 人間文化学部 | 保育教育学科 | １２４単位以上 |
| | 地域文化学科 | １２４単位以上 |
| 短期大学部 | 保育学科 | ６２単位以上 |
| | 総合文化学科 | ６２単位以上 |

### （5）授業科目の区分

本学の授業科目には、必修科目と選択科目があります。

①必修科目：必ず履修しなければならない科目であって、履修して単位を修得しないと卒業できません。

②選択科目：自主的に適宜選択して履修する科目です。

＊免許や資格取得のためのカリキュラムも用意していますが、これらの免許・資格取得や受験資格取得のためには、各種免許・資格ごとに履修しなければならない必修科目と選択科目がありますので、必ず、各自で確認してください。

（※各学部・学科の履修規程別表を参照してください。）

## 3. 履修登録

### （1）授業科目の履修登録・変更

授業科目を履修するにあたっては、「履修登録」が必要です。履修登録・変更の時期は、各学期始めの「履修登録期間」に行います。各学年始めには学科別履修ガイダンスで説明を受けますが、履修登録・詳細については、「情報ネットワークシステム利用の手引き」等を確認してください。不明な点は、担任または教務学生課に相談してください。

履修登録は、学生の自己責任で行うものです。入力ミスや履修登録漏れ等があった場合は、その学期での履修ができず、単位の修得も認められません。入力の際に十分確認を行ってください。

### （2）履修登録上の留意事項

① 必修科目は、翌年度以降、他の必修科目と開講時限が重なり履修できない場合がありますので、指定された年次に、必ず履修しましょう。

② 次の授業科目は履修することができません。

・既に単位を修得した授業科目

・授業時間が重複する授業科目（集中講義、実習などは除きます）

### （3）履修登録の変更

登録した科目を受講した際、「自分の受講目的と合致しない」などの理由により履修登録を変更したい場合は、履修登録変更期間内に教務学生課に「履修登録変更依頼書」を提出してください。未提出のまま履修を取りやめた場合（放棄）は、「不可」評価となり、不合格となります。

履修変更期間は学期開始後の３週目を目安とし、具体的な期日は教務日程に記載します。

（※人間文化学部履修規程第 2 条、短期大学部履修規程第 3 条を確認してください）

### （4）再履修

当該年次で単位の修得ができなかった場合は、翌年次以降、再度、当該科目を履修することができます。なお、必修科目は、卒業要件となりますので、必ず、再履修の登録を行ってください。

## 4. 受講

### （1）時間割

時間割は、春学期、秋学期の始めに教務学生課から開示します。教室等も表示されていますので確認してください。また変更がある場合がありますので、学生情報システム等で最新版を確認してください。

### （2）出席

履修登録をしている授業には出席しなければなりません。原則として、その授業科目の授業実施時間数の３分の２以上の出席を満たしていなければ試験を受けることができず、単位を修得することもできません。

### （3）欠席

やむを得ず病気等の理由により１週間以上欠席する場合は欠席届を提出してください。

次のいずれかに該当する欠席は、願い出によって公欠として扱うことができます。

① 法令の規定による出席停止

② 本学が定める限度日数の範囲内の忌引

③ 風水震火災その他の非常火災及び交通機関の事故等の不可抗力による欠席

④ その他学長が認める欠席

**（※詳しくは、学生通則第 15 条を確認してください）**

なお、次の①～⑥のいずれかに該当する欠席は公欠とはなりませんが、届け出によって教員による措置が講じられます。

① 教職課程の履修登録を行っている学生が教育実習を行う場合（人間文化学部のみ）

② 海外渡航を伴う授業の受講者が査証手続きを行う場合

③ 学則の規定に基づき留学を許可した学生が査証手続きを行う場合

④ 就職活動を行う場合

⑤ 進学のために受験する場合

⑥ 上記に掲げるもののほか、担当教員が必要と認めた場合

**（※詳しくは、授業運営細則第４条を確認してください）**

### （4）休講

授業担当教員がやむを得ない理由により授業を休講する場合があります。その場合は担当教員からの連絡または学生情報システム等に掲示しますので、各自で確認をしてください。

なお、授業開始時間 10 分を過ぎても授業が開始されない場合は教務学生課まで連絡してください。

また、非常変災（異常気象）その他急迫の事情があるときは授業を休講することがあります。

**（5）補講**

休講等の理由で、授業時間が不足する場合に補講が行われます。その場合は学生情報システム等に掲示しますので、各自で確認してください。

**（6）集中講義**

授業科目によっては、短期的に集中して授業を行う場合があります。土・日、あるいは休業期間を利用して開講する場合が多いので、スケジュール確認をしっかりしてください。

## 5. 成績評価及び単位認定

登録した授業科目を履修し、試験その他の審査に合格した学生には、所定の単位が与えられます。

**（1）試験等の受験資格**

① 履修登録を行っていること。

② 当該授業科目の授業時間数の 3 分の 2 以上出席していること。

**（2）試験等の時期**

試験等は、学期末に期間を定めて行うことを基本としますが、授業科目によっては随時行う場合もあります。

（※教務日程を確認してください）

**（3）試験等の方法**

試験等は、筆記、実技その他の方法により行われます。また、レポート提出や作品提出などによる方法もありますので、担当教員の指示に従ってください。

**（4）試験等の種類と手続き**

① 定期試験

原則として各学期末の指定期間に行います。

なお、病気その他やむを得ない理由で受験できないときは、事前に教務学生課に連絡してください。

② 追試験

病気その他やむを得ない理由で定期試験を受験できず、追試験を希望する者は「追試験願」に診断書など欠席理由を証明する書面を添えて、教務学生課に提出しなければなりません。提出された願に対し、大学が追試験を実施するか否かを決定し結果を通知します。試験方法などは授業の担当教員の指示に従ってください。

③ 再試験

試験等の結果が不合格となったときは、再試験は行いません。ただし、やむを得ず再試験を実施する場合もあります。再試験を受けようとする者は、「再試験願」を教務学生課に提出しな

ければなりません。提出された願に対し、大学が再試験を実施するか否かを決定し結果を通知します。

**（5）不正行為**

試験の代理受験や試験実施中のカンニング、監督者の注意等に従わない等の不正行為が認められた場合、受験を継続することができず、次の措置がとられます。

・当該学期の授業科目の履修が全て無効になります。

・学則（人間文化学部 49 条、短期大学部 44 条）の規定に基づき懲戒の対象となります。

また、論文、レポートにおける剽窃行為（他人の作品や論文の成果を、自分のものとして発表すること）についても不正行為となり、同様の措置がとられます。

**（※試験を受験する際の注意点についてはｐ１１を確認してください。）**

**（6）成績評価及び単位認定**

授業科目ごとに、学修の成果を「秀」、「優」、「良」、「可」および「不可」に区分して評価し、「秀」、「優」、「良」、および「可」を合格として所定の単位を認定します。

「秀」、「優」、「良」、「可」および「不可」の評価基準は、100 点満点とする点数で、次のとおりとします。

①「秀」90 点以上

②「優」80 点以上 90 点未満

③「良」70 点以上 80 点未満

④「可」60 点以上 70 点未満

⑤「不可」60 点未満

GPA（Grade Point Average）について

学生の学修意欲を高めるとともに、適切な修学指導に資することを目的とし GPA によるスコアを算出します。GPA は下記に利用します。

・成績通知書

・編入する大学へ開示する成績情報

・成績優秀者奨学金の選定指標

・保育教育学科の免許状・資格の追加履修可否基準

・地域文化学科の免許状・資格の履修可否基準

・その他各種推薦に関する資料として

| 成績評価 | 秀 | 優 | 良 | 可 | 不可 |
|---|---|---|---|---|---|
| 判定基準 | 90 点以上 | 80 点以上<br>90 点未満 | 70 点以上<br>80 点未満 | 60 点以上<br>70 点未満 | 60 点未満 |
| ＧＰ | ４．０ | ３．０ | ２．０ | １．０ | ０．０ |

（１）学期ＧＰＡの計算式

$$\frac{\text{当該学期の「秀」の単位数}\times 4+\text{「優」の単位数}\times 3+\text{「良」の単位数}\times 2+\text{「可」の単位数}\times 1}{\text{当該学期の総履修登録単位数}}$$

（２）累積ＧＰＡの計算式

$$\frac{\text{全期間の「秀」の単位数}\times 4+\text{「優」の単位数}\times 3+\text{「良」の単位数}\times 2+\text{「可」の単位数}\times 1}{\text{全期間の総履修登録単位数}}$$

なお、GPA の対象となる科目については以下のような留意事項があります。

・「履修登録の取消」により取り消された科目は GPA の対象外となります。

・放棄された科目は、ＧＰＡに算定に含めるものとし、当該科目の成績は「不可」とみなします。

・累積ＧＰＡの算定に当たり再履修科目が含まれている場合は、当初の履修登録による修得単位数及び取得ＧＰを算定から除外します。

この他、認定科目についても対象外となります。

不明な点がある場合は、教務学生課まで確認してください。

**●詳しい内容は下記の諸規程で確認してください。**

**【島根県立大学人間文化学部】**

**・島根県立大学学則**

**・島根県立大学人間文化学部学生通則**

**・島根県立大学人間文化学部履修規程**

**・島根県立大学人間文化学部他の大学等における履修等に関する規程**

**・島根県立大学人間文化学部入学前既修得単位数の認定に関する規程**

**・島根県立大学学位規程**

**※その他、各種資格取得に関する諸規程**

**【島根県立大学短期大学部】**

**・島根県立大学短期大学部学則**

**・島根県立大学短期大学部学生通則**

**・島根県立大学短期大学部履修規程**

**・島根県立大学短期大学部学修・修得単位等の単位認定に関する規程**

**・島根県立大学短期大学部学位規程**

# 定期試験受験に際しての注意事項

以下の注意事項をよく読んで試験を受験しましょう。

1. 学生証を机上に提示すること。
   ※忘れた場合は教務学生課で仮学生証の発行を申し出ること。
2. 筆記用具、学生証及び教員が認めたもの以外は机の上に置かないこと。
3. 机の中には物を入れないこと。
4. 携帯電話、時計のアラーム等の音を発するものは、スイッチを切って鞄の中に入れること。
5. 授業開始時間に遅れないこと。遅刻した場合の入室については、監督者の指示に従うこと。遅刻時間によっては、受験できない場合もあるので注意すること。
6. 不正行為があったと判断された場合は、その時点で当該科目の受験資格を失い、当該学期の授業科目の履修がすべて無効となるほか、学則の規定に基づいて懲戒されるので不正行為は絶対行わないこと。
7. 試験途中の退室は、監督者の指示に従うこと。
8. 追試験の取り扱いについては次のとおりとする。

次の理由により、定期試験を受けることができなかった場合には、欠席の理由を明らかにした証明書等を添付の上、試験終了後１週間以内に「追試験願」を教務学生課に提出してください。学長の許可を得て、指定された日に追試験を受けることができます。

1. 疾病（⇒医師の診断書が必要）
2. 交通機関の突発事故その他の自然災害（⇒遅延証明書や事故証明書等が必要）
3. 忌引（⇒会葬礼状の写し等が必要）
4. 就職活動、進学のための受験（ただし、就職活動については以下に該当する場合のみ）

   ① 企業等の指定する日時に選考試験（面接を含む）を受ける場合
   ② 企業等の指定する日時に当該企業等を訪問又は当該企業が開催する説明会に参加する場合
   ③ 内定企業から呼び出しを受けた場合は、①②に準じて取り扱うものとする

   ※学期末試験と重複しない日時を選択できる余地がある場合は、選考試験や説明会等の日時調整をすること。調整可能であるにも関わらず、選考や説明会等に参加して試験を欠席した場合は、追試験を認めない。

5. その他学長が特に認める欠席

**※追試験受験が必要となることが判明した時点で、教務学生課までメールや電話等で事前に連絡をすること。**

# 総合文化学科での履修に際して

島根県立大学短期大学部（以下「本学」という)、また総合文化学科は、下に示した目的を定めて設置され、その目的のもとに学位授与の方針、教育課程の方針が打ち出されています。これらの目的、方針を十分に理解していただくことが、充実した 2 年間の学修活動につながります。

1.　本学の目的と総合文化学科の教育研究上の目的

**目的（学則第１章より）**

島根県立大学短期大学部は、地域における教育研究の拠点として、学生の学ぶ意欲を高め、豊かな人間性を育むことによって、課題探究力及び実践力を兼ね備えた人材を育成するとともに、地域への知の還元や地域課題解決への支援を通じて地域と協働し、地域社会の文化及び福祉の向上に寄与することを目的とする。

**総合文化学科の教育研究上の目的（学則第１章第１条の２の(2)）**

島根、日本および世界の文化に関する基礎的な知識と技能を身につけ、グローカルな視点から地域社会と主体的に関わることができる人材を養成するとともに、人類学、言語学、文学、情報学等の各分野において、文化および文化資源に関する教育研究に学際的かつ多面的に取り組むこと。

2.　本学ならびに総合文化学科における学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

上記の目的、教育研究上の目的を掲げながら、下に示した知識・技能、思考力・判断力・表現力、関心・意欲・態度を身に付けることを最終的な達成目標として本学教育課程は編成され、所定の単位を取得しこの課程を修了することをもって短期大学士（総合文化）の学位が授与されます。

**短期大学部共通の学位授与方針**

［知識・技能］

- 人間と文化について基礎的な知識や技能を身に付けている。

［思考力・判断力・表現力］

- 課題に向けて自ら考え、表現する力を身に付けている。

［関心・意欲・態度］

- 人々と協働して地域社会に貢献しようとする態度を身に付けている。

**総合文化学科の学位授与方針**

［知識・技能］

- 島根、日本および世界の文化に関する基礎的な知識を身に付けている。
- 情報化に対応したコンピュータの基礎的な技能を身に付けている。
- 国際化に対応した言語の基礎的な運用能力を身に付けている。

［思考力・判断力・表現力］

- 総合文化学科における幅広い学びの中から、主体的に課題を設定することができる。
- 設定した課題について、自らが思考・判断・表現するために必要な、日本語の基礎的能力を身に付けている。

［関心・意欲・態度］

- 身の回りの地域で生起している諸課題と主体的にかかわる態度を身に付けている。

3.　本学および総合文化学科の教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

本学では、2 年間の体系的な教育課程を編成するため、科目の大きな区分として［基礎科目］［専門科目］の科目区分を設け、以下のとおりカリキュラムポリシーを定めています。

- 人間と文化、社会、自然のそれぞれの関わりについて基礎的な知識を身に付けるため、［基礎科目］に［人間と世界の理解］の科目群を設ける。
- 島根における地域の特色や課題について理解を深め、地域共生の精神を育むため、［基礎科目］の［人間と世界の理解］科目群の中に［地域］科目群を設ける。
- 保育並びに文化に関する専門性を育成するため、［専門科目（保育学科）／専門科目（総合文化学科)］により、両学科の教育課程に従って専門的な学びを深め、２年次に学びの集大成を図る。
- 地域における保育や文化に関心を持ち、地域で活躍できる実践力を育成するため、［基礎科目］［専門科目（保育学科）／専門科目（総合文化学科)］の全体を通して、実習、演習、フィールドワークなど体験型の学修機会を積極的に設ける。

また、上のような本学全体の編成方針のもとで、総合文化学科ではさらに次のような科目配置・実施方針を定めています。

① コンピュータの基礎的な技能の養成を目指して、［基礎科目］に［情報リテラシー］科目群を配置する。

② 主体的に課題を設定し、自ら思考・判断・表現するために必要な日本語の基礎的能力の養成を目的として、［専門科目］に［総合文化プロジェクト］科目群を配置する。

③　島根、日本および世界の文化に関する基礎的な知識の習得を目的として、［専門科目］に［日本と世界の文化］［言語と文化］［文化資源の活用］の科目群を配置する。

④　国際化に対応した言語の基礎的な運用能力の養成を目指して、［専門科目］に［言語と文化］科目群を配置する。

⑤　身の回りの地域で生起している諸課題と主体的にかかわる態度の育成を目的として、［専門科目］に［文化資源の活用］［総合文化研修］の科目群を配置する。

学生のみなさんには、以上のような本学の目的、また総合文化学科の教育研究上の目的、学位授与方針、教育課程編成・実施の方針をよく理解した上で、個々に合った履修計画を立て、充実した学びの 2 年間を送っていただきたいと思います。

次頁は、みなさんがお持ちの『学生便覧 2019（平成 31 年度）』に記載されている学則の卒業要件に関する条項からの抜粋です。右の表では、上で述べた基礎科目・専門科目それぞれで卒業のために修得しなければならない単位数が一覧できるようになっています。平成 31 年度入学生のみなさんは、この入学年度の学生便覧に記載された学則ならびに履修規定、その他諸規定・細則に従って卒業までの学修活動を行うことになっています。

**【参考】島根県立大学短期大学部学則（抜粋）**

## 第５章 卒業

（卒業の要件）

第 28 条 本学を卒業するためには、次の各号に掲げる要件を満たさなければならない。

《中略》

⑵ 総合文化学科

在学期間を２年以上とし、次の表に掲げる単位数を修得すること

<table>
<tr><th>科目</th><th colspan="2">分野</th><th>必修科目</th><th>選択科目</th><th>各科目計</th><th>合計</th></tr>
<tr><td rowspan="9">基礎科目</td><td rowspan="4">人間と世界の理解</td><td>人間と文化</td><td>—</td><td>2 単位以上</td><td rowspan="4">8 単位以上</td><td rowspan="16">62 単位以上</td></tr>
<tr><td>人間と社会</td><td>—</td><td>2 単位以上</td></tr>
<tr><td>人間と自然</td><td>—</td><td>2 単位以上</td></tr>
<tr><td>地域</td><td>2 単位</td><td>—</td></tr>
<tr><td colspan="2">保健体育</td><td>—</td><td>1 単位以上</td><td>1 単位以上</td></tr>
<tr><td colspan="2">ライフデザイン</td><td>2 単位</td><td>—</td><td>2 単位以上</td></tr>
<tr><td colspan="2">情報リテラシー</td><td>1 単位</td><td>—</td><td>2 単位以上</td></tr>
<tr><td colspan="2">総合文化プロジェクト</td><td>7 単位</td><td>—</td><td>7 単位以上</td></tr>
<tr><td rowspan="7">専門科目</td><td rowspan="4">日本と世界の文化</td><td>「民俗学」から「日本文化論Ⅱ（現代文化）」より</td><td>—</td><td>2 単位以上</td><td rowspan="4">20 単位以上</td></tr>
<tr><td>「英米の社会と文化」から「東アジアの社会と文化Ⅱ」より</td><td>—</td><td>2 単位以上</td></tr>
<tr><td>「文学と文化Ⅰ（日本近代文学 A)」から「文学と文化Ⅴ（英米文学 B)」より</td><td>—</td><td>2 単位以上</td></tr>
<tr><td>「日本文化特論Ⅰ（妖怪学)」から「英米文化特論（へるん)」</td><td>—</td><td>—</td></tr>
<tr><td rowspan="2">言語と文化</td><td>「日本の言語と文化Ⅰ」から「英米の言語と文化 IV」より</td><td>—</td><td>4 単位以上</td><td rowspan="2">8 単位以上</td></tr>
<tr><td>「中国の言語と文化Ⅰ」から「韓国の言語と文化Ⅱ」より</td><td>—</td><td>1 単位以上</td></tr>
<tr><td colspan="2">文化資源の活用</td><td>—</td><td rowspan="2">8 単位以上</td><td rowspan="2">8 単位以上</td></tr>
<tr><td colspan="2">総合文化研修</td><td>—</td></tr>
<tr><td colspan="3">必修を除くすべての基礎科目または専門科目から</td><td>6 単位以上</td><td>6 単位以上</td></tr>
<tr><td colspan="5">単位互換関連科目</td><td>—</td></tr>
</table>

# 【2019年度入学者】開講科目一覧　総合文化学科

2019.03.20

| 科目区分 | | | 授業科目 | 担当者 | 単位数 必修 | 単位数 選択 | 時間数 | 週配当時間 1年次 春学期 | 週配当時間 1年次 秋学期 | 週配当時間 2年次 春学期 | 週配当時間 2年次 秋学期 | 卒業単位 | 卒業単位 | 卒業単位 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 基礎科目 | 人間と世界の理解 | 人間と文化 | 哲学 | [瀬古康雄] | | 2 | 30 | | | 2 | | 2単位以上 | 8単位以上 | | |
| | | | 文学 | 山根繁樹 | | 2 | 30 | 2 | | | | | | | |
| | | | 心理学 | [飯塚由美] | | 2 | 30 | 2 | | | | | | | |
| | | | 音楽 | [新倉健] | | 2 | 30 | | 2 | | | | | | |
| | | 人間と社会 | 経済学 | [大塚茂] | | 2 | 30 | | 2 | | | 2単位以上 | | | |
| | | | 日本国憲法 | [谷口智紀] | | 2 | 30 | | | | 2 | | | | ４大部と共同開講 |
| | | | 市民社会と図書館 | [石井大輔] | | 2 | 30 | | 2 | | | | | | ４大部と共同開講 |
| | | 人間と自然 | 数学 | [奥村泰麿] | | 2 | 30 | 2 | | | | 2単位以上 | | | |
| | | | 人間と自然 | [鹿野一厚] | | 2 | 30 | | | | 2 | | | | |
| | | | 生物と栄養 | [安藤彰朗] | | 2 | 30 | | 2 | | | | | | |
| | | 地域 | しまね地域共生学入門 | 島根県立大学教員 | 2 | | 30 | 2 | | | | 2単位以上 | | | ４大部と共同開講 |
| | | | しまね文化論 | [非常勤講師] | | 2 | 30 | | 2 | | | | | | ４大部と共同開講 |
| | | | しまねボランティア研修 | [目次和恵] | | 1 | 30 | (30) | | (30) | | | | | 集中(通年)、1･2年共通<br>４大部と共同開講 |
| | 保健体育 | | 健康スポーツ概論 | [岸本強] | | 1 | 15 | | 1 | | | | 1単位以上 | | |
| | | | 健康スポーツⅠ | [梶谷朱美] | | 1 | 30 | 2 | | | | | | | |
| | | | 健康スポーツⅡ | [原丈貴] | | 1 | 30 | | | 2 | | | | | |
| | | | 健康スポーツⅢ | [山本ユミ] | | 1 | 30 | | | | 2 | | | | |
| | ライフデザイン | | キャリア・プランニング | キャリア委員会 | 2 | | 30 | | 2 | | | ◎ | 2単位以上 | | |
| | | | インターンシップ | キャリア委員会 | | 1 | 30 | (30) | | | | | | | 春学期集中 |
| | | | キャリア・アップ講座 | [非常勤講師] | | 1 | 15 | | (15) | | | | | | 秋学期集中 |
| | 情報リテラシー | | 情報基礎 | 加藤暢恵 | 1 | | 30 | 2 | | | | ◎ | 2単位以上 | | |
| | | | 情報応用 | 加藤暢恵 | | 1 | 30 | | 2 | | | | | | |
| | | | コンピュータ・リテラシーⅠ | [小倉佳代子] | | 1 | 30 | 2 | | | | | | | |
| | | | コンピュータ・リテラシーⅡ | [小倉佳代子] | | 1 | 30 | | 2 | | | | | | |
| | | | コンピュータ・リテラシーⅢ | [小倉佳代子] | | 1 | 30 | | 2 | | | | | | |
| | | | コンピュータ・リテラシーⅣ | [小倉佳代子] | | 1 | 30 | | | 2 | | | | | |
| 専門科目 | 総合文化プロジェクト | | 総合文化基礎ゼミナール | 総合文化学科教員 | 1 | | 30 | 2 | | | | ◎ | 7単位以上 | 62単位以上 | ４大部と共同開講 |
| | | | 総合文化ゼミナールⅠ | 総合文化学科教員 | 2 | | 90 | | | 3 | | ◎ | | | |
| | | | 総合文化ゼミナールⅡ | 総合文化学科教員 | 2 | | 90 | | | | 3 | ◎ | | | |
| | | | 日本語表現演習 | 総合文化学科教員 | 2 | | 30 | | 2 | | | ◎ | | | |
| | | | 文化情報表現法 | 加藤,[大塚],[小倉] | | 2 | 30 | | | 2 | | | | | |
| | | | 文化情報誌制作 | 山根,[鹿野],[大塚] | | 2 | 30 | | | | 2 | | | | |
| | 日本と世界の文化 | | 民俗学 | [中野洋平] | | 2 | 30 | 2 | | | | 2単位以上 | 20単位以上 | | |
| | | | 日本文化論Ⅰ(表象文化) | 渡部周子 | | 2 | 30 | | 2 | | | | | | |
| | | | 日本文化論Ⅱ(現代文化) | 渡部周子 | | 2 | 30 | | | 2 | | | | | |
| | | | 英米の社会と文化 | Dustin Kidd | | 2 | 30 | | 2 | | | 2単位以上 | | | |
| | | | アフリカの社会と文化 | [鹿野一厚] | | 2 | 30 | | | 2 | | | | | |
| | | | 東アジアの社会と文化Ⅰ | [李暁東] | | 2 | 30 | | (30) | | (30) | | | | 秋学期集中、1･2年共通、<br>隔年開講(2020年度開講) |
| | | | 東アジアの社会と文化Ⅱ | [福原裕二] | | 2 | 30 | | (30) | | (30) | | | | 秋学期集中、1･2年共通、<br>隔年開講(2019年度開講) |
| | | | 文学と文化Ⅰ(日本近代文学A) | 山根繁樹 | | 2 | 30 | | 2 | | | 2単位以上 | | | |
| | | | 文学と文化Ⅱ(日本近代文学B) | 山根繁樹 | | 2 | 30 | | | 2 | | | | | |
| | | | 文学と文化Ⅲ(日本古典文学) | [山村桃子] | | 2 | 30 | | 2 | | | | | | |
| | | | 文学と文化Ⅳ(英米文学A) | 藤吉知美 | | 2 | 30 | | 2 | | | | | | |
| | | | 文学と文化Ⅴ(英米文学B) | 藤吉知美 | | 2 | 30 | | | 2 | | | | | |
| | | | 日本文化特論Ⅰ(妖怪学) | [小泉凡] | | 2 | 30 | | | 2 | | | | | |
| | | | 日本文化特論Ⅱ(しまねの祭りと芸能) | [品川知彦] | | 2 | 30 | | | 2 | | | | | |
| | | | 英米文化特論(へるん) | [松浦雄二] | | 2 | 30 | | (30) | | | | | | |

| 科目区分 | | 授業科目 | 担当者 | 単位数 必修 | 単位数 選択 | 時間数 | 週配当時間 1年次 春学期 | 週配当時間 1年次 秋学期 | 週配当時間 2年次 春学期 | 週配当時間 2年次 秋学期 | 卒業単位 | 卒業単位 | 卒業単位 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 専門科目 | 言語と文化 | 日本の言語と文化Ⅰ | 山村仁朗 | | 2 | 30 | 2 | | | | 4単位以上 | 8単位以上 | | |
| | | 日本の言語と文化Ⅱ | 山村仁朗 | | 2 | 30 | | 2 | | | | | | |
| | | 日本の言語と文化Ⅲ | 山村仁朗 | | 2 | 30 | | | 2 | | | | | |
| | | 英米の言語と文化Ⅰ | 藤吉知美,[中井誠一] | | 2 | 30 | 2 | | | | | | | |
| | | 英米の言語と文化Ⅱ | Dustin Kidd,[中井誠一] | | 2 | 30 | | 2 | | | | | | |
| | | 英米の言語と文化Ⅲ | [玉木祐子] | | 2 | 30 | | | 2 | | | | | |
| | | 英米の言語と文化Ⅳ | [JMマユー] | | 2 | 30 | | | | 2 | | | | |
| | | 中国の言語と文化Ⅰ | [鳥谷聡子] | | 1 | 30 | 2 | | | | 1単位以上 | | | |
| | | 中国の言語と文化Ⅱ | [鳥谷聡子] | | 1 | 30 | | 2 | | | | | | |
| | | 韓国の言語と文化Ⅰ | [崔貞美] | | 1 | 30 | 2 | | | | | | | |
| | | 韓国の言語と文化Ⅱ | [崔貞美] | | 1 | 30 | | 2 | | | | | | |
| | 文化資源の活用 | しまねの文化を歩く | 渡部周子 | | 2 | 30 | 2 | | | | | 8単位以上 | | |
| | | しまね歴史探訪 | [杉岳志] | | 1 | 15 | | | (15) | | | | | 春学期集中 |
| | | 異文化理解演習 | [塩谷もも] | | 2 | 30 | 2 | | | | | | | |
| | | へるん探求 | [小泉凡],[松浦雄二] | | 1 | 15 | | | (15) | | | | | 春学期集中 |
| | | 文化とガイド | Dustin Kidd | | 2 | 30 | | | | 2 | | | | |
| | | 読み聞かせの実践 | [岩田],[尾崎],[内田],[沼田] | | 2 | 60 | | | 2 | | | | | ４大部と共同開講 |
| | 総合文化研修 | 総合文化研修計画Ⅰ | 総合文化学科教員 | | 1 | 15 | 2 | | | | | | | |
| | | 総合文化研修Ⅰ | 総合文化学科教員 | | 1 | 30 | (30) | | | | | | | 春学期集中 |
| | | 総合文化研修計画Ⅱ | Dustin Kidd | | 1 | 15 | 2 | | 2 | | | | | 1･2年共通 |
| | | 総合文化研修Ⅱ | Dustin Kidd | | 2 | 60 | (60) | | (60) | | | | | 春学期集中、1･2年共通<br>４大部と共同開講 |
| | | 海外企業研修 | 総合文化学科教員 | | 2 | 30 | (30) | | | | | | | 春学期集中 |

備考　1　卒業要件を満たすためには、「卒業単位」の項に定める授業科目を履修しなければならない。

2　半期に履修することができる単位数の上限は、原則として２５単位までとする。ただし、集中講義科目についてはこのかぎりではない。

3　◎を付した授業科目は必修科目である。

# 総合文化学科 学びの概念図

（卒業に必要な単位　62単位以上）

| 1年次 | 2年次 |
|---|---|

## 基礎科目

【人間と世界の理解】　哲学／経済学／数学／人間と自然／しまね地域共生学など

【保健体育】　健康・スポーツ科学概論／健康スポーツ　など

【ライフデザイン】キャリア・プランニング／インターンシップ／キャリア・アップ講座など

【情報リテラシー】　情報基礎／情報応用／コンピュータ･リテラシー　など

## 専門科目

【総合文化プロジェクト】学びの集大成

- 総合文化 基礎ゼミナール
- 日本語表現演習
- 総合文化 ゼミナールI 文化情報表現法
- 総合文化 ゼミナールⅡ 文化情報誌制作

【日本と世界の文化】
民俗学／日本文化論／英米･アフリカ･東アジアの社会と文化／文学と文化　など

【言語と文化】
日本の言語と文化／英米の言語と文化／中国の言語と文化／韓国の言語と文化　など

【文化資源の活用】
しまねの文化を歩く／異文化理解演習／文化とガイド／へるん探求／読み聞かせの実践 など

【総合文化研修】
総合文化研修Ⅰ[国内]／総合文化研修Ⅱ[海外語学]／海外企業研修　など

## ディプロマポリシー

### 知識・技能

- 島根、日本および世界の文化に関する基礎的な知識を身に付けている。
- 情報化に対応したコンピューターの基礎的な技能を身に付けている。
- 国際化に対応した言語の基礎的な運用能力を身に付けている。

### 思考力・判断力・表現力

- 総合文化学科における幅広い学びの中から、主体的に課題を設定することができる。
- 設定した課題について、自らが思考・判断・表現するために必要な、日本語の基礎的能力を身に付けている。

### 関心・意欲・態度

- 身の回りの地域で生起している諸課題と主体的にかかわる態度を身に付けている。

### 取得を支援する資格

- ITパスポート・サービス接遇検定
- 観光英語検定　・TOEIC
- 実用英語技能検定　・中国語検定
- CS検定　など

# 【総合文化学科】
# 基礎科目

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 哲学 | | | | | | |
| 担当教員 | 瀬古　康雄 | | | | | | |
| 科目分類 | 基礎科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 2 | 配当期 | 春学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M6010040 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 哲学への入門として、最初に西洋哲学を概観し、自分自身への問いや自分の住む世界・宇宙についての哲学的な問いをとりあげ、生と死、孤独、実存など、だれもが直面することがらについて考えます。 次いで、仏教のふるさとインドの哲学を取り上げ、東洋ではどんな思索がなされ、その思索を育んだ座禅や瞑想とはどんなものなのか、実際に黙想や呼吸法をやってみたりして、難解そうな哲学をできるだけわかりやすく解説します。 |
| 授業の到達目標 | この授業では、受講生に毎回、自由に質問や疑問を書いてもらい、Q&A の形でそれらに答えながら授業を進めます。受講生の目標は次の通り。<br>・哲学者たちのユニークな冒険を興味深く感じとることができる。<br>・自分自身の「わからなさ」、「生きづらさ」を自分なりに理解し表現できるようになる。<br>・クラスの皆が、何を思い、どんなことを考えているのか、関心を持てるようになる。<br>・西洋の哲学と東洋の哲学を比較しながら自分なりに考えることができるようになる。 |
| 授業計画 | 第１回　哲学の始まり－－古代ギリシア哲学の冒険<br>第２回　深まる謎－－人間であるとはどういうことか<br>第３回　哲学の方法－－ユニークな哲学者たちの「謎」の解き方<br>第４回　西洋哲学の発展（その１）－－「我思う、ゆえに我あり」<br>第５回　西洋哲学の発展（その２）－－「不完全性こそが人間の証明である」<br>第６回　東洋の人間学（その１）「十牛図」－－「自分探し」に隠された謎<br>第７回　インドの風土－－インドの街角に見る生老病死と悟り<br>第８回　インド哲学の核心－－ウパニシャッドの「梵我一如」と仏教の「無我（無心）」<br>第９回　インド哲学の発展（その１）－－「マハーバーラタ」に見る人生修行<br>第 10 回　インド哲学の発展（その２）－－仏陀の慈悲の思想とガンディーの非暴力の思想<br>第 11 回　東洋の人間学（その２）「道」－－「道を極めること」と「無為自然に生きること」<br>第 12 回　「存在と無」－－「無」をめぐる西洋の思索と東洋の思索<br>第 13 回　西と東を結ぶ道「シルクロード」の今昔－－戦乱･テロと平和・寛容の交錯する歴史<br>第 14 回　シルクロードから日本へ－－火山列島日本の「震災と無常観（もののあはれ）」<br>第 15 回　宮沢賢治の心象世界－－生命体としての宇宙・地球･人間･生きものたちの「共生」<br>まとめ・定期試験 |
| テキスト | テキストは使用せず、そのつど資料を配布します。 |
| 参考文献 | 毎回、関連する参考文献を提示します。 |
| 評価方法 | Q&A（４０%）・小レポート（３０%）と筆記試験（３０%）により総合的に評価します。 |
| 自己学習に関する指針 | 受講生は毎回、質問用紙に質問や意見、自分の答えや考え方などを記入して提出する必要があります。各自の Q&A は授業テーマに即して匿名で紹介されるので、クラスの人たちの見解も参考にしつつ自分の考え方を吟味していけます。また、宿題の２～３の小レポートについても、同様に反芻していけます。 |
| 履修上の指導・留意点 | 授業中の Q&A の他に、授業後に教室で、あるいは、質問内容に応じて講師控室や e-mail、哲学カフェなどで対応します。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 文学 | | | | | | |
| 担当教員 | 山根　繁樹 | | | | | | |
| 科目分類 | 基礎科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 春学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M6010020 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 日本の近現代文学はいかなる内実を持ち、そこにいかなる価値を見出せるのか。「文学」では、明治以降の詩歌、小説、童話など具体的な作品を概観しながら、文学の面白さやその価値にふれる。その際、作品個々にアプローチする方法を紹介し、学生自身が文学を主体的に読む姿勢を養う。また、映画やマンガ、アニメーションなども教材として取り上げ、文学が周辺分野といかに関わっているのかも確かめる。それらによって、文学を分析するための観点を具体的に教授する。 |
| 授業の到達目標 | （１）文学ジャンルの広がりを説明することができる。<br>（２）文学作品について自分の見解を持つことができる。<br>（３）文学作品と隣接するジャンルの関わりについて説明することができる。 |
| 授業計画 | 第１回　オリエンテーション「文学」とは何か<br>第２回　短歌の出発<br>第３回　俳句の出発<br>第４回　口語自由詩まで<br>第５回　現代短歌の世界<br>第６回　現代俳句の世界<br>第７回　現代詩の展開<br>第８回　童話の世界<br>第９回　言文一致の誕生と展開<br>第 10 回　戦前の小説<br>第 11 回　戦後の小説<br>第 12 回　文学と映画<br>第 13 回　文学とアニメ<br>第 14 回　文学とマンガ<br>第 15 回　文学作品に挑戦<br>定期試験 |
| テキスト | プリント配布 |
| 参考文献 | 伊藤整『改訂　文学入門』（講談社文芸文庫）<br>佐々木敦『ニッポンの文学』（講談社現代新書） |
| 評価方法 | 試験（７０％）作業課題（３０％） |
| 自己学習に関する指針 | 授業で扱った作品については、必ず読んで復習しておいてください。 |
| 履修上の指導・留意点 | 質問は、その内容に応じて、授業時間中・研究室・e-mail で対応します。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 心理学 | | | | | | |
| 担当教員 | 飯塚由美 | | | | | | |
| 科目分類 | 基礎科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 春学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M6010010 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | ⑴多様な心理学の分野とその歴史や基本理念の理解⑵感覚・知覚、学習、記憶、感情・動機づけ、発達、臨床などの分野⑶性格・パーソナリティ、社会と人間行動･心理、また、地域や社会との関わりなど応用的な心理学の分野についての基礎理論を修得する。 |
| 授業の<br>到達目標 | 心理学的の立場から、個人の心の特性と社会における人間行動を理解し、その基本理論や知識の修得を目指します。<br><br>（１）多様な心理学の分野とその基礎理論が理解できるようになります。<br>（２）感覚・知覚、学習、記憶、感情・動機づけ、発達、臨床などの分野の理解が深まります。<br>（３）性格・パーソナリティ、社会との関わりの中での人間行動と心理、応用心理学の分野についての基礎が理解できるようになります。 |
| 授業計画 | 第１回　心理学とは（オリエンテーション）<br>第２回　知覚と認知の世界（１）感覚器官、図と地、反転図形<br>第３回　知覚と認知の世界（２）錯視、奥行き知覚など<br>第４回　学習と記憶の世界（１）古典的学習、オペラント学習、社会的学習<br>第５回　学習と記憶の世界（２）記憶　感覚記憶、短期記憶、長期記憶<br>第６回　感情・動機づけの世界　人の感情、欲求、帰属<br>第７回　発達と成長の世界　ピアジェの理論、分離不安など<br>第８回　適応と臨床の世界　人の適応、フロイトとユングの理論、心理療法など<br>第９回　性格・パーソナリティの世界（１）　基礎理論<br>第 10 回　性格・パーソナリティの世界（２）　評価と検査法<br>第 11 回　社会と人間の世界　社会生活と人間行動、地域と人間<br>第 12 回　自己と対人の心理　対人魅力、対人認知、対人関係、コミュニケーション<br>第 13 回　社会・集団と組織の心理（１）　集団の特性、社会的影響<br>第 14 回　社会・集団と組織の心理（２）　社会的スキル、援助<br>第 15 回　応用の心理学と最新の心理学動向 |
| テキスト | 開講までに紹介します。<br>必要に応じ、資料やプリントを配布します。 |
| 参考文献 | 『心理学・入門 ―心理学はこんなに面白い』　サトウ タツヤ・渡邊 芳之（著）　有斐閣アルマ<br>『イラストレート心理学入門』　第 2 版　斉藤勇著　誠信書房 |
| 評価方法 | 成績は、小テスト（70%）や課題(20%)、授業への参加姿勢(10%：発表、コメント・質問など)により総合的に評価します。 |
| 自己学習に<br>関する指針 | |
| 履修上の<br>指導・留意点 | |

| 授業科目 | 音楽 | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 担当教員 | 新倉　健 | | | | | | |
| 科目分類 | 基礎科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 秋学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M6010030 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 17 世紀のはじめにフィレンツェで誕生したと言われるオペラは、声楽・オーケストラ・合唱など、各種演奏形態の総合であると同時に、舞台美術・衣裳・照明や文学・演劇などを統合した総合芸術である。この授業では、バロックから 20 世紀のまでの主要なオペラ作品を題材として取り上げ、その音楽史における位置付け、演出や美術の特長などを概説しながら DVD や VIDEO を鑑賞する。 |
| 授業の到達目標 | (1) 総合芸術としてのオペラに興味関心を持って鑑賞することが出来、鑑賞を通じて 17 世紀から 20 世紀に至る西洋音楽史の大きな流れを把握できる。<br>(2) 演出や舞台美術などが作品の表現とどのように関わっているかを感得できる。<br>(3) 様々な時代の音楽様式に触れ、オペラと社会とのつながりについて考えることができる。 |
| 授業計画 | 第１回　ガイダンス：オペラの誕生<br>第２回　バロックのオペラ：モンテヴェルディ作曲「オルフェオ」<br>第３回　古典派のオペラⅠ：モーツァルト作曲「フィガロの結婚」<br>第４回　古典派のオペラⅡ：モーツァルト作曲「ドン・ジョヴァンニ」<br>第５回　古典派のオペラⅢ：モーツァルト作曲「コシ・ファン・トゥッテ」<br>第６回　古典派のオペラⅣ：モーツァルト作曲「魔笛」<br>第７回　ロマン派のオペラⅠ：ウェーバー作曲「魔弾の射手」<br>第８回　ロマン派のオペラⅡ：ビゼー作曲「カルメン」<br>第９回　ロマン派のオペラⅢ：プッチーニ作曲「ラ・ボエーム」<br>第 10 回　ロマン派のオペラⅣ：ヴェルディ作曲「トゥランドット」<br>第 11 回　ワーグナーのオペラ改革：「トリスタンとイゾルデ」<br>第 12 回　20 世紀のオペラⅠ：バルトーク作曲「青髭公の城」<br>第 13 回　20 世紀のオペラⅡ：プロコフィエフ作曲「三つのオレンジへの恋」<br>第 14 回　20 世紀のオペラⅢ：ベルク作曲「ヴォチェック」<br>第 15 回　まとめ：総合芸術としてのオペラ |
| テキスト | 授業毎にプリント資料を配布 |
| 参考文献 | |
| 評価方法 | |
| 自己学習に関する指針 | 授業で扱った作品などについて、自主的に鑑賞の機会を設けて学習する |
| 履修上の指導・留意点 | 授業毎にプリント資料を配布し、ミニ・レポートを課す |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 経済学 | | | | | | |
| 担当教員 | 大塚　茂 | | | | | | |
| 科目分類 | 基礎科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 秋学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M6010060 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 具体的で身近な経済事象を取り上げながら経済の基本的な仕組みを理解し、いま私たちが生きている時代はどんな時代なのか、どんな課題を抱えているのか、といった大きな問題を考えていきます。同時に、基礎的な経済用語についての知識を深め、経済関連情報を適切に処理・判断する力を蓄えていきます。 |
| 授業の到達目標 | １．基礎的な経済用語について理解を深める。<br>２．経済の動きに関心を持ち、何が起こっているか考える姿勢を身につける。<br>３．重要な経済政策に関して当否を判断できるようになる。 |
| 授業計画 | 第１回　価格と物価<br>第２回　経済循環<br>第３回　景気変動<br>第４回　株式会社<br>第５回　会社の変容<br>第６回　格差と貧困<br>第７回　雇用と労働（1）<br>第８回　雇用と労働（2）<br>第９回　規制と自由<br>第 10 回　資本主義<br>第 11 回　財政の役割<br>第 12 回　所得税<br>第 13 回　消費税<br>第 14 回　税の原理<br>第 15 回　まとめ（現代の課題）<br>定期試験 |
| テキスト | テキストは使用しません。毎回、プリントを配布します。<br>プリントは試験のときに持ち込み可としますので大切に保管してください。 |
| 参考文献 | 神野直彦『「分かち合い」の経済学』岩波新書、2010 年 |
| 評価方法 | 定期試験（70%）、毎回のミニレポート（30%） |
| 自己学習に関する指針 | 授業で配布したプリントは、次の授業までにもう一度目を通すこと。 |
| 履修上の指導・留意点 | 疑問に思ったことは積極的に質問してください。<br>逆に、質問されたら積極的に答えてください。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 日本国憲法 | | | | | | |
| 担当教員 | 谷口智紀 | | | | | | |
| 科目分類 | 共通基礎 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 2 | 配当期 | 秋学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M6010070 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 「憲法を学ぶ」ことは、憲法の条文を暗記することではない。法は、社会生活における具体的な問題を解決するためのルールであり、憲法を学ぶことは、その処方箋を見つけることにある。<br>例えば、ＡＩ（人工知能）の発達やビック・データの活用等により、私たちの生活水準は大きく向上しているが、一方で、プライバシー（個人情報）の問題が指摘されている。憲法は私たちのプライバシーをどのように保障しているのであろうか。<br>また、憲法の条文には、私たちが普段使っている言葉が用いられている。私たちは「平等」という言葉を「みんな同じ」という意味で使うことがあるが、憲法で用いられる「平等」は、「みんな同じ」ということを保障しているのであろうか。<br>本講義では、歴史的な出来事や判例などを素材として、憲法の基本的な考え方を学ぶことを目指す。 |
| 授業の到達目標 | ⑴憲法の基本的な考え方を習得する。<br>⑵法的なものの考え方を身につける。 |
| 授業計画 | 第１回：憲法とは何か、日本国憲法の成立、日本国憲法の基本原理<br>第２回：基本的人権（１）　基本的人権総論、人権享有主体<br>第３回：基本的人権（２）　幸福追求権<br>第４回：基本的人権（３）　法の下の平等<br>第５回：基本的人権（４）　内心の自由<br>第６回：基本的人権（５）　表現の自由とその制限<br>第７回：基本的人権（６）　経済的自由権<br>第８回：基本的人権（７）　人身の自由<br>第９回：基本的人権（８）　社会権<br>第 10 回：国民主権と選挙<br>第 11 回：統治機構（１）　国会<br>第 12 回：統治機構（２）　内閣<br>第 13 回：統治機構（３）　裁判所<br>第 14 回：平和主義<br>第 15 回：日本国憲法のまとめ<br>第 16 回：定期試験 |
| テキスト | 吉田仁美編『スタート憲法［第２版補訂版］』、成文堂、〇年、〇円 |
| 参考文献 | 講義の中で紹介する。 |
| 評価方法 | レポート等（20%）、定期試験（80%） |
| 自己学習に関する指針 | 授業前に、テキストの該当箇所を読んでおくこと。また、授業中に紹介した参考文献を読んでおくこと。 |
| 履修上の指導・留意点 | |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 市民社会と図書館 | | | | | | |
| 担当教員 | 石井大輔 | | | | | | |
| 科目分類 | 基礎科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 秋学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M6010050 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 市民社会における知識情報の蓄積、保存、流通の観点から、民主主義を下支えする社会的なシステムとしての図書館の機能や社会における意義や役割について理解することを目的とする。「図書館の歴史と現状」「図書館の構成要素」「民主主義と図書館」「知識基盤社会と図書館」「生涯学習社会と図書館」「公共図書館の成立と発展」「館種別図書館と利用者のニーズ」「図書館職員の役割と資格」「類縁機関との関係」「知的自由と図書館」「今後の課題と展望」等について解説する。 |
| 授業の到達目標 | ・ 市民社会における図書館の機能や役割について基礎的な知識を習得する。<br>・ 「図書館とは何か」という問いに対して、自分なりの解を導き出す。<br>・ 他人に「図書館とは何か」について説明できるようになる。 |
| 授業計画 | 第１回　「図書館」を学ぶとは<br>第２回　図書館の基礎①：図書館の構成要素と機能<br>第３回　図書館の基礎②：図書館の制度（憲法、教育基本法、社会教育法、図書館法）<br>第４回　図書館の社会的意義①：民主主義と図書館<br>第５回　図書館の社会的意義②：知識基盤社会と図書館<br>第６回　図書館の社会的意義③：生涯学習社会と図書館<br>第７回　図書館の社会的意義④：知的創造と図書館<br>第８回　公共図書館の成立と展開<br>第９回　日本の公共図書館①：明治～戦前の図書館<br>第 10 回　日本の公共図書館②：戦後の図書館<br>第 11 回　図書館の種類と利用者①（国立図書館、公共図書館）<br>第 12 回　図書館の種類と利用者②（大学図書館、学校図書館、専門図書館）<br>第 13 回　図書館員とライブラリアンシップ<br>第 14 回　知的自由と図書館、図書館の自由<br>第 15 回　図書館の課題と展望 |
| テキスト | なし |
| 参考文献 | ・二村健『図書館の基礎と展望』学文社、2011 年　1,800 円+税<br>・『図書館情報学用語辞典　第 4 版』丸善、2013 年　3,800 円+税<br>・『図書館ハンドブック　第 6 版補訂 2 版』日本図書館協会、2016 年　5,500+税 |
| 評価方法 | ・平常点（50%）、レポート（20%）、試験（30%）<br>・平常点では①オピニオンペーパの記述、②授業への参加を評価する。授業への参加とは授業内での教員からの問いかけに対する発言のほか、挙手による回答の回数をカウントする。 |
| 自己学習に関する指針 | 本学の図書館ばかりでなく、あらゆる図書館を自主見学して図書館に親しむことが大切です。 |
| 履修上の指導・留意点 | |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 数学 | | | | | | |
| 担当教員 | 奥村　泰麿 | | | | | | |
| 科目分類 | 基礎科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 春学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M6010080 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 数学を「楽しさ」という観点で見つめ、数学の良さ、美しさ、不思議さを知ったり，身近な生活の中に数学を見い出してその有用性について考えたりすることを通して、教養を深めたい。<br>一方的な受け身な学習とならないよう参加型の学習を適宜取り入れる。 |
| 授業の到達目標 | ⑴「数学」の４つの領域の独自な「楽しさ」を知る。<br>⑵「数学」という教科とそれ以外の様々なこととのつながりを考える。<br>⑶「数学」に対して新たなイメージをもつ。 |
| 授業計画 | 第１回　ガイダンス　数について<br>第２回　数と式（1）分数と小数<br>第３回　数と式（2）色々な無限小数<br>第４回　数と式（3）美しさにある「比」<br>第５回　関数（1）「関数」とは何か<br>第６回　関数（2）　放物線の力<br>第７回　関数（3）「関数」を使って<br>第８回　図形（1）　平面図形<br>第９回　図形（2）　空間図形<br>第 10 回　図形（3）「図形」を使って<br>第 11 回　確率･統計（1）　確率<br>第 12 回　確率･統計（2）　統計<br>第 13 回　確率･統計（3）「確率・統計」を使って<br>第 14 回　数学と音楽<br>第 15 回　ふりかえり<br>定期試験 |
| テキスト | 特になし。 |
| 参考文献 | 必要に応じて資料などを配布します。 |
| 評価方法 | 定期筆記試験（７０%）、個人用ふりかえりシート（３０%） |
| 自己学習に関する指針 | ・授業後個人用ふりかえりシート記入します。<br>・適宜、予習・復習のための課題を出します。 |
| 履修上の指導・留意点 | ・授業では積極的に参加しよう。<br>・予習復習の課題には、自分が納得ゆくまで取り組もう。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 人間と自然 | | | | | | |
| 担当教員 | 鹿野　一厚 | | | | | | |
| 科目分類 | 基礎科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 2 | 配当期 | 秋学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M6010100 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 現代は、「人類の時代」と呼ばれるほど人間が繁栄している時代である。20 世紀の初頭には約 17 億人だった世界人口は、爆発的に増加していまや 70 億人を突破している。しかし、地球温暖化や生物多様性の危機などはますます深刻となり、このまま右肩上がりに人口が増え続けることは困難となりつつある。<br>この授業では、生物学と人類学の知見を総合しながら、人間は自然とどのように関わっていくのかについて考えてゆく。具体的には、なぜ人間にとって自然が必要なのか、そして人間は自然に対して何をしてきたのかを学んだうえで、私たちはこれからどうすればよいのかについて考える。<br>授業期間中に 2～3 回程度、実際に自然と触れ合う機会を設ける予定である。 |
| 授業の到達目標 | ①生態系・生物多様性・生態系サービス・人類の進化に関する基礎的な知識を習得する。<br>②人間は自然に対して何をしてきたのかについて理解し、私たちはこれからどうすればよいのかについて自分なりに考えることができる。<br>③人間と自然との関係から学んだ様々なことを自己の言葉で説明することができる。 |
| 授業計画 | 第１回　はじめに／野外観察(1)<br>第２回　人間と自然との関係(1)：生態系と人間<br>第３回　人間と自然との関係(2)：生態系と生物多様性<br>第４回　人間と自然との関係(3)：生態系の恩恵<br>第５回　野外観察(2)<br>第６回　人間はどこから来たのか(1)：生物の進化<br>第７回　人間はどこから来たのか(2)：人類進化の見取図(1)<br>第８回　人間はどこから来たのか(3)：人類進化の見取図(2)<br>第９回　人間は何をしてきたのか(1)：生物多様性の危機(1)<br>第 10 回　人間は何をしてきたのか(2)：生物多様性の危機(2)<br>第 11 回　人間は何をしてきたのか(3)：人間はなぜ自然を壊すのか<br>第 12 回　野外観察(3)<br>第 13 回　人間はどこへ行くのか(1)：地球の限界<br>第 14 回　人間はどこへ行くのか(2)：私たちはどうすればよいのか(1)<br>第 15 回　人間はどこへ行くのか(3)：私たちはどうすればよいのか(2)<br>定期試験 |
| テキスト | テキストはとくに使用しないが、授業中にレジュメや資料を配布する。 |
| 参考文献 | 『センス・オブ・ワンダー』　レイチェル・カーソン　1996 年　新潮社<br>『〈生物多様性〉入門』　鷲谷いづみ　2010 年　岩波ブックレット 785<br>『文明崩壊 ：滅亡と存続の命運を分けるもの（上・下)』　ジャレド・ダイアモンド　2012 年　草思社文庫<br>その他、授業中に随時紹介する。 |
| 評価方法 | 成績は、授業への取り組み状況（40%)、期末試験（60%）によって総合的に評価する。<br>（到達目標①②③は期末試験によって評価するが、到達目標②③はコミュニケーションカードによっても評価する。） |
| 自己学習に関する指針 | ＊授業には熱心に取り組むこと。そして、毎回、コミュニケーションカードに自分の考えや疑問・感想などをできるだけたくさん書くこと。 |
| 履修上の指導・留意点 | |

| 授業科目 | 生物と栄養 | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 担当教員 | 安藤彰朗 | | | | | | |
| 科目分類 | 基礎科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 秋学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M6010090 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | ［授業の目的・ねらい］<br>私たちヒトも哺乳動物も「食べる」ことなしに生命・生活は成り立ちません。この講義では，哺乳類の一員としてのヒトにおける，食べ物とからだ，栄養素の役割，食べもと健康について理解を深めることを目的とします。<br>［授業全体の内容の概要］<br>生物（特にヒトを含む哺乳動物）のからだのつくりを中心に、生物個体から出発して、その内部構造（器官や細胞）へと展開するからだのしくみの基盤となる内容を学ぶ。引き続き、生物・生命のもう一つの特性である「栄養」や「代謝」について理解を進め、からだの構成成分と栄養素、生命維持や活動のエネルギー代謝と栄養素等、からだのしくみと栄養の視点から、食べ物が栄養に変わる旅（過程）を知るとともに、生物と栄養について理解を深める。そして、応用編として「人間（ヒト）と健康」に関わる諸課題についても考察する。 |
| 授業の到達目標 | １．ヒトや他の哺乳動物の基本的な内臓の構成，特に消化器系の臓器の名称と働きを説明できる。<br>２．栄養素の特徴および，からだの中での役割を説明できる。<br>３．ヒトについて食べ物とからだの関係，食べ物と健康の係りについて認識し，自身の生活を踏まえて，自分の考えを述べることができる。 |
| 授業計画 | １ 「生物と栄養」の講義について，ヒトのからだの概要<br>２ ヒトの消化器系の全体像，口腔の話（口から始まる消化作用）<br>３ 胃の話（主役は３つの細胞）・腸の話（絨毯のような内面）<br>４ 胃と腸のビデオ視聴<br>５ いろいろな哺乳動物の歯について<br>６ 食性が異なる哺乳動物は，どのような消化管を持っているか<br>７ 糖質の消化・吸収，糖質の栄養<br>８ タンパク質の消化・吸収，タンパク質の栄養<br>９ 脂質の消化・吸収，脂質の栄養<br>10 カルシウムの役割，骨と筋肉のビデオ視聴<br>11 エネルギー代謝について<br>12 あなた自身はどんな食事をしてますか<br>13 食事バランスガイドについて<br>14 食べ物と健康について<br>15 全体のまとめ<br>定期試験　試験あり |
| テキスト | テキストは特に用いません。必要に応じて毎回プリントを配布します。 |
| 参考文献 | ①「イラスト栄養学総論」城田知子ほか著，東京教学社，<br>②「新版ヒトと自然」荒井秋晴ほか著，東京教学社， |
| 評価方法 | 試験は，消化器系や栄養素などについての知識を問う問題と講義で取り上げたテーマについての記述問題を課します。<br>評価基準は，質問感想カードの提出 20%，課題レポートの提出 30%，試験 50%を考慮して総合的に評価します。 |
| 自己学習に関する指針 | 特定のテキストは用いないので，授業中に適宜ノートを取る，配布資料の余白などにメモを取ることを勧めます。復習する際にそれらを役立てて欲しいと考えています。 |
| 履修上の指導・留意点 | 科目名の通り，主として解剖生理学，生物学，化学，栄養学などに関連するいわゆる理系の内容や計算を含みます。また，臓器名，元素記号や化学式，馴染みのないカタカナの物質名なども沢山出てきます。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | しまね地域共生学入門 | | | | | | |
| 担当教員 | 島根県立大学教員 | | | | | | |
| 科目分類 | 基礎科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 春学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 必修 | 単位数 | 2 | 授業コード | M6010110 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | この講義は、各キャンパスにおける専門分野を学習する前の段階において、島根県が数十年来直面している人口減少・少子高齢化・過疎化という地域の諸課題を様々な角度から講義する。そうした課題は、今後のわが国における多くの地域において予期されるが、それぞれの主体の強みを生かした連携と協力を継続させるという、「共生」により解決しなければならない。本講義を通じて、地域課題への対応がいかに困難で複雑なものであるかの再認識を促し、複合的対応の重要性についての理解を深める。<br>また、学問的見地においてもひとつの学問領域から得られる知見のみで解決できるものではない。本講義では、特定の学問領域にとどまらず、複眼的に物事をとらえ分析することの重要性も学ぶ。<br>これらの目的に照らし、さしあたり本講義では 3 キャンパスの教員がそれぞれの専門分野から島根地域にかかわる諸課題についての解説を平易に行う。また、オムニバス講義ゆえに全体としての体系性が失われないよう、本講義では人々の人生における代表的なライフステージ(3 段階)を共通で用いる。このことを通して、学生は島根県内の地域課題に関する基礎知識・周辺知識を習得する。<br>本講義を履修したのち、自らの関心あるテーマについて仮説を立てて実証をしたり、地域に出て「実践する」ことが求められるが、その際に関心のあるテーマを自ら発見できるよう積極的な姿勢で受講してもらいたい。<br>※本講義は、原則的に、講義中継システムを活用して 3 キャンパス同時の遠隔講義形式にて実施する。 |
| 授業の到達目標 | ・島根県の課題について理解し、日本全体の課題のなかでの位置づけを説明できる。<br>・地域社会の諸課題の解決に向けて各主体が連携・協力する「共生」により解決にあたることや、自らも複数の学問領域の考え方を学ぶことの重要性について理解できる。<br>・以降の学生生活を通じて自ら実践的に地域の諸課題に取り組むことの重要性を理解し、そのテーマを設定できる。 |
| 授業計画 | 第１週　島根県立大学へようこそ――開講にあたって(仮題)〔清原正義・全学開講責任者〕<br>※オリエンテーションも併せて実施。<br>第２週　データでみる島根のすがた〔林　秀司〕<br>第３週　しまねの地域課題――幼少年期を題材として 藤原眞砂<br>第４週　しまねの地域課題――幼少年期を題材として 三瓶まり<br>第５週　しまねの地域課題――幼少年期を題材として 岩田英作<br>第６週　しまねの地域課題――青壮中年期を題材として 松尾哲也<br>第７週　しまねの地域課題――青壮中年期を題材として 岡安誠子<br>第８週　しまねの地域課題――青壮中年期を題材として 藤原映久<br>第９週　しまねの地域課題――老年期を題材として 久保田典男<br>第１０週　しまねの地域課題――老年期を題材として 細川　優<br>第１１週　しまねの地域課題――老年期を題材として 前林英貴<br>第１２週　島根県の政策展開〔島根県政策企画監室〕<br>第１３週　地域課題への実践的取組〔未定〕<br>第１４週　まとめ〔全学開講責任者〕<br>第１５週　松江キャンパスでの学びに向けて〔学部長 または 副学長〕 |
| テキスト | 各週の担当教員が指定することがある。 |
| 参考文献 | 各週の担当教員が紹介する。 |
| 評価方法 | 授業に出席することを前提とし、授業への取り組み姿勢、各週の授業で実施する小テストの結果を総合的に判断して評価を行う。 |
| 自己学習に関する指針 | |
| 履修上の指導・留意点 | 本講義は地域の抱える課題について包括的に概論する講義ではあるが、本講義のみでは大学生が学ぶべき内容を完全にマスターできるわけではない。本講義は 1 年生を標準履修年次としており、どちらかと |

| | |
|---|---|
| | いえば、これからの修学期間で地域課題への対応に取り組むにあたり、必要となる予備知識や一般知識の習得を目指す、いわば入門科目としての位置づけである。したがって、受講したのち、より専門的な見地から詳細な議論を行う諸科目の履修により補完することが望ましい。具体的には、地域志向科目の履修がひとつの目安となる。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | しまね文化論 | | | | | | |
| 担当教員 | 工藤泰子 | | | | | | |
| 科目分類 | 基礎科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 秋学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M8010010 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 本科目は、松江城、出雲大社、石見銀山など、島根県が有する豊かな特色ある地域文化・地域資源について、基礎的な知識を修得し、しまねの地域資源の価値と、それらに誇りを持って未来へ継承することの意義を理解することを目的とする。授業はオムニバス形式で行い、各テーマにふさわしい専門家や実践者による講義を通して、島根県における伝統文化の歴史的背景や文化的価値、文化を伝承する上での課題や未来へ向けた取組みなどを学習する。さらに、学外見学会を実施することで学習内容の理解を深める。 |
| 授業の到達目標 | 出雲、石見、隠岐が有する様々な文化について理解し、それぞれの特徴や歴史的背景を説明できるようになる。 |
| 授業計画 | 第１回　ガイダンス（人間文化学部教員）<br>第２回　神々の国しまね(1)（出雲大社）　外部講師：千家和比古 氏（出雲大社権宮司）<br>第３回　神々の国しまね(2)（神話）　外部講師：錦田剛志 氏（万九千神社宮司）<br>第４回　しまねの日本遺産（たたら製鉄）　外部講師：田部長右衛門氏（田部家 25 代当主）<br>第５回　しまねの地質資源（隠岐世界ジオパーク）外部講師：野辺一寛 氏（隠岐の島町役場課長）<br>第６回　しまねの世界遺産（石見銀山）　外部講師：仲野義文 氏（石見銀山資料館館長）<br>第７回　しまねの自然　外部講師：中村唯史 氏（島根県立三瓶自然館）<br>第８回　フィールドワーク事前学習（人間文化学部教員）<br>第９回　フィールドワーク（石見銀山）[11 月 23 日（土）実施予定]<br>第 10 回　しまねの食文化(1)（松江の茶文化）　外部講師：中村寿男 氏（中村茶舗代表取締役）<br>第 11 回　しまねの食文化(2)（次世代への継承）外部講師：景山直観 氏（一文字家社長）<br>第 12 回　しまねの国宝（松江城）　外部講師：卜部吉博 氏（元松江市松江城調査研究室長）<br>第 13 回　しまねの伝統芸能（神楽）　外部講師：藤原宏夫 （島根県教育庁文化財課）<br>第 14 回　しまねの文化の魅力　外部講師　東芝国際交流財団 島根文化研究者(予定)<br>第 15 回　しまねの文化の魅力を考える―グループワーク、学生発表<br>※外部講師招聘のため、順番が入れ替わる場合がある。 |
| テキスト | 適宜プリントを配布する。 |
| 参考文献 | |
| 評価方法 | 各回の小テストの結果、課題提出、コメントシート、発表など、授業への取組み状況を総合的に判断して評価を行う。 |
| 自己学習に関する指針 | |
| 履修上の指導・留意点 | 11 月 23 日（土）にフィールドワーク実施予定。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | しまねボランティア研修 | | | | | | |
| 担当教員 | 目次　和恵 | | | | | | |
| 科目分類 | 基礎科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | １・２ | 配当期 | 通年 |
| 授業形態 | 講義・演習 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 1 | 授業コード | M6010120 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | ボランティア活動を始めようとする学生に、県立青少年の家における体験学習プログラムを提供することにより、ボランティアの役割を体得し、他者と関わりながら主体的に活動することのできる人間になることを目指す。そのためにボランティア活動を体験し、ボランティア活動の意義及びボランティアの役割を理解したり、体験活動をしながら場に応じて必要な支援について学修したりする。 |
| 授業の<br>到達目標 | １. ボランティア活動の意義及びボランティアの役割を理解できる。<br>２. 他者との関わり方を考え、協力して活動できる。<br>３. 体験学習について理解し、場に応じて適切な支援ができる。 |
| 授業計画 | 第１回　事前学習…＜4 月 18 日(木)18:10～19:40　1 コマ：県立大学松江キャンパス＞<br>（青少年の家と主催事業についての理解・授業スケジュールの理解）<br>第２回　実習①「ボランティア(体験活動支援者）養成講座」…＜6 月 15 日～16 日（土・日）：県立青少年の家＞<br>・講義（ボランティア活動について・アイスブレイク・グループワーク・安全講習）<br>・演習（青少年の家のプログラム体験・振り返り）<br>第３回　実習②「ボランティア(体験活動支援者）実習」(7 月～12 月で１つを選択：県立青少年の家＞<br>　選択事業の例<br>・サマーチャレンジ（小 5～中 3 対象）　　…8 月<br>・キッズチャレンジ（小 3～小 4 対象）　　…7 月～11 月（３回）<br>・にんにんチャレンジ（年長～小 2 対象）…11 月～12 月（３回）<br>※選択可能な事業の詳細については事前学習において発表する。<br>第４回　事後学習＜１月 25 日(土)AM　３コマ：県立大学松江キャンパス＞<br>・グループワークによるシェア及びグループ発表 |
| テキスト | 上記１～３については、参加者ノート、スタッフノート等を配布する。 |
| 参考文献 | |
| 評価方法 | ・実習における積極性、参加態度、ならびに、発表の内容、提出課題等で、総合的に判断する。<br>・本科目の性質上、１回でも欠席した場合は成績評価の対象外とする。 |
| 自己学習に<br>関する指針 | 第２回の養成講座受講後，第３回のボランティア実習に向けて，青少年の家ホームページから前年度や本年度実施された主催事業の様子について関心をもって、予習をしておくことが望ましい。 |
| 履修上の<br>指導・留意点 | ・実習①での施設使用料、食費は各自負担をする。(例年：約 2,000 円)<br>・定員は３６名とする。<br>・履修希望者は、４月１２日（金）までに登録の上、第１回事前学習（4/18)に必ず出席すること。<br>（希望者が定員を上回った場合は、抽選・その他の方法で選抜を行う） |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 健康スポーツ概論 | | | | | | |
| 担当教員 | 岸本　強 | | | | | | |
| 科目分類 | 基礎科目 | 授業時間 | 15 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 秋学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 1 | 授業コード | M6010130 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 競技スポーツや健康の保持・増進のためのスポーツ，スポーツを活用した健康生活について学ぶとともに，大学生として心得ておくべきスポーツ政策についての概要や現代的諸問題について学修する。また，スポーツ活動を通したパーソナリティー形成や社会性の発達についての知識を修得し，スポーツ活動によってもたらされるプラス面の効果や留意すべきことについて正しく理解し，競技スポーツ・健康スポーツ・生涯スポーツの見方・考え方についての学修を深める。 |
| 授業の到達目標 | ⑴健康スポーツについて基礎的な知識を修得することができる。<br>⑵現代的スポーツ事情，スポーツ諸課題について論述することができる。 |
| 授業計画 | 第１回　日本のスポーツ政策と現状（国，地方自治体のスポーツ推進計画）<br>第２回　スポーツとは？　スポーツの高度化，大衆化について<br>第３回　競技スポーツと健康志向スポーツについて<br>第４回　スポーツのパーソナリティー形成と二面性について<br>第５回　スポーツ集団への関わり方，チームワークのメカニズムと形成の考え方<br>第６回　スポーツのための食と液体補給<br>第７回　運動・休養・栄養と生活リズム<br>第８回　救急処置と救急蘇生法，まとめ<br>定期試験 |
| テキスト | なし |
| 参考文献 | 毎回，プリント資料を配付する。 |
| 評価方法 | 毎回クイズ（小テスト）＝30%　筆記試験＝70% |
| 自己学習に関する指針 | 配付資料を再読し，復習に役立てる。 |
| 履修上の指導・留意点 | 毎回，授業終わりに小テストを行う。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 健康スポーツⅠ | | | | | | |
| 担当教員 | 梶谷朱美 | | | | | | |
| 科目分類 | 基礎科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 春学期 |
| 授業形態 | 実技 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 1 | 授業コード | M6010140 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 健康スポーツⅠでは，各種身体運動の方法を実践学習し，健康の保持増進と体力の向上，運動の意味や効果の理解を図りながら，運動することへの自覚を一層促進する。また，スポーツやダンスを通して，運動や運動技術のみにとどまらず，集団のなかの一員としての役割等から協調性や社会性を身に付ける。内容については，準備運動（ストレッチングを含む）の仕方，集団スポーツの学習，個人スポーツの学習、ダンス（フォークダンス・レクレーションダンス・日本民踊）からゲームの仕方、ルール、技術、技能を学修し，生涯スポーツ、生涯ダンスの取組を見据えた授業とする。 |
| 授業の到達目標 | ⑴生涯スポーツ・生涯ダンスの観点から個人種目やチームスポーツ、各種ダンスに取り組み，多種目の技術、技能を身につけることができる。<br>⑵自ら主体的に学ぶ姿勢を身につけ，受講者で協力してゲームを運営したり、ダンスを通して仲間と交流したりすることができる。 |
| 授業計画 | 第１回　オリエンテーション，準備運動の方法及びストレッチング，リズム運動<br>第２回　スポーツ種別特性の理解と実践　バスケットボールの基礎・基本<br>第３回　スポーツ種別特性の理解と実践　バスケットボールのミニゲーム<br>第４回　スポーツ種別特性の理解と実践　バスケットボールゲーム（リンク式）<br>第５回　スポーツ種別特性の理解と実践　バドミントン・卓球の基礎・基本<br>第６回　スポーツ種別特性の理解と実践　バドミントン・卓球のゲーム（シングルス）<br>第７回　スポーツ種別特性の理解と実践　バドミントン・卓球のゲーム（ダブルス）<br>第８回　ダンス種別特性の理解と実践　フォークダンスの基礎・基本<br>第９回　ダンス種別特性の理解と実践　フォークダンス入門<br>第 10 回　ダンス種別特性の理解と実践　レクリエーションダンスの基礎・基本<br>第 11 回　ダンス種別特性の理解と実践　レクリエーションダンス入門<br>第 12 回　ダンス種別特性の理解と実践　日本民踊の基礎・基本<br>第 13 回　ダンス種別特性の理解と実践　日本民踊入門<br>第 14 回　ダンス種別特性の理解と実践　ダンスの種目選択でのワークショップ型交流会１<br>第 15 回　ダンス種別特性の理解と実践　ダンスの種目選択でのワークショップ型交流会２ |
| テキスト | 必要に応じて資料を配付する。 |
| 参考文献 | 必要に応じて資料を配付する。 |
| 評価方法 | 「関心・意欲・態度」＝30%、「技術・技能」＝30%、「課題レポート」＝40%とし、総合的に評価する。 |
| 自己学習に関する指針 | スポーツやダンスのもつ教育的な価値や文化を享受し、自分自身の生涯にわたっての健康・体力づくりを考える。 |
| 履修上の指導・留意点 | 運動のできる服装、シューズを準備すること。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 健康スポーツⅡ | | | | | | |
| 担当教員 | 原　丈貴 | | | | | | |
| 科目分類 | 基礎科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 2 | 配当期 | 春学期 |
| 授業形態 | 実技 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 1 | 授業コード | M6010150 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 健康スポーツⅡでは，身体組成測定器や血圧・脈拍測定器，エアロバイク（体力・最大酸素摂取量測定可能）など，各種身体及び身体機能測定機器で受講者が自ら計測した各々のデータを蓄積管理し，一人ひとりがこのデータを活用して自らに合った運動（機器を用いたトレーニング・エクササイズ・各種スポーツ）をプログラムしていく方法を学修する。授業ではスムースな展開を図るため，取り組む内容毎にグループで活動を展開する。このグループ化は２回行い，複数（異種）の取り組みを経験する。 |
| 授業の到達目標 | (1) 主体的・計画的に測定機器を使いデータを管理することができる。<br>(2) 測定データを活用し，機器を用いたトレーニング，エクササイズ，スポーツに取り組み，自ら取り組むことのできる運動プログラムを確立することができる。 |
| 授業計画 | 第１回　オリエンテーション及び各種測定<br>第２回　測定と運動実践（機器を用いたトレーニング・エクササイズ・各種スポーツ）試行<br>第３回　測定と運動実践（機器を用いたトレーニング・エクササイズ・各種スポーツ）定着<br>第４回　測定とグループ化①，運動実践（機器を用いたトレーニング・エクササイズ・各種スポーツ）<br>第５回　測定と運動実践（機器を用いたトレーニング・エクササイズ・チームスポーツ）グループ試行<br>第６回　測定と運動実践（機器を用いたトレーニング・エクササイズ・チームスポーツ）グループ定着<br>第７回　測定と運動実践（機器を用いたトレーニング・エクササイズ・チームスポーツ）グループ応用<br>第８回　測定と運動実践（機器を用いたトレーニング・エクササイズ・チームスポーツ）グループ発展<br>第９回　これまでのデータ処理と中間評価<br>第 10 回　測定とグループ化②，運動実践（機器を用いたトレーニング・エクササイズ・各種スポーツ）<br>第 11 回　測定と運動実践（機器を用いたトレーニング・エクササイズ・個人スポーツ）グループ試行<br>第 12 回　測定と運動実践（機器を用いたトレーニング・エクササイズ・個人スポーツ）グループ定着<br>第 13 回　測定と運動実践（機器を用いたトレーニング・エクササイズ・個人スポーツ）グループ応用<br>第 14 回　測定と運動実践（機器を用いたトレーニング・エクササイズ・個人スポーツ）グループ発展<br>第 15 回　データのまとめ，授業のまとめ |
| テキスト | なし |
| 参考文献 | 必要に応じて資料を配付する |
| 評価方法 | 実践記録 50%，まとめレポート 50% |
| 自己学習に関する指針 | 授業外においても取り込むことが好ましい。 |
| 履修上の指導・留意点 | 運動服の指定はないが、運動に適した服装・靴を着用すること。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 健康スポーツⅢ | | | | | | |
| 担当教員 | 山本ユミ | | | | | | |
| 科目分類 | 基礎科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 2 | 配当期 | 秋学期 |
| 授業形態 | 実技 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 1 | 授業コード | M6010160 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | ダンスの基礎的な身体の使い方を学び、思いきり身体を動かすこと、動きを創作する楽しさ、表現を追求する面白さ、人に伝える喜びなどダンスの醍醐味を身体で経験する。発表を通して、踊る・創る・観るという総合的な視点でダンスを学習する。 |
| 授業の到達目標 | (1) ダンスの基礎的な身体の使い方を学び、創る、踊る、観るという総合的な視点でダンスの技能を身に付けることができる。<br>(2) 共同作業を通して、互いの表現を認め合い、自己表現力を高め、積極的に取り組む姿勢を身に付けることができる。 |
| 授業計画 | 第１回　ガイダンス、ダンスの種類と特徴<br>第２回　ダンスの実践レベル１・リズム<br>第３回　ダンスの実践レベル１・ステップ<br>第４回　ダンスの実践レベル１・コンビネーション（簡単な振付）<br>第５回　ダンスの実践レベル１・レベル１のまとめのダンス<br>第６回　ダンスの実践レベル２・リズム&ステップ<br>第７回　ダンスの実践レベル２・コンビネーション（振付基礎）<br>第８回　ダンスの実践レベル２・コンビネーション（振付応用）<br>第９回　ダンスの実践レベル２・レベル２のまとめのダンス<br>第 10 回　ダンスの実践レベル３・リズム&ステップ<br>第 11 回　ダンスの実践レベル３・リズム&ステップ&コンビネーション（振付基礎）<br>第 12 回　ダンスの実践レベル３・リズム&ステップ&コンビネーション（振付応用）<br>第 13 回　ダンスの実践レベル３・フォーメーション（グループ創作ダンス基礎パターン）<br>第 14 回　ダンスの実践レベル３・フォーメーション（グループ創作ダンス応用パターン）<br>第 15 回　まとめのダンス発表会 |
| テキスト | なし |
| 参考文献 | 必要に応じて資料を配布する。 |
| 評価方法 | 技術・技能 30%，実践記録 20%，まとめレポート 50% |
| 自己学習に関する指針 | |
| 履修上の指導・留意点 | |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | キャリアプランニング | | | | | | |
| 担当教員 | 総合文化学科教員 | | | | | | |
| 科目分類 | 基礎科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 秋学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 必修 | 単位数 | 2 | 授業コード | M8010020 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 卒業後、社会の一員として生活していくための進路指導及びキャリア支援を目的とする。 |
| 授業の到達目標 | １．社会人になること、働くということを自分のこととして意識できるようになる。<br>２．自分の向き不向きを自覚し、自分に合った職業を選ぶことができる。<br>３．企業が求める人材について理解する。<br>４．履歴書の書き方、面接の受け方など、就職活動に必要なスキルを身に付ける。 |
| 授業計画 | 第１回　ガイダンス<br>第２回　企業（業界）・職業を知ろう①、就職サイト活用講座<br>第３回　企業（業界）・職業を知ろう②（企業・業界研究の仕方）<br>第４回　企業（業界）・職業を知ろう③<br>第５回　企業（業界）・職業を知ろう④<br>第６回　企業（業界）・職業を知ろう⑤<br>第７回　試験対策１（SPI 対策講座）<br>第８回　就活アプローチ１（マナー講習①／E メール、手紙）<br>第９回　就活アプローチ２（マナー講習②／敬語、電話、身だしなみ）<br>第 10 回　就活アプローチ３（自己分析、自己理解）<br>第 11 回　就活アプローチ４（履歴書の書き方①）<br>第 12 回　就活アプローチ５（履歴書の書き方②）<br>第 13 回　試験対策２（面接対策）・模擬面接<br>第 14 回　ライフデザイン講座<br>第 15 回　就活試験が終わって・まとめ |
| テキスト | 「就職活動の手引き」 |
| 参考文献 | 「Placement　Support　Book」<br>適宜紹介、配布する |
| 評価方法 | 授業態度（発表をよく聞き、質問等積極的に参加できたか）及び授業ノートの記述　50%<br>レポート及び模擬面接（レポート記述内容、模擬面接の準備、態度）50% |
| 自己学習に関する指針 | 学内企業説明会を企業・業界研究の実践の場として活用する。 |
| 履修上の指導・留意点 | 保育学科と合同で実施する授業あり。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | インターンシップ | | | | | | |
| 担当教員 | 総合文化学科教員 | | | | | | |
| 科目分類 | 基礎科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 春学期 |
| 授業形態 | 実習 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 1 | 授業コード | M8010030 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 企業・官公庁・NPO 法人等で行う一定期間の就業体験（実地訓練・実習的勤務）と本学での事前・事後授業を合わせて行うことで、社会で必要とされる力、職業や業界に関する知識や「働くことの意味」、将来の自分の仕事について理解を深める。インターンシップの意義とキャリア形成との関連性、インターンシップ先の探し方等について説明する。また、ビジネスマナー研修や社会人として必要になる姿勢等も学ぶ。<br>支援機関（ジョブカフェしまね）のプログラムを利用してインターンシップ実習を行う。インターンシップの事後授業では、「インターンシップでの学びを、その後の学生生活、就職活動、社会人生活にどのように活かすのか」等について学習する。 |
| 授業の到達目標 | ①インターンシップ（就業体験）の目的と意義、キャリア形成の関連性について説明できる。<br>②受け入れ先企業・団体、業界理解のもとに立てた目的を振り返ることができる。<br>③働くなかで自己理解を深め、今後自ら養うべき能力を自覚し、成長プランを持つ。<br>④TPO をわきまえたビジネスマナーを実践することができる。<br>⑤コミュニケーションほか、職場で求められる能力について理解し、説明することができる。<br>⑥インターンシップで得た学びについて説明でき、その後の学生生活で活用する行動につなげる。 |
| 授業計画 | 【事前授業】<br>＜5 月～6 月頃＞<br>（１）インターンシップの目的・意義、インターンシップとキャリア形成について<br>（２）インターンシップ先の情報収集、応募書類の記入方法のガイダンス<br>（３）応募書類・自己ＰＲの記載アドバイスセミナー<br>＜７月頃＞<br>（４）インターンシップ・直前準備講座（就業体験に必要なビジネスマナーを含む）<br>【インターンシップ実習】<br>（５）夏季（夏休み）期間中に原則（30 時間以上又は）5 日以上の就業体験を実施する。<br>インターンシップ先により、実習時期や期間が異なるため学業に支障が無い範囲で参加する。<br>【事後授業】<br>＜9 月～10 月頃＞<br>（６）インターンシップ成果報告会での発表（学外インターンシップ関係者招聘）<br>（７）インターンシップ振り返り講座、学習成果・今後の課題をまとめる |
| テキスト | 適宜プリントを配布する。 |
| 参考文献 | |
| 評価方法 | インターンシップ実習前の取り組み・インターンシップ研修日誌・就業体験事業所からの評価シート・事後報告を総合的に評価する。 |
| 自己学習に関する指針 | |
| 履修上の指導・留意点 | 不定期開講のため、日程に留意すること。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | キャリア・アップ講座 | | | | | | |
| 担当教員 | 総合文化学科教員 | | | | | | |
| 科目分類 | 基礎科目 | 授業時間 | 15 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 秋学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 1 | 授業コード | M8010040 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 本授業の目的は、社会に出た後に即戦力として活躍できるよう、サービスとホスピタリティの考え方・技術を学び、サービス接遇検定にも対応できる力を身につけることである。<br>文部科学省後援「ビジネス系検定」サイトによれば、「サービス接遇」とはサービスをとおして「相手に満足を提供する行動」であり、その検定試験は「サービス業務に対する心構え、対人心理の理解、応対の技術、口のきき方、態度・振舞い」などを審査するものである。サービス接遇の考え方とその考え方を体現する具体的な技術の習得を通してホスピタリティの精神を育て、かつ社会人に必要なコミュニケーション能力を涵養する。 |
| 授業の到達目標 | １．サービス接遇の考え方と技術とがどのように結びつくか理解する。<br>２．その考え方を体現する技術を習得する。<br>３．実務技能検定協会が実施し、文部科学省が後援する「サービス接遇検定」受験のための能力を身につける。 |
| 授業計画 | 第１回　サービススタッフとして必要とされる要件、サービス知識<br>第２回　商業活動、経済活動・確認テスト<br>第３回　社会常識<br>第４回　サービススタッフとしての人間関係の対処<br>第５回　サービススタッフとしての接客知識・確認テスト<br>第６回　サービススタッフとしての話し方<br>第７回　サービススタッフとしての問題処理<br>第８回　サービススタッフとしての実務技能・確認テスト<br>定期試験 |
| テキスト | サービス接遇検定テキスト（税込価格 1,296 円） |
| 参考文献 | なし |
| 評価方法 | 確認テスト、定期試験の結果を総合して評価する |
| 自己学習に関する指針 | |
| 履修上の指導・留意点 | 本授業を受講する学生は同年 6 月に実施されるサービス接遇検定（公益財団法人実務技能検定協会主催）を受験することとする。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 情報基礎 | | | | | | |
| 担当教員 | 加藤　暢恵 | | | | | | |
| 科目分類 | 基礎科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 春学期 |
| 授業形態 | 演習 | 選択/必修 | 必修 | 単位数 | 1 | 授業コード | M8010050 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | プレゼンテーションは企画・提案や研究成果等を他者に伝える上で重要な手段のひとつである。本演習では，プレゼンテーションを行う上で必要となる基本的な知識や技術及びプレゼンテーションに必要なソフトウェアの操作技術を習得する。 |
| 授業の到達目標 | (1)プレゼンテーションの役割と機能を理解できる。<br>(2)PowerPoint を用いて基本的なプレゼンテーションができる。 |
| 授業計画 | 第１回　ガイダンス　電子メール、インターネット<br>第２回　コンピュータの基礎知識(1)　コンピュータのしくみ<br>第３回　コンピュータの基礎知識(2)　ソフトウェア<br>第４回　プレゼンテーション技法(1)　プレゼンテーションの基礎知識・情報収集，情報分析<br>第５回　プレゼンテーション技法(2)　プレゼンテーションの構成・資料作成<br>第６回　プレゼンテーション技法(3)　PowerPoint の使い方<br>第７回　プレゼンテーション技法(4)　発表技術<br>第８回　プレゼンテーション実践演習　ディスカッション（グループワーク）<br>第９回　プレゼンテーション実践演習　スライド作成，リハーサル<br>第 10 回　プレゼンテーション実践演習　プレゼンテーション（グループ）【テーマ指定】<br>第 11 回　プレゼンテーション実践演習　テーマの選定，情報収集，情報整理<br>第 12 回　プレゼンテーション実践演習　スライド作成，リハーサル<br>第 13 回　プレゼンテーション実践演習　プレゼンテーション（個人）【テーマ自由】<br>第 14 回　プレゼンテーション実践演習　プレゼンテーション（個人）【テーマ自由】<br>第 15 回　まとめ，実践演習のふりかえり |
| テキスト | 「よくわかる自信がつくプレゼンテーション 引きつけて離さないテクニック 改訂版」ＦＯＭ出版 |
| 参考文献 | 必要に応じてプリントを配布 |
| 評価方法 | 演習課題(50%)，小テスト(10%)，実技(40%) |
| 自己学習に関する指針 | 授業内容（特にソフトウェアの操作）は，各自でしっかりと復習すること。 |
| 履修上の指導・留意点 | 欠席する場合は事前に連絡をすること。（グループワークを行うため） |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 情報応用 | | | | | | |
| 担当教員 | 加藤　暢恵 | | | | | | |
| 科目分類 | 基礎科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 秋学期 |
| 授業形態 | 演習 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 1 | 授業コード | M8010060 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 近年，国や自治体などが保有するさまざまな公共データを，すべての人が利活用できるオープンデータの取り組みが活発化している。また，オープンソースソフトウェアの利活用も盛んに行われている。本演習では，オープンデータやオープンソースソフトウェアの現状を学ぶとともに，利活用方法や効果的な情報発信について考える。<br>また、プログラミングがエンジニア以外にも必要なスキルであることを知るとともに、プログラミングの「学び方を知る」ことを目的とする。 |
| 授業の<br>到達目標 | ⑴オープンデータの概念を理解する。<br>⑵オープンソースソフトウェアの特徴を理解する。<br>⑶オープンデータやオープンソースソフトウェアの利活用方法を提案することができる。<br>⑷プログラミングがエンジニア以外にも必要なスキルであることを理解する。 |
| 授業計画 | 第１回　情報化社会と情報発信<br>第２回　情報メディアの活用<br>第３回　インターネットの活用<br>第４回　Progate を用いたプログラミング学習の体験<br>第５回　グループワーク：外部サービス等を用いたプログラミング学習の可能性と課題について<br>第６回　グループワーク：プレゼンテーションの準備<br>第７回　プレゼンテーション<br>第８回　OpenStreetMap の概要，基本操作<br>第９回　OpenStreetMap の編集<br>第 10 回　Wikipedia の概要<br>第 11 回　Wikipedia の編集<br>第 12 回　LocalWiki の概要<br>第 13 回　アイディアソン<br>第 14 回　アイディアソン<br>第 15 回　プレゼンテーション<br>（第４回～第７回は外部講師による集中講義：2019 年 10 月 26 日（土）実施予定） |
| テキスト | なし（必要に応じてプリント等を配布します） |
| 参考文献 | 必要に応じてプリント等を配布します。 |
| 評価方法 | 演習課題(60%)，実技(40%) |
| 自己学習に<br>関する指針 | |
| 履修上の<br>指導・留意点 | 演習中心の授業のため，不明な点は早めに質問し，解決を図ること。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | コンピュータ・リテラシーⅠ | | | | | | |
| 担当教員 | 小倉　佳代子 | | | | | | |
| 科目分類 | 基礎科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 春学期 |
| 授業形態 | 演習 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 1 | 授業コード | M8010070 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | （ワープロ初級）<br>この授業では、コンピュータの初心者を対象として、エンドユーザーとしてコンピュータを活用するための基本的な技能を学習する。コンピュータの操作やソフトウェアの基本的な利用法を学習するとともに、ネットワークシステム及びインターネットの基本的な利用法を学ぶ。主にワープロソフトを用い、文書作成のための技術を修得する。 |
| 授業の到達目標 | 基本的なコンピュータの操作、インターネットでの検索やメールの利用法を修得する。ワープロソフト（Word）の技能を、コンピュータサービス技能評価試験（CS 試験）の 3 級程度まで身につけることを目指す。 |
| 授業計画 | 第１回　授業ガイダンス<br>第２回　入力の基本（ブラインドタッチ）について、電子メールの基本<br>第３回　インターネットの使用法・検索、タイピング練習<br>第４回　ワープロソフト（１）ファイル操作と管理<br>第５回　ワープロソフト（２）文書書式<br>第６回　ワープロソフト（３）入力操作<br>第７回　ワープロソフト（４）書式設定<br>第８回　ワープロソフト（５）表の作成<br>第９回　ワープロソフト（６）オブジェクトの活用<br>第 10 回　ワープロソフト（７）編集<br>第 11 回　ワープロソフト（８）印刷<br>第 12 回　ワープロソフト（９）ビジネス文書の知識<br>第 13 回　ワープロソフト（１０）文書作成<br>第 14 回　練習問題による応用（１）<br>第 15 回　練習問題による応用（２）<br>定期試験 |
| テキスト | 授業の中で指定する |
| 参考文献 | なし |
| 評価方法 | 課題提出(50%)、試験(50%) |
| 自己学習に関する指針 | ・修得した技術を授業外のレポートやデータ作成等で積極的に活用すること。 |
| 履修上の指導・留意点 | ・ワープロソフト（Word）初心者向けの授業です。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | コンピュータ・リテラシーⅡ | | | | | | |
| 担当教員 | 小倉　佳代子 | | | | | | |
| 科目分類 | 基礎科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 秋学期 |
| 授業形態 | 演習 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 1 | 授業コード | M8010080 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | （表計算初級）<br>この授業では、コンピュータの初心者を対象とし、エンドユーザーとして表計算機能を活用するための基本的な技能を学習する。 |
| 授業の到達目標 | 基本的なコンピュータの操作、インターネットでの検索やメールの利用法を修得する。表計算ソフト（Excel）の技能を、コンピュータサービス技能評価試験（CS 試験）の 3 級程度まで身につけることを目指す。 |
| 授業計画 | 第１回　授業ガイダンス<br>第２回　入力の基本（ブラインドタッチ）について、電子メールの基本<br>第３回　インターネットの使用法・検索、タイピング練習<br>第４回　表計算ソフト（１）概要<br>第５回　表計算ソフト（２）基本操作<br>第６回　表計算ソフト（３）入力<br>第７回　表計算ソフト（４）表の作成<br>第８回　表計算ソフト（５）計算<br>第９回　表計算ソフト（６）関数１<br>第 10 回　表計算ソフト（７）関数２<br>第 11 回　表計算ソフト（８）関数３<br>第 12 回　表計算ソフト（９）グラフ作成１<br>第 13 回　表計算ソフト（１０）グラフ作成２<br>第 14 回　練習問題による応用（１）<br>第 15 回　練習問題による応用（２）<br>定期試験 |
| テキスト | 授業の中で指定する |
| 参考文献 | なし |
| 評価方法 | 課題提出(50%)、試験(50%) |
| 自己学習に関する指針 | ・修得した技術を授業外のレポートやデータ作成等で積極的に活用すること。 |
| 履修上の指導・留意点 | ・表計算ソフト（Excel）初心者向けの授業です。 |

| 授業科目 | コンピュータ・リテラシーⅢ | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 担当教員 | 小倉　佳代子 | | | | | | |
| 科目分類 | 基礎科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 秋学期 |
| 授業形態 | 演習 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 1 | 授業コード | M8010090 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | （ワープロ中級）<br>この授業では、コンピュータ操作の基礎を修得している学生を対象とし、エンドユーザーとしてコンピュータを活用するための技能を学習する。 |
| 授業の到達目標 | ワープロソフト（Word）の複雑な使用法を学び、コンピュータサービス技能評価試験（CS 試験）の 2 級程度の技術を身につけることを目指す。 |
| 授業計画 | 第１回　授業ガイダンス<br>第２回　入力の基本（ブラインドタッチ）の確認、ファイル管理について<br>第３回　ワープロソフト（１）基本操作の復習１<br>第４回　ワープロソフト（２）基本操作の復習２<br>第５回　ワープロソフト（３）基本操作の復習３<br>第６回　ワープロソフト（４）複数の表の使い方<br>第７回　ワープロソフト（５）高度な書式設定<br>第８回　ワープロソフト（６）表を使った作図<br>第９回　ワープロソフト（７）オートシェイプを使った作図<br>第 10 回　ワープロソフト（８）段組み<br>第 11 回　ワープロソフト（９）複雑な書式１<br>第 12 回　ワープロソフト（１０）複雑な書式２<br>第 13 回　ワープロソフト（１１）ファイルの挿入やテキストボックスのリンクなど<br>第 14 回　練習問題による応用（１）<br>第 15 回　練習問題による応用（２）<br>定期試験 |
| テキスト | 授業の中で指定する |
| 参考文献 | なし |
| 評価方法 | 課題提出(50%)、試験(50%) |
| 自己学習に関する指針 | ・修得した技術を授業外のレポートやデータ作成等で積極的に活用すること。 |
| 履修上の指導・留意点 | ・ワープロソフトの初級程度を習得しているものを対象とする。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | コンピュータ・リテラシーⅣ | | | | | | |
| 担当教員 | 小倉　佳代子 | | | | | | |
| 科目分類 | 基礎科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 2 | 配当期 | 春学期 |
| 授業形態 | 演習 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 1 | 授業コード | M8010100 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | （表計算中級）<br>この授業では、コンピュータ操作の基礎を修得している学生を対象とし、エンドユーザーとしてコンピュータを活用するための技能を学習する。 |
| 授業の到達目標 | 表計算ソフト（Excel）の複雑な使用法を学び、コンピュータサービス技能評価試験（CS 試験）の 2 級程度の技術を身につけることを目指す。 |
| 授業計画 | 第１回　授業ガイダンス<br>第２回　入力の基本（ブラインドタッチ）の復習、ファイル管理について<br>第３回　表計算ソフト（１）基本操作の復習１<br>第４回　表計算ソフト（２）簡単な関数の復習<br>第５回　表計算ソフト（３）関数（文字操作）<br>第６回　表計算ソフト（４）関数（match,index etc.）<br>第７回　表計算ソフト（５）関数（int,mod,floor,ceiling etc.）<br>第８回　表計算ソフト（６）関数のまとめ<br>第９回　表計算ソフト（７）条件付き書式<br>第 10 回　表計算ソフト（８）データベース機能（抽出）<br>第 11 回　表計算ソフト（９）データベース機能（集計）<br>第 12 回　表計算ソフト（１０）データベース機能まとめ<br>第 13 回　表計算ソフト（１１）複雑なグラフの作り方<br>第 14 回　練習問題による応用（１）<br>第 15 回　練習問題による応用（２）<br>定期試験 |
| テキスト | 授業の中で指定する |
| 参考文献 | なし |
| 評価方法 | 課題提出(50%)、試験(50%) |
| 自己学習に関する指針 | ・修得した技術を授業外のレポートやデータ作成等で積極的に活用すること。 |
| 履修上の指導・留意点 | ・表計算ソフトの初級程度を習得しているものを対象とする。 |

# 【総合文化学科】
# 専門科目

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 総合文化基礎ゼミナール | | | | | | |
| 担当教員 | 総合文化学科教員 | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 春学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 必修 | 単位数 | 1 | 授業コード | M8020010 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 総合文化基礎ゼミナールは個別クラスと合同クラスによって実施する。それらの授業を通して、大学生としての学習態度および生活態度を修得することを目的とする。個別クラスでは、グループ学習やポスター発表、文章を書くことなどを行い、大学での基礎的な学習方法を学ぶ。合同クラスではネット被害・マルチ商法対策や防犯の心構えと護身術、ブラックバイトなどについてのキャンパス講習会を実施し、大学生としての生活態度を学ぶ。 |
| 授業の到達目標 | （1）大学での学習態度が身についている。<br>（2）大学生としての基礎的な学習方法が身についている。<br>（3）大学生としての生活態度が身についている。 |
| 授業計画 | 第１回　授業ガイダンス、ゼミクラス分け、履修指導<br>第２回　基礎的な学習方法１：図書館見学と情報検索講習<br>第３回　キャンパス講習会１：心と身体の健康（小村講師、手島主任看護師）　大講義室<br>第４回　基礎的な学習方法２：ノートの取り方<br>第５回　キャンパス講習会２：ネット被害・マルチ商法対策（島根県消費者センター）　大講義室<br>第６回　基礎的な学習方法３：ポスター発表に向けたグループ学習①<br>第７回　キャンパス講習会３：交通安全（松江警察署）　大講義室<br>第８回　基礎的な学習方法４：ポスター発表に向けたグループ学習②<br>第９回　キャンパス講習会４：防犯の心構えと護身術（松江警察署）　体育館アリーナ<br>第 10 回　基礎的な学習方法５：ポスター発表<br>第 11 回　キャンパス講習会５：ブラックバイト対策（島根労働局）　大講義室<br>第 12 回　基礎的な学習方法６：文章を書く（エッセイ）①<br>第 13 回　キャンパス講習会６：人権セミナー（人権啓発推進センター）　大講義室<br>第 14 回　基礎的な学習方法７：文章を書く（エッセイ）②<br>第 15 回　基礎的な学習方法８：文章を書く（エッセイ）③ |
| テキスト | プリントを配布する。 |
| 参考文献 | 適宜、指示する。 |
| 評価方法 | 基礎的な学習方法の各回の課題（70%）、キャンパス講習会の各回の課題（30%） |
| 自己学習に関する指針 | 各ゼミでの課題には、図書館などを利用して積極的に取り組んでください。 |
| 履修上の指導・留意点 | 質問があれば、各ゼミの担当者に質問してください。授業内容だけではなく、生活や進路のことについての相談も受けつけます。 |

| 授業科目 | 総合文化ゼミナールⅠ | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 担当教員 | 総合文化学科教員 | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 90 | 配当年次 | 2 | 配当期 | 春学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 必修 | 単位数 | 2 | 授業コード | M8020020 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 文化に関わる研究テーマを見つける。少人数の演習形式で意見交換や討論を行いながら実施する。主な流れは以下の通りである。<br>１．各自が興味を持っていることから問題を見つける。<br>２．各自の問題に従って、資料収集・調査・分析を行う。<br>３．研究した内容を中間レポートにまとめる。 |
| 授業の到達目標 | ・各自が興味を持っている卒業研究のテーマを探って、見つけること。<br>・意見交換や討論の技術を身につけること。<br>・調査、資料の収集・分析の方法を身につけること。 |
| 授業計画 | （１　キッド・ダスティン　ー　異文化理解ゼミ）<br>異文化を理解しようとすることで、自分の文化も理解できるようになります。異文化理解ゼミでは、さまざまな角度から異文化について議論しながら研究していきます。また、異文化という観点から観光について考えたり、日米文化を比較したりします。こういったことに興味のある学生は一緒に異文化理解について考え、研究しながら知識を深めていきましょう。<br>（２　藤吉　知美　ー　アメリカ文学ゼミ）<br>アメリカ文学研究室では、代表的なアメリカ作家の作品を読みながら、テーマを見つけ、それについて考えをまとめます。文学作品は読んで楽しいのはもちろん、みなさんの探究心を刺激し、視野を広げてくれます。魅力を感じたところ、よくわからなかったところを掘り下げていくことで、自分の意見を持つ訓練にもなります。アメリカ文学の基礎を学びながら、自分でものを考え、表現する方法を身につけましょう。<br>（３　山根　繁樹　ー　近現代文学ゼミ）<br>現代の日本語で書かれたものを対象として研究を行います。小説、詩、短歌、俳句、戯曲などの文学作品はもちろん、評論やエッセイなども対象として、作品研究や作家研究ができます。また、広告で使われるコピーのような、さまざまなメディアで発信されている言説を対象として、言葉の持つ力や、背景にある時代、社会、文化について研究していくことも可能です。<br>（４　山村　仁朗　ー　国語学ゼミ）<br>現代の言葉または古典の言葉を対象として日本語の研究を行います。音韻、語彙、文法など日本語に関することであればどのような問題にも対応します。また、日本古典文学の研究も行います。奈良、平安、鎌倉、室町、江戸の各時代の作品研究や作者の研究が可能です。加えて、日本語や文学作品を用いた日本文化の研究を行います。江戸時代以前を考察の中心とします。<br>（５　渡部　周子　ー　表象文化ゼミ）<br>明治以降から現代までの日本の文化を、文字資料と視覚資料（絵画や映像等）の双方を対象として、研究することができます。子ども、女性をめぐる文化等を、ジェンダーの視点を軸として、考察していきます。また、ここで指す文化とは、ハイ・アート（高級芸術）だけでなく、ポップカルチャー（大衆文化）をも含めるものであり、幅広く捉えています。<br>（６　加藤　暢恵　ー　情報活用ゼミ）<br>情報発信における情報技術の利活用に関する研究を行います。既存サービスの利活用やアプリデザインなど情報発信に関することに対応します。また，情報を発信する上で重要となるデータ分析に関する研究も行います。分析対象は限定せず，情報を分析・整理し発信することに重点をおいて研究を行います。 |
| テキスト | プリントを配布する。 |
| 参考文献 | 適宜、指示する。 |
| 評価方法 | テーマ設定　40%<br>レポート（参考文献を含めて 3000 字）60% |
| 自己学習に関する指針 | 各ゼミでの課題には、図書館などを利用して積極的に取り組んでください。 |
| 履修上の指導・留意点 | 質問があれば、各ゼミの担当者に質問してください。授業内容だけではなく、生活や進路のことについての相談も受けつけます。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 総合文化ゼミナールⅡ | | | | | | |
| 担当教員 | 総合文化学科教員 | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 90 | 配当年次 | 2 | 配当期 | 秋学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 必修 | 単位数 | 2 | 授業コード | M8020030 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 短期大学二年間の学びの集大成として、卒業論文を作成することを目標とする。主な流れは以下の通りである。<br>１.「総合文化ゼミナールⅠ」で設定したテーマに従って、卒業研究に取り組む。<br>２. 研究の途中経過をゼミで発表し、議論を行う。<br>３. 研究成果を卒業論文にまとめる。<br>４. 卒業論文について、卒業研究報告会で発表を行う。 |
| 授業の到達目標 | ・質疑応答の力を身につけること。<br>・日本語による論理的な文章表現力を向上させること。<br>・発表会に向けてプレゼンテーション力を向上させること。 |
| 授業計画 | （１　キッド・ダスティン　ー　異文化理解ゼミ）<br>異文化を理解しようとすることで、自分の文化も理解できるようになります。異文化理解ゼミでは、さまざまな角度から異文化について議論しながら研究していきます。また、異文化という観点から観光について考えたり、日米文化を比較したりします。こういったことに興味のある学生は一緒に異文化理解について考え、研究しながら知識を深めていきましょう。<br>（２　藤吉　知美　ー　アメリカ文学ゼミ）<br>アメリカ文学研究室では、代表的なアメリカ作家の作品を読みながら、テーマを見つけ、それについて考えをまとめます。文学作品は読んで楽しいのはもちろん、みなさんの探究心を刺激し、視野を広げてくれます。魅力を感じたところ、よくわからなかったところを掘り下げていくことで、自分の意見を持つ訓練にもなります。アメリカ文学の基礎を学びながら、自分でものを考え、表現する方法を身につけましょう。<br>（３　山根　繁樹　ー　近現代文学ゼミ）<br>現代の日本語で書かれたものを対象として研究を行います。小説、詩、短歌、俳句、戯曲などの文学作品はもちろん、評論やエッセイなども対象として、作品研究や作家研究ができます。また、広告で使われるコピーのような、さまざまなメディアで発信されている言説を対象として、言葉の持つ力や、背景にある時代、社会、文化について研究していくことも可能です。<br>（４　山村　仁朗　ー　国語学ゼミ）<br>現代の言葉または古典の言葉を対象として日本語の研究を行います。音韻、語彙、文法など日本語に関することであればどのような問題にも対応します。また、日本古典文学の研究も行います。奈良、平安、鎌倉、室町、江戸の各時代の作品研究や作者の研究が可能です。加えて、日本語や文学作品を用いた日本文化の研究を行います。江戸時代以前を考察の中心とします。<br>（５　渡部　周子　ー　表象文化ゼミ）<br>明治以降から現代までの日本の文化を、文字資料と視覚資料（絵画や映像等）の双方を対象として、研究することができます。子ども、女性をめぐる文化等を、ジェンダーの視点を軸として、考察していきます。また、ここで指す文化とは、ハイ・アート（高級芸術）だけでなく、ポップカルチャー（大衆文化）をも含めるものであり、幅広く捉えています。<br>（６　加藤　暢恵　ー　情報活用ゼミ）<br>情報発信における情報技術の利活用に関する研究を行います。既存サービスの利活用やアプリデザインなど情報発信に関することに対応します。また，情報を発信する上で重要となるデータ分析に関する研究も行います。分析対象は限定せず，情報を分析・整理し発信することに重点をおいて研究を行います。 |
| テキスト | |
| 参考文献 | 適宜、指示する。 |
| 評価方法 | 卒業論文　70%<br>発表　30% |
| 自己学習に関する指針 | 各ゼミでの課題には、図書館などを利用して積極的に取り組んでください。 |

| | |
|---|---|
| 履修上の<br>指導・留意点 | 質問があれば、各ゼミの担当者に質問してください。授業内容だけではなく、生活や進路のことについての相談も受けつけます。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 日本語表現演習 | | | | | | |
| 担当教員 | 総合文化学科教員 | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 秋学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 必修 | 単位数 | 2 | 授業コード | M8020040 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 小論文の作成を土台にして、レポートの書き方を学ぶ。まず、小論文が序論・本論・結論から構成されることを学んだうえで、実際に小論文の作成を行う。続いて、小論文作成の方法を応用して、レポート作成を体験する。また毎回、小論文・レポートについての小課題を提出してもらう。提出した課題については担当教員が添削を行い、次回の授業時に返却する。授業の終盤では、「総合文化ゼミナール内容紹介」などを通して、２年次でのゼミ選択について考える。 |
| 授業の到達目標 | （１）章立てができる。<br>（２）図書館を利用して、必要な資料を収集することができる。<br>（３）他者の意見と自分の意見を区別して書くことができる。 |
| 授業計画 | 第１回　小論文①　問題の発見<br>第２回　小論文②　構成と序論<br>第３回　小論文③　本論を考えよう<br>第４回　小論文④　本論を書こう<br>第５回　小論文⑤　結論と下書き・推敲<br>第６回　レポート①　問題の発見と構成<br>第７回　レポート②　序論と目標提示<br>第８回　レポート③　本論（第１節）１――現状分析の練習<br>第９回　レポート④　本論（第１節）２――現状分析の実践<br>第 10 回　レポート⑤　本論（第２節）１――他者の意見を書く<br>第 11 回　レポート⑥　本論（第２節）２――自分の意見を書く／根拠や支えを書く<br>第 12 回　レポート⑦　結論と下書き<br>第 13 回　レポート⑧　推敲<br>第 14 回　総合文化ゼミナール内容紹介<br>第 15 回　卒業論文発表会への参加 |
| テキスト | プリントを配布する。 |
| 参考文献 | 阿部紘久『文章力の基本』（日本実業出版社）<br>長尾佳代子『大学１年生のための日本語技法』（ナカニシヤ出版） |
| 評価方法 | 小論文・レポートの小課題（65%）　小論文・レポート（25%）　ゼミ選択に関する課題（10%） |
| 自己学習に関する指針 | 授業時の課題の残りや宿題は、なるべく授業があったその日のうちに済ませてください。 |
| 履修上の指導・留意点 | 分からないことや、文章が書けなくて困っている場合、早めに相談してください。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 文化情報表現法 | | | | | | |
| 担当教員 | 加藤　暢恵、大塚　茂、小倉　佳代子 | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 2 | 配当期 | 春学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M8020050 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 本科目は、Adobe InDesign を用いて、DTP(Desk Top Publishing)に関する基礎的な知識と技術を習得することを目的としています。具体的には、リーフレット、冊子、取り扱い説明書などを編集・制作することを通して、ページレイアウトや文字デザイン、グラフや表の作成・利用方法、写真やイラストの処理・活用法などの基礎的な力を身につけます。<br>授業はすべてコンピュータを使った実技演習であり、各自が毎回作品を制作するという形で進めていきます。 |
| 授業の到達目標 | ・DTP の基礎的な知識を理解する。<br>・InDesign を用いて冊子を作成することができる。 |
| 授業計画 | 第１回　授業ガイダンス、InDesign の基本<br>第２回　DTP の基本知識<br>第３回　InDesign の基本操作(1)<br>第４回　InDesign の基本操作(2)<br>第５回　リーフレットの作成(1)<br>第６回　リーフレットの作成(2)<br>第７回　冊子の作成(1)<br>第８回　冊子の作成(2)<br>第９回　取り扱い説明書の作成(1)<br>第 10 回　取り扱い説明書の作成(2)<br>第 11 回　取り扱い説明書の作成(3)<br>第 12 回　取り扱い説明書の作成(4)<br>第 13 回　印刷データの作成、データ作り<br>第 14 回　冊子作成演習(1)<br>第 15 回　冊子作成演習(2)<br>第 16 回　定期試験 |
| テキスト | テキストは使用しません。必要に応じてプリントを配布します。 |
| 参考文献 | InDesign クリエイター養成講座、瀧野福子著、マイナビ<br>InDesign 操作とデザインの教科書、ベクトルハウス著、技術評論社 |
| 評価方法 | 単位認定は、①授業の課題作品(70%)、②期末試験(30%)によって総合的に評価します。 |
| 自己学習に関する指針 | 各回の授業内容はその週のうちに復習し、次回の授業までに習得しておいてください。 |
| 履修上の指導・留意点 | 演習中心の授業のため、不明な点は早めに質問し、解決を図ること。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 文化情報誌制作 | | | | | | |
| 担当教員 | 山根　繁樹、鹿野　一厚、大塚　茂 | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 2 | 配当期 | 秋学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M8020060 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 雑誌の編集・制作に関する基礎的な知識を身につけるとともに、コンピュータを使った地域情報誌や広報誌などのミニコミ誌制作（DTP=Desk Top Publishing）に必要とされるさまざまな力を養います。企画立案から取材、原稿の執筆、編集、校正、レイアウト・デザイン、印刷、製本に至る一連の作業を実践的に学ぶため、いくつかのチームをつくり、チームごとに 40～50 ページ程度の小冊子を制作します。記事の執筆は受講生全員が行います。 |
| 授業の到達目標 | ①テーマを決め、取材に行き、記事を書き、4 ページ分の誌面を仕上げる。<br>②規格や期限を守ることなど、共同作業に要求される資質を身につける。<br>③InDesign を使って小冊子を作成する方法を身につける。 |
| 授業計画 | 第１回　雑誌ができるまで<br>第２回　記事構想を練る(1)<br>第３回　グループに分かれ企画会議、企画書の作成<br>第４回　資料調査・収集、記事構想を練る(2)<br>第５回　取材の心得、記事構想を練る(3)<br>第６回　取材<br>第７回　取材<br>第８回　表記の仕方、記事原稿執筆<br>第９回　記事原稿執筆<br>第 10 回　記事原稿執筆<br>第 11 回　ページ割り、誌面デザインの方法<br>第 12 回　記事の推敲、誌面レイアウト<br>第 13 回　誌面レイアウト<br>第 14 回　印刷・製本<br>第 15 回　雑誌の味読<br>合評会 |
| テキスト | テキストは使用しません。必要に応じてプリントを配布します。 |
| 参考文献 | 参考文献は必要に応じて紹介します。 |
| 評価方法 | 単位認定は、①小課題（企画書、取材ノート、記事原稿、誌面レイアウトなど）(40%)と、②最終課題（小冊子と記事）(60%)によって総合的に評価します。 |
| 自己学習に関する指針 | |
| 履修上の指導・留意点 | |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 民俗学 | | | | | | |
| 担当教員 | 中野　洋平 | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 春学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M8020070 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 現在の島根県では、人口減少問題をはじめとして様々な社会問題を抱えているため、「課題先進県」等と呼ばれています。私たちは日々の暮らしや地域をより良くしていくという課題がありますが、そのためには「暮らし」や「地域」がどのように構築され現在に至っているのかしっかりと理解する必要があります。そこでこの授業では、民俗学を通して、私たちの日常に対する理解を深めたいと思います。それぞれの授業回では、山陰地域の事例をもとに解説していきます。 |
| 授業の到達目標 | （１）民俗学の基本的な内容を理解することができる。<br>（２）身の回りの民俗文化に積極的に関心を持とうとすることができる。<br>（３）関心を持った民俗文化を、適切に調べ理解することができる。 |
| 授業計画 | 第１回　民俗学の意義と目的、成り立ち<br>第２回　民俗学の方法<br>第３回　民俗社会論（１）地域の種別とコスモロジー<br>第４回　民俗社会論（２）地域を紐帯とした社会関係<br>第５回　民俗信仰論（１）神社と祭祀組織<br>第６回　民俗信仰論（２）寺院と死者供養<br>第７回　民俗信仰論（３）さまざまな信仰<br>第８回　民俗芸能論（１）民俗芸能の種別<br>第９回　民俗芸能論（２）民俗芸能の成り立ち<br>第 10 回　民俗芸能論（３）民俗芸能の機能<br>第 11 回　年中行事論<br>第 12 回　人生儀礼論<br>第 13 回　口頭伝承論<br>第 14 回　社会の変化と民俗<br>第 15 回　民俗文化の活用と地域社会 |
| テキスト | 授業中に資料を配布します。 |
| 参考文献 | 福田アジオ他編『図説　日本民俗学』吉川弘文館　2009 年 |
| 評価方法 | 期末レポート（100%） |
| 自己学習に関する指針 | ・授業中に紹介した参考文献を、積極的に読むことが望ましい。 |
| 履修上の指導・留意点 | ・授業では、講義だけでなく受講生同士でディスカッションをすることがあります。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 日本文化論Ⅰ（表象文化） | | | | | | |
| 担当教員 | 渡部　周子 | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 秋学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M8020080 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 想像されたものや象徴的なものを虚構のイメージによって表現する「表象」という概念について、また、人々の心を動かしたり社会構造を維持したり変化させたりという「表象」の機能について理解することを目標とする。具体的には、文献資料と視覚資料（美術、写真、映画、漫画、アニメーション等）の双方に表現された、「女性」「子ども」「少女」などを分析の軸とし、これらを歴史的、社会的な観点から考察する。 |
| 授業の到達目標 | １．人文社会科学の研究上における「表象」という概念の位置づけを理解し、説明できる。<br>２．具体的な事例について、表象の機能という視点で、分析的に説明できる。 |
| 授業計画 | 第１回　ガイダンス<br>第２回　表象とはなにか<br>第３回　象徴とはなにか<br>第４回　規範像とはなにか<br>第５回　規範像１　　国民主義と市民道徳<br>第６回　規範像２　　ジェンダー規範<br>第７回　規範像３　　理想的女性像の諸相<br>第８回　規範像４　　新しい女性像としての－女学生、少女<br>第９回　規範像と逸脱者<br>第 10 回　「美」という表象　１　「美しい」とはどういうことなのか<br>第 11 回　「美」という表象　２　男性美と女性美について<br>第 12 回　「美」という表象　３　性別の境界と越境<br>第 13 回　「美」という表象　４　「かわいい」とはどういうことか<br>第 14 回　「美」という表象　５　未成熟の美学<br>第 15 回　総括 |
| テキスト | プリントを配布する他、講義に際して適宜案内します。 |
| 参考文献 | ジョージ・Ｌ・モッセ『ナショナリズムとセクシュアリティ』佐藤卓己、佐藤八寿子訳、柏書房、1996 年<br>ブラム・ダイクストラ『倒錯の偶像』富士川義之他訳、パピルス、1994 年<br>若桑みどり『イメージの歴史』ちくま学芸文庫、2012 年<br>渡部周子『＜少女＞像の誕生　―近代日本における「少女」規範の形成』新泉社、2007 年　　渡部周子『つくられた「少女」－「懲罰」としての病と死』日本評論社、2017 年 |
| 評価方法 | 平常点（発言、小課題等）(65%)、課題（35%）の総合評価となる予定である。 |
| 自己学習に関する指針 | 授業で挙げた参考文献、図像資料について、各自で読んだり、鑑賞する時間を設けること。 |
| 履修上の指導・留意点 | 受講生数や受講生の理解度等に応じて、授業の順序、進行、評価方法に変更がある場合がある。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 日本文化論Ⅱ（現代文化） | | | | | | |
| 担当教員 | 渡部　周子 | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 2 | 配当期 | 春学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M8020090 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 今日、日本のポップカルチャーが生み出す「少女」イメージは、国の内外から注目を浴びている。日本文化には成熟を肯定する価値観が不在だといわれており、こうした美意識を象徴する存在が「少女」だといえる。この現代の「少女」像の源流を、現代日本の視覚的表現を中心に辿り、未成熟であることの美学とは何なのかを考察する。 |
| 授業の到達目標 | 「少女」イメージを通して、「美」とは本質的なものではなく、時代や国が異なれば変化することを理解し、文化の持つ可変性を説明できるようになる。 |
| 授業計画 | 第１回　ガイダンス<br>第２回　「少女」とはなにか<br>第３回　ロマンティシズムという眼差し<br>第４回　現代の映像作品にみる近代的規範像の影響<br>第５回　現代の映像作品にみる近代的規範像の超克<br>第６回　「かわいい」とはどういうことか？<br>第７回　「かわいい」の来歴<br>第８回　現代社会と「かわいい」<br>第９回　「怖い」ことと「かわいい」こと<br>第 10 回　性別を超えた美（１）日本文化に見る性別越境<br>第 11 回　性別を超えた美（２）歌舞伎と宝塚<br>第 12 回　永遠性の希求　～人形<br>第 13 回　永遠性の希求　～インモータルズ<br>第 14 回　未成熟の美学<br>第 15 回　統括 |
| テキスト | プリントを配布する他、適宜指示。 |
| 参考文献 | 四方田犬彦『かわいい」論』ちくま新書、2006 年。渡部周子『＜少女＞像の誕生　―近代』新泉社、2007 年。渡部周子『つくられた「少女」－「懲罰」としての病と死』日本評論社、2017 年。 |
| 評価方法 | 平常点（小課題、コメント等）（65%）、課題（35%）の総合評価となる予定です。 |
| 自己学習に関する指針 | 授業で挙げた参考文献、図像資料について、各自で読んだり、鑑賞する時間を設けること。 |
| 履修上の指導・留意点 | 受講生数や受講生の理解度等に応じて、授業の順序、進行、評価方法に変更がある場合がある。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 英米の社会と文化 | | | | | | |
| 担当教員 | ダスティン・キッド | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 秋学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M8020100 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 本授業は、アメリカ合衆国の国自体や生活のあらゆる側面について学ぶことを目的とする。学生は新しい語彙を学び、そして学んだ事柄について議論もする。アメリカに対して持っている固定概念と現実を比較する機会もある。最終回には、学習の集大成として、アメリカの州について発表をする。 |
| 授業の<br>到達目標 | ・アメリカに対する知識と理解を深める<br>・学習したことや関心を持ったことを英語で表現できるようになる<br>・日本との比較できるようになる |
| 授業計画 | 第１回　Introduction and Overview<br>第２回　「アメリカ人」とは何か？<br>第３回　アメリカ国内の地方や文化の違い<br>第４回　アメリカの地理<br>第５回　アメリカの歴史<br>第６回　アメリカの憲法<br>第７回　選挙制度<br>第８回　教育（高校まで）<br>第９回　教育（大学など）<br>第 10 回　アメリカの祝日<br>第 11 回　食事<br>第 12 回　宗教<br>第 13 回　エンターテインメント<br>第 14 回　法律<br>第 15 回　州の発表 |
| テキスト | 必要に応じてプリントを配布 |
| 参考文献 | 必要に応じてプリントを配布 |
| 評価方法 | グループワーク　３０％　　課題・宿題　３０％　　州の発表　４０％ |
| 自己学習に<br>関する指針 | 新聞・テレビでアメリカを取り上げる内容に注意するといい。授業の話し合いの時に役立つ。 |
| 履修上の<br>指導・留意点 | 学習に積極的に取り組む姿勢をもつことは必要。思ったことや、内容に対する疑問を自分から発言しよう。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | アフリカの社会と文化 | | | | | | |
| 担当教員 | 鹿野　一厚 | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 2 | 配当期 | 春学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M8020110 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 「貧困」や「紛争」などの様々な困難に見舞われてきたアフリカは、21 世紀にはいって大きく変貌しつつある。もちろん貧困も紛争もまったくなくなったわけではないし、エボラ出血熱など新たな困難も発生しているが、アフリカ全体を見れば5%を超える経済成長を達成し、携帯電話が爆発的に普及するなどの明るい兆しも見えている。<br>　この授業では、最新のアフリカ研究の知見を紹介しながら、日本から遠く離れたアフリカとそこに住む人びとの経験から、私たちは何を学ぶことができるのかを探っていく。 |
| 授業の到達目標 | ①アフリカの自然や歴史・文化・社会などに関する基礎的な知識を習得する。<br>②アフリカの多様性・過去・同時代性・困難・希望について理解し、それらから何かを学ぶことができる。<br>③アフリカから学んだ様々なことを自己の言葉で説明することができる。 |
| 授業計画 | 第１回　はじめに　　アフリカから何を学ぶのか<br>第２回　アフリカの多様性を学ぶ　　国家と民族<br>第３回　アフリカの多様性を学ぶ　　生態環境と生業(1)<br>第４回　アフリカの多様性を学ぶ　　生態環境と生業(2)<br>第５回　アフリカの過去を学ぶ　　人類の誕生から古王国まで<br>第６回　アフリカの過去を学ぶ　　奴隷交易、植民地支配、そして独立(1)<br>第７回　アフリカの過去を学ぶ　　奴隷交易、植民地支配、そして独立(2)<br>第８回　アフリカの同時代性を学ぶ　　携帯革命<br>第９回　アフリカの同時代性を学ぶ　　ポピュラーアート<br>第 10 回　アフリカの困難を学ぶ　　経済の激動<br>第 11 回　アフリカの困難を学ぶ　　政治的動乱と紛争(1)<br>第 12 回　アフリカの困難を学ぶ　　政治的動乱と紛争(2)<br>第 13 回　アフリカの希望を学ぶ　　紛争処理<br>第 14 回　アフリカの希望を学ぶ　　多民族共生<br>第 15 回　おわりに　　アフリカの潜在力<br>定期試験 |
| テキスト | テキストはとくに使用しないが、毎回レジュメと資料を配付する。 |
| 参考文献 | 『アフリカ社会を学ぶ人のために』　松田素二編　2014 年　世界思想社<br>『新書アフリカ史』　宮本正興・松田素二著　1997 年　講談社現代新書<br>その他、授業中に随時紹介する。 |
| 評価方法 | 成績は、授業の小レポート（40%）、期末試験（60%）によって総合的に評価する。<br>（達成目標①②③は期末試験によって評価するが、達成目標②③は授業の小レポートによっても評価する。） |
| 自己学習に関する指針 | ＊授業には熱心に取り組むこと。そして、小レポートに自分の考えや疑問・感想などをできるだけたくさん書くこと。 |
| 履修上の指導・留意点 | ＊授業中に取り上げた映画（DVD）は、図書館に置いてある。授業中にすべてを見せることはできないので、関心がある人は授業後に残りを見ておくこと。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 東アジアの社会と文化Ⅰ | | | | | | |
| 担当教員 | 李　暁東 | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | １・２（各年開講） | 配当期 | 秋学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M8020120 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | この授業では、東アジア地域で日本にとって関係が最も深い国の一つである中国を取り上げる。中国と日本とは同じ漢字文化圏に属しており、また、長い交流の歴史をもっているため、両国の間に多くの共通性を持っている。しかし、もっぱら共通性に目を奪われると、相互間の違いを認識しにくくなり、それは相手に対する理解を妨げている。授業は日中間の異同に留意しつつ中国の社会・文化、及びその多面性と多様性について説明していきたい。 |
| 授業の到達目標 | 中国という「引っ越しの出来ない隣人」に関心をもつこと<br>中国社会と文化の多面性と多様性を理解し自分の言葉で説明できること。<br>中国社会と中国文化について、自分の考えをもつこと。 |
| 授業計画 | 第１回　総論<br>第２回　家・郷・国の観念<br>第３回　華夷、天下<br>第４回　儒教、朱子学<br>第５回　社会主義時代<br>第６回　「改革・開放」の時代　（以上、「Ⅰ．中国の人の世界認識と価値意識」）<br>第７回　「西欧の衝撃」<br>第８回　辛亥革命<br>第９回　中華人民共和国の成立<br>第 10 回　八〇年代以降　（以上、「Ⅱ．中国の歴史」）<br>第 11 回　生活面の変化から価値観の変化へ<br>第 12 回　生活環境の変化――単位から社区<br>第 13 回　格差問題、三農問題<br>第 14 回　腐敗の問題<br>第 15 回　経済改革と政治改革の間　（以上、「Ⅲ．中国社会の発展と課題」）<br>定期試験 |
| テキスト | 特になし。担当教員がレジュメ、資料、映像を事前に用意する。 |
| 参考文献 | 国分良成『中国政治から見た日中関係』（岩波現代全書）<br>天児慧『中華人民共和国史　新版』（岩波新書） |
| 評価方法 | 受講する姿勢（質疑・応答の積極性、感想文の提出、出席率）40%、期末テスト 60% |
| 自己学習に関する指針 | 事前に配られたレジュメや資料を予習しておくこと。特に関心を持つところは自分で調べておくこと。 |
| 履修上の指導・留意点 | 「東アジアの社会と文化Ⅱ」と合わせて受講することを薦める。<br>講義内容をただ知識として暗記するのではなく、中国に関する知識を身につけた上で、中国をどのように捉えるべきか、また、中国とどのように付き合うのかを考える。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 東アジアの社会と文化Ⅱ | | | | | | |
| 担当教員 | 福原　裕二 | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | １・２（各年開講） | 配当期 | 秋学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M8020130 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | この授業では、東アジア地域（北東アジアと東南アジアを包含する広大な地域）のうち、とくに朝鮮半島地域を取り上げ、その社会と文化を「理解」するために必要な知識を講義する。その際、地域研究の手法（その地域に関わる可能な限り多くの分野を取り上げ、それらを包括的に関連づけて学び、地域を地域全体として理解する）を用いること、他国理解（自国の相対化と自他認識の再検討）であることに留意しながら授業を進めていく。 |
| 授業の到達目標 | ●自国を相対化しつつ、思い込みや偏見、排他的な認識なしに、朝鮮半島地域の社会や文化を理解した上で、その地域の出来事に対して初歩的な所見を述べることができる。<br>●自らの興味・関心にそくして、朝鮮半島地域の社会や文化の一現象を取り上げ、レポートにまとめることができる。 |
| 授業計画 | 第１回　イントロダクション（「地域研究／理解すること」とは何か）<br>第２回　朝鮮半島の常識?!　Part１（あなたはどれくらい朝鮮半島を知っているか）<br>第３回　朝鮮半島の常識?!　Part２（朝鮮半島の現在）<br>第４回　朝鮮半島社会の歴史　Part１（文化の基層）<br>第５回　朝鮮半島社会の歴史　Part２（前近代東アジア国際関係システムと中世の“韓流”ブーム）<br>第６回　朝鮮半島の社会関係　Part１（伝統社会）<br>第７回　朝鮮半島の社会関係　Part２（現代社会①…家族と女性）<br>第８回　朝鮮半島の社会関係　Part３（現代社会②…世代間亀裂）<br>第９回　朝鮮半島の宗教文化（儒教とキリスト教）<br>第 10 回　朝鮮半島の政治文化　Part１（権力観と地域主義…大韓民国）<br>第 11 回　朝鮮半島の政治文化　Part２（首領制と主体…朝鮮民主主義人民共和国）<br>第 12 回　朝鮮半島の軍事文化（分断国家の現実）<br>第 13 回　朝鮮半島の経済文化　Part１（韓国経済と財閥）<br>第 14 回　朝鮮半島の経済文化　Part２（北朝鮮経済と人々の暮らし）<br>第 15 回　朝鮮半島の社会・文化に向き合おう（歴史認識問題）<br>定期試験 |
| テキスト | とくに使用しない。この講義では、担当教員が作成したレジュメ（パワーポイント・データ／ハンドアウト）をテキストとして使用する。 |
| 参考文献 | ここでは、朝鮮半島の社会と文化を理解するのに役立つ初歩的な文献を刊行年代順に挙げておきます。東アジアを包含する地域の社会と文化、また朝鮮半島のより各論的な内容に関わる文献については、担当教員に問い合わせてもらえれば紹介します。<br>古田博司『朝鮮民族を読み解く：北と南に共通するもの』（ちくま新書、1995 年）<br>イザベラ・バード、時岡敬子訳『朝鮮紀行：英国婦人の見た李朝末期』（講談社学術文庫、1998 年）<br>鄭大聲『朝鮮半島の食と酒：儒教文化が育んだ民族の伝統』（中公新書、1998 年）<br>国立国語院編、三橋広夫・趙 |
| 評価方法 | 中間レポート…50%、期末テスト…50% |
| 自己学習に関する指針 | あらかじめ、次回の ppt ハンドアウトを配付するので、その内容に目を通し、分からない語句や人名・地名があれば、調べておくこと。また、講義した内容で不明なことがあれば、質問するか参考書等で復習すること。 |
| 履修上の指導・留意点 | 春学期に開講される「東アジアの社会と文化Ⅰ」と併せて受講することが望ましい。講義内では学問（学び問い問われること）であることを意識して、なるべく聴講者に問いかけを行うよう努めますので、予習・復習のみならず、東アジア（とくに朝鮮半島と日本）をめぐる出来事にアンテナを立てておくようにして下さい。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 文学と文化Ⅰ（日本近代文学） | | | | | | |
| 担当教員 | 山根　繁樹 | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 秋学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M8020140 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 近代小説を題材に、自ら問題を発見しながら作品を読み解く方法と、その読解を説得的に他者に伝える力とを養うことを目標とする。言葉の連なりが生み出す意味作用に対する洞察力や、物語の構造を把握する分析力を磨く。それぞれの読解をもとに発表やディスカッションを行うことで、文学作品について自らの考えを的確に表現したり、他者の伝えようとしている内容を正確に把握したりする力を培う。また、日本近代文学の小説を中心とした歴史を概説し、個々の作品が文学史上に占める位置を明らかにする。それらによって、文学に対する学生の主体的なかか |
| 授業の到達目標 | （１）小説を分析的に読解することができる。<br>（２）小説についての自分の見解を述べることができる。<br>（３）小説についての自分の見解を説得的な文章にすることができる。<br>（４）小説を中心とした近代文学史の流れを説明できる。 |
| 授業計画 | 第１回　概説１　近代文学の分析方法<br>第２回　概説２　小説の構造と物語の関わり<br>第３回　概説３　現代社会と物語の強度<br>第４回　発表１　発表の仕方／文学史１＿明治期の言語状況<br>第５回　発表２　荒畑寒村「父親」／文学史２＿言文一致の誕生<br>第６回　発表３　森鷗外「寒山拾得」／文学史３＿自然主義の発生<br>第７回　発表４　佐藤春夫「指紋」／文学史４＿夏目漱石<br>第８回　発表５　谷崎潤一郎「小さな王国」／文学史５＿森鷗外<br>第９回　発表６　宮地嘉六「ある職工の手記」／文学史６＿白樺派<br>第 10 回　発表７　芥川龍之介「妙な話」／文学史７＿耽美派<br>第 11 回　発表８　内田百閒「件」／文学史８＿大正期の文学<br>第 12 回　発表９　長谷川如是閑「象やの粂さん」／文学史９＿昭和期（戦前）の文学<br>第 13 回　発表 10　宇野浩二「夢見る部屋」／文学史 10＿戦後の既成作家<br>第 14 回　発表 11　稲垣足穂「黄漠奇聞」／文学史 11＿戦後文学<br>第 15 回　発表 12　江戸川乱歩「二銭銅貨」／文学史 12＿戦後生まれの作家<br>定期試験 |
| テキスト | 池内 紀・松田 哲夫・川本 三郎編『日本文学 100 年の名作第 1 巻 1914-1923 夢見る部屋』（新潮文庫） |
| 参考文献 | 奥野健男『日本文学史　近代から現代へ』（中公新書）<br>安藤宏『日本近代小説史』（中公選書） |
| 評価方法 | 試験（３０％）発表資料と発表内容（６０％）討議（１０％） |
| 自己学習に関する指針 | 授業で発表される作品については、必ず事前に読んできてください。 |
| 履修上の指導・留意点 | 意見の違いは重要です。積極的にディスカッションに参加してください。<br>質問は、その内容に応じて、授業時間中・研究室・e-mail で対応します。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 文学と文化Ⅱ（日本近代文学） | | | | | | |
| 担当教員 | 山根　繁樹 | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 2 | 配当期 | 春学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M8020150 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 近代小説を題材に、自ら問題を発見しながら作品を読み解く方法と、その読解を説得的に他者に伝える力とを養うことを目標とする。言葉の連なりが生み出す意味作用に対する洞察力や、物語の構造を把握する分析力を磨く。それぞれの読解をもとに発表やディスカッションを行うことで、文学作品について自らの考えを的確に表現したり、他者の伝えようとしている内容を正確に把握したりする力を培う。また、長編小説を講読することにより、物語がいかに小説を駆動し、小説がいかに物語から力を得ているか、具体的に講義する。 |
| 授業の到達目標 | （１）小説を分析的に読解することができる。<br>（２）小説についての自分の見解を述べることができる。<br>（３）小説についての自分の見解を説得的な文章にすることができる。<br>（４）長編小説の物語を把握し、物語と小説の関わりを説明することができる。 |
| 授業計画 | 第１回　概説１　近代小説の分析方法<br>第２回　概説２　「言語論的転回」と物語分析<br>第３回　概説３　現代思想と文学理論<br>第４回　発表１　発表の仕方ガイダンス<br>第５回　発表２　織田作之助「木の都」／発表３＿豊島与志雄「沼のほとり」<br>第６回　発表４　坂口安吾「白痴」／発表５＿太宰治「トカトントン」<br>第７回　発表６　永井荷風「羊羹」／長編１＿『マシアス・ギリの失脚』第１章<br>第８回　発表７　獅子文六「塩百姓」／長編２＿『マシアス・ギリの失脚』第２章<br>第９回　発表８　島尾敏雄「島の果て」／長編３＿『マシアス・ギリの失脚』第３章<br>第 10 回　発表９　大岡昇平「食慾について」／長編４＿『マシアス・ギリの失脚』第４章<br>第 11 回　発表 10　永井龍男「朝霧」／長編５＿『マシアス・ギリの失脚』第５章<br>第 12 回　発表 11　井伏鱒二「遙拝隊長」／長編６＿『マシアス・ギリの失脚』第６章<br>第 13 回　発表 12　松本清張「くるま宿」／長編７＿『マシアス・ギリの失脚』第７章<br>第 14 回　発表 13　小山清「落穂拾い」／長編８＿『マシアス・ギリの失脚』第８章<br>第 15 回　長編９　『マシアス・ギリの失脚』第９章とまとめ<br>定期試験 |
| テキスト | 池内 紀・松田 哲夫・川本 三郎編『日本文学 100 年の名作第 4 巻　1944-1953　木の都』（新潮文庫）<br>池澤夏樹『マシアス・ギリの失脚』（新潮文庫） |
| 参考文献 | 前田愛『文学テクスト入門』（ちくま学芸文庫） |
| 評価方法 | 試験（３０%）発表資料と発表内容（６０%）討議（１０%） |
| 自己学習に関する指針 | 授業で発表される作品については、必ず事前に読んできてください。長編小説は、事前にどんどん読み進めてください。 |
| 履修上の指導・留意点 | 意見の違いは重要です。積極的にディスカッションに参加してください。<br>質問は、その内容に応じて、授業時間中・研究室・e-mail で対応します。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 文学と文化Ⅲ（日本古典文学） | | | | | | |
| 担当教員 | 山村　桃子 | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 秋学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M8020160 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 日本の文学はどのようにはじまり、展開したのか。各時代の歴史・社会の中で生まれた文学が、時代を超えて人々の生き方を伝える普遍的価値をもつことがある。それを「古典」と呼ぶ。本授業では、古代から近世に至るまでの歴史背景をふまえた上で、代表的な古典文学―物語と和歌を中心に―を取り挙げる。各文学作品の基礎的知識とその読解の方法を学ぶことを目的とする。また、日本文学と共に育まれた日本の文化にも視野を広げたい。 |
| 授業の到達目標 | （１）古典文学の基礎的な知識を習得する。<br>（２）古典文学の基礎的な知識をふまえた上で、代表的な古典文学を読解できるようになる。<br>（３）古典文学の展開を説明できるようになる。<br>（４）日本文学と共に育まれた日本文化について説明できるようになる。 |
| 授業計画 | 第１回　上代文学の時代背景―大和・奈良時代<br>第２回　上代の文学（歌）：万葉集<br>第３回　上代の文学（神話）：古事記<br>第４回　中古文学の時代背景―平安時代<br>第５回　中古の文学（作り物語）：竹取物語・落窪物語<br>第６回　中古の文学（長編物語）：源氏物語<br>第７回　中古の文学（日記）：蜻蛉日記・紫式部日記<br>第８回　中古の文学（歴史物語）：栄花物語・大鏡<br>第９回　中世文学の時代背景―鎌倉・室町時代<br>第 10 回　中世の文学（説話１）：今昔物語集・宇治拾遺物語<br>第 11 回　中世の文学（説話２）：御伽草子<br>第 12 回　和歌文学１：八代集・百人一首<br>第 13 回　和歌文学２：歌合・歌論・連歌<br>第 14 回　近世の文学（読本）：雨月物語<br>第 15 回　中近世の芸能：能・浄瑠璃・歌舞伎<br>定期試験 |
| テキスト | 秋山虔・三好行雄『原色シグマ新日本文学史増補版』文英堂 |
| 参考文献 | 渡部泰明他『和歌のルール』笠間書院<br>『シリーズ日本古代史①～⑥』岩波新書　その他、授業中に指示 |
| 評価方法 | 定期試験（80%）、授業中のワークシート（20%） |
| 自己学習に関する指針 | 授業中に配布の参考文献リストを参照し、古典文学に関わる文献を積極的に読んでください。 |
| 履修上の指導・留意点 | 古文には現代語訳を付しますので、古典文法が苦手な人でも受講可能です。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 文学と文化Ⅳ（英米文学Ａ） | | | | | | |
| 担当教員 | 藤吉　知美 | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 秋学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M8020170 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | １９世紀から２０世紀初頭の代表的なアメリカ文学作品を取り上げます。作品を理解するには、作家の経歴や、作品が生まれた歴史的、文化的背景を知ることが重要です。授業では、作品全体を取り上げるのではなく、エッセンスとなる部分を読みますが、興味のある作家や作品を見つけたら、翻訳でもいいので、作品全体を読んでください。また、読んだ内容に関して、自分なりの意見を持つことで、文学作品を読む際に何に着目すればいいのかがわかり、読解の幅が広がります。この授業を通して、アメリカ作家とその作品に親しんでください。 |
| 授業の到達目標 | １．アメリカ文学の代表的作家を知る。<br>２．文学作品の読み方を学ぶ。<br>３．内容に関して、自分なりの意見を持つ。 |
| 授業計画 | 第１回　授業の進め方、成績評価の説明、導入<br>第２回　Chapter 1.　Louisa May Alcott, Little Women<br>第３回　Chapter 2.　Sherwood Anderson, "Paper Pills"<br>第４回　Chapter 3.　Henry James, Daisy Miller<br>第５回　Chpater 4.　Charlotte Gilman, "The Yellow Wallpaper"<br>第６回　Chpater 5.　O.Henry, "After Twenty Years"（Ⅰ）<br>第７回　Chpater 6.　O.Henry, "After Twenty Years"（Ⅱ）<br>第８回　Chpater 7.　Kate Chopin, The Awakening<br>第９回　Chapter 8.　F. Scott Fitzgerald, The Great Gatsby<br>第10回　Chapter 9.　F. Scott Fitzgerald, The Great Gatsby（Ⅱ）<br>第11回　Chapter 10.　Mark Twain, Adventures of Huckleberry Finn（Ⅰ）<br>第12回　Chpater 11.　Mark Twain, Adventures of Huckleberry Finn（Ⅱ）<br>第13回　Chpater 12.　Edgar Allan Poe, "The Black Cat"<br>第14回　Chpater 13.　Nathaniel Hawthorne, The Scarlet Letter<br>第15回　Chpater 14.　Ralph Waldo Emerson, Nature |
| テキスト | Let's Learn English from American Literature 「アメリカ文学から英語を学ぼう」（英宝社） |
| 参考文献 | 授業で適宜配布する。 |
| 評価方法 | 試験８０％　授業での発表・態度２０％ |
| 自己学習に関する指針 | 辞書を活用しながら予習を行うこと。 |
| 履修上の指導・留意点 | 授業への積極的な参加を評価します。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 文学と文化Ｖ（英米文学Ｂ） | | | | | | |
| 担当教員 | 藤吉　知美 | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 2 | 配当期 | 春学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M8020180 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | ２０世紀における、代表的なアメリカ文学作品を取り上げます。授業では、エッセンスとなる部分を読み、問題を解くことで、作品理解に努めます。また、作家の経歴や、作品が生まれた歴史的、文化的背景についても知識を深めます。作品を読んだ後は、内容についての意見を発表してください。文学作品の解釈は、明確にYesとかNoで言い切れないものが多くあります。そうであるからこそ、自分の意見を支える理由や根拠を述べることが大切です。授業の中で、興味のある作家や作品を見つけたら、翻訳でもいいので、作品全体を読み、アメリカ文学への興 |
| 授業の到達目標 | １．作品の歴史的、文化的背景を知る。<br>２．内容に関する問題を解いて、作品理解を深める。<br>３．内容について、自分の意見を述べることができる。 |
| 授業計画 | 第１回　授業の進め方、成績評価の説明、導入<br>第２回　Chapter 1.　William Faulkner, "A Rose for Emily"（Ⅰ）<br>第３回　Chapter 2.　William Faulkner, "A Rose for Emily"（Ⅱ）<br>第４回　Chapter 3.　Ernest Hemingway, "The Short Happy Life of Francis Macomber"<br>第５回　Chapter 4.　Ernest Hemingway, The Old Man and the Sea<br>第６回　Chapter 5.　John Steinbeck, "Of Mice and Men"（Ⅰ）<br>第７回　Chpater 6.　John Steinbeck, "Of Mice and Men"（Ⅱ）<br>第８回　Chpater 7.　Saul Bellow, "Seize the Day"（Ⅰ）<br>第９回　Chpater 8.　Saul Bellow, "Seize the Day"（Ⅱ）<br>第10回　Chpater 9.　Hisaye Yamamoto, "Seventeen Syllables"（Ⅰ）<br>第11回　Chpater 10.　Hisaye Yamamoto, "Seventeen Syllables"（Ⅱ）<br>第12回　Chpater 11.　Leslie Marmon Silko, "Ceremony"（Ⅰ）<br>第13回　Chpater 12.　Leslie Marmon Silko, "Ceremony"（Ⅱ）<br>第14回　復習　難しかった作品の再読<br>第15回　まとめ　全体の振り返り |
| テキスト | Let's Learn English from American LiteratureⅡ　「アメリカ文学から英語を学ぼうⅡ」（英宝社） |
| 参考文献 | 授業で適宜配布する。 |
| 評価方法 | 試験８０％　授業での発表・態度２０％ |
| 自己学習に関する指針 | 辞書を活用しながら予習を行うこと。 |
| 履修上の指導・留意点 | 授業への積極的な参加を評価します。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 日本文化特論Ⅰ（妖怪学） | | | | | | |
| 担当教員 | 小泉　凡 | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 2 | 配当期 | 春学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M8020190 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 異界は洋の東西をとわず存在する。人間の想像力が生み出した異界に属する超自然的なものの存在（妖怪）に多角的にアプローチすることから、人間と異界との交渉の歴史、妖怪伝承の文化的背景を考察することを目標とする。授業では、いくつかの具体的な妖怪伝承を取り上げ、その文化背景への理解を深めるとともに、ヨーロッパの妖精信仰との比較や現代社会における文化資源、観光資源としての妖怪の意味についても考えていく。 |
| 授業の到達目標 | １．日本の民俗的世界にみえる妖怪とその文化背景としての民俗信仰について説明することができる。<br>２．日本の妖怪と西洋の妖精の共通点、相違点について説明することができる。<br>３．現地研修を通し、観光・文化資源としての妖怪について、意義を述べることができる。 |
| 授業計画 | （講義 28 時間、演習 2 時間）<br>第１回　イントゥロダクション：妖怪の概念と種類、妖怪研究の歴史<br>第２回　日本人における妖怪観の変遷<br>第３回　一つ目小僧と製鉄の神<br>第４回　ダイダラ坊と巨人伝説<br>第５回　河童と水神①～河童はなぜ馬と胡瓜と相撲が好きか、なぜ頭に皿があるのか～<br>第６回　河童と水神②～熊本県球磨地方の川ん太郎と山ん太郎から考える～<br>第７回　雪女伝承と再話怪談としての「雪女」～書承と口承を行き来する妖怪物語～<br>第８回　現象妖怪としての再生物語～輪廻転生の死生観を考える～<br>第９回　水木しげると小泉八雲①～幼児体験をめぐる共通性～<br>第 10 回　水木しげると小泉八雲②～アニミズムに根差す妖怪観～<br>第 11 回　ザシキワラシとバンシー～日本とアイルランドの家につく精霊たち～<br>第 12 回　ケルト世界の妖精伝承の特色～ドルイド信仰をめぐって～<br>第 13 回　現代社会と妖怪文化～地域活性化に寄与する妖怪たち～<br>第 14 回　観光・文化資源としての妖怪たち<br>～水木しげる記念館（境港市）または日本妖怪博物館（広島県三次市）での現地研修～<br>第 15 回　まとめ：日本における神と妖怪 |
| テキスト | 授業で、プリントを適宜配布する。 |
| 参考文献 | 小松和彦他編『47 都道府県・妖怪伝承百科』（丸善出版、2017 年）<br>小松和彦『妖怪文化入門』（角川ソフィア文庫、2012 年）<br>ウェブサイト「怪異妖怪伝承データベース」「怪異妖怪画像データベース」（国際日本文化研究センター） |
| 評価方法 | 平常点（授業態度・コメントカード）（30%）、現地研修への参加とレポート（30%）、期末課題（40%） |
| 自己学習に関する指針 | 授業中に紹介した参考文献を積極的に読むことが望ましい。 |
| 履修上の指導・留意点 | 現地研修にともない、水木しげる記念館または日本妖怪博物館の入館料および交通費の一部負担金が必要となる。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 日本文化特論Ⅱ（しまねの祭りと芸能） | | | | | | |
| 担当教員 | 品川　知彦 | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 2 | 配当期 | 春学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M8020200 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 島根には特色ある祭礼行事が数多く伝承されている。その行事を見る上で必要な基本的な知識を習得するとともに、行事の内容・意味・歴史について解説する。また、行事の担い手不足が生じている中で、それでもなお、行事を存続させようとしているのか、その心意についても考察を加える。 |
| 授業の到達目標 | （１）「神集い信仰」・「荒神信仰」・「歳徳神信仰」・「神楽」など島根に特徴的な祭礼行事の内容を把握する。<br>（２）行事を把握した上で、その意味などを県外の人などにも伝えられることができる。 |
| 授業計画 | 第１回　ガイダンス（授業の目的と内容）・御田植え神事<br>第２回　祭礼行事を見る上での基本的な知識<br>柳田国男の民俗学１<br>第３回　柳田国男の民俗学２<br>第４回　柳田以後の民俗学の展開<br>第５回　頭屋制・祭礼と神話との関係<br>青柴垣神事<br>第６回　諸手船神事<br>第７回　民俗学と歴史学<br>出雲の神在祭１<br>第８回　出雲の神在祭２<br>第９回　縁結び信仰の成立<br>第 10 回　荒神信仰１<br>第 11 回　荒神信仰２<br>第 12 回　出雲と相撲・隠岐古典相撲<br>第 13 回　島根の神楽１<br>第 14 回　島根の神楽２<br>第 15 回　祭礼の継承とオカゲ意識 |
| テキスト | ・適宜プリントを配布 |
| 参考文献 | １石塚尊俊『山陰の祭祀伝承』、山陰民俗学会、平成２年<br>２『柳田国男全集』２８、ちくま文庫、平成２年<br>（『柳田国男全集』８、筑摩書房、平成 10 年） |
| 評価方法 | 簡単なレポート、試験などから総合的に評価する。 |
| 自己学習に関する指針 | ・参考文献を熟読することをお薦めする。<br>・授業で紹介する行事などを実際に見に行くことが望ましい。 |
| 履修上の指導・留意点 | 授業前に、配布したプリントを一読しておくこと。 |

| 授業科目 | 英米文学特論（へるん） | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 担当教員 | 松浦　雄二 | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 秋学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M8020210 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | ラフィカディオ・ハーン（帰化名小泉八雲、松江では親しみをこめて「へるん」さんと呼ばれている）の紀行文を読むと、英語のさまざまな語り口を楽しむことができる。そこには静逸な情景描写、華麗な詩的高揚、哀愁にみちた素朴な語り口の伝承物語などが盛り込まれ、自在な文体で読者を楽しませてくれる。本講義では、『日本の面影』(Glimpses of Unfamiliar Japan)を中心にハーン作品の和訳を試み、その文体を味わいながら英語力を高め、ハーンの使用する独特の語彙や書きぶりについて、またハーンにとっての松江、ハ |
| 授業の到達目標 | 本授業の目標は次の二つである。<br>1. 英語の読解力を向上させる。<br>2. ハーン的な英語表現について考察しながら作品鑑賞力を高める。 |
| 授業計画 | 第１回　ハーン作品入門～特徴的な語彙と文体<br>第２回　『日本の面影』から「神々の国の首都」第 1 節より<br>第３回　『日本の面影』から「神々の国の首都」第 2 節より<br>第４回　『日本の面影』から「神々の国の首都」第 5 節より<br>第５回　『日本の面影』から「神々の国の首都」第 19 節より<br>第６回　『日本の面影』から「神々の国の首都」第 21 節より<br>第７回　『日本の面影』から「盆踊り」より<br>第８回　『日本の面影』から「日本海に沿うて」第 8 節より<br>第９回　『日本の面影』から「日本海に沿うて」第 9 節より<br>第 10 回　ハーンの怪談（「耳なし芳一」より）<br>第 11 回　ハーンの怪談（「雪女より」）<br>第 12 回　『日本の面影』、その 12<br>第 13 回　『骨董』「幽霊滝」より<br>第 14 回　ヘルンさん言葉、英語覚書き帳などについて<br>第 15 回　ハーンと出雲弁と作品<br>期末試験 |
| テキスト | プリント教材を用いる。 |
| 参考文献 | ラフカディオ・ハーン著　池田雅之訳『新編 日本の面影』角川学芸出版 税込 842 円※<br>小泉 時・小泉 凡共編『文学アルバム小泉八雲増補新版』恒文社 本体 2500 円※。<br>※価格は参考価格である。 |
| 評価方法 | 成績は、和訳の担当、毎授業のコメントシート、期末テストの成績により合計 100 点満点で評価する。 |
| 自己学習に関する指針 | 辞書を丹念に引くこと。音読すること。 |
| 履修上の指導・留意点 | 英語の読解力と作品鑑賞力を高めることに比重を置いている。編入学を希望する受講者も想定している。<br>開講時期は、2 月末から 3 月初めの予定である。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 日本の言語と文化Ⅰ | | | | | | |
| 担当教員 | 山村　仁朗 | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 春学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M8020220 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 日本の文化が育んできた日本語とは、言語としてどのような特徴を持つのか。この授業では「卵」と「玉子」の表記、「竹刀」をシナイと読む理由など、身の回りの日本語の中から具体的な問題を取りあげ、それらの解決を試みる。そのことを通して、日本語への理解を深め、言葉について研究するとはどういうことかを知ることを目的とする。併せて、言葉に限らず身の回りには多くの問題が存在していることを知り、その多くの問題を見つけだす力も養成したい。 |
| 授業の到達目標 | （１）日本語について関心をもつ。<br>（２）日本語の特徴を指摘することができる。<br>（３）日本語の問題を見つけることができる。 |
| 授業計画 | 第１回　「卵」と「玉子」はどう違うか①　現代（表記・意味）<br>第２回　「卵」と「玉子」はどう違うか②　上代・中古（表記・意味）<br>第３回　「卵」と「玉子」はどう違うか③　中世・近世（表記・意味）<br>第４回　「卵」と「玉子」はどう違うか④　近代（表記・意味）<br>第５回　ひらがなとカタカナはいつごろからあるのか（文字）<br>第６回　五十音図には何音あるか、「いろはにほへと…」を最後まで言えるか（文字）<br>第７回　「竹刀」はなぜ「シナイ」と読むのか（漢字）<br>第８回　「汽車がホームにつく」と「電気がつく」の「つく」は同じか違うか（意味）<br>第９回　「犬。」の「犬」は語か文か（文法）<br>第 10 回　「青い、青、青くなる…」「青い、赤い、白い…」…正しい単語の分け方はあるか（文法）<br>第 11 回　江戸時代には単語をどのように分けたか（文法）<br>第 12 回　「これはペンです／これはペンではありません／これはペンですか」はどう違うか（文法）<br>第 13 回　「せっかく勉強したのに…」の「せっかく」とはどういう意味か（文法）<br>第 14 回　「今、雷が鳴った」は過去か現在か（文法）<br>第 15 回　まとめ―日本語を研究するとはどういうことか |
| テキスト | 特になし。適宜プリントを配布する。 |
| 参考文献 | 金田一春彦『日本語の特質』（日本放送出版協会）<br>その他は授業時に適宜、紹介する。 |
| 評価方法 | 定期試験（80%）、毎回のコメントカードの内容（20%） |
| 自己学習に関する指針 | 身の回りの言葉に関心を持ち、問題を見つける姿勢を持ってください。 |
| 履修上の指導・留意点 | 授業は板書を中心に行います。ノートかルーズリーフを準備してください。<br>質問はオフィスアワーに受けつけます。前もって、メールで連絡をしてください。<br>y-yamamura@u-shimane.ac.jp |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 日本の言語と文化Ⅱ | | | | | | |
| 担当教員 | 山村　仁朗 | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 秋学期 |
| 授業形態 | 演習 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M8020230 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | この授業では、天草版『伊曾保物語』を国語学的に講読する。初めの数回は教員が講義を行う。以降は担当者を決め、受講生に順次発表してもらう。発表に際して、翻字、語句調査、現代語訳、日本語の問題点についての調査・考察を課す。それらの作業を通して、当時の人々がどのような日本語をもっていたのかを理解することを目標とする。併せて、自分で問題を設定し、適切な用例（データ）を収集する力を養成したい。<br>天草版『伊曾保物語』とは室町時代に伝来 |
| 授業の到達目標 | （１）天草版『伊曾保物語』を原文で読むことができる。<br>（２）日本語の用例収集ができる。<br>（３）収集した用例を用いて発表することができる。 |
| 授業計画 | 第１回　発表の仕方、授業の進め方<br>第２回　担当箇所の決定、天草版『伊曾保物語』の読み方<br>第３回　中世文学概説<br>第４回　中世日本語とキリシタン資料<br>第５回　室町時代の日本語資料<br>第６回　受講生による発表（１）「鶏と下女の事」<br>第７回　受講生による発表（２）「二人の知音の事」<br>第８回　受講生による発表（３）「棕梠と竹の事」<br>第９回　受講生による発表（４）「大海と野人の事」<br>第 10 回　受講生による発表（５）「炭焼と洗濯人の事」<br>第 11 回　受講生による発表（６）「病者と薬師の事」<br>第 12 回　受講生による発表（７）「陣頭の貝吹きの事」<br>第 13 回　受講生による発表（８）「母と子の事」<br>第 14 回　受講生による発表（９）「鶏と犬の事」<br>第 15 回　授業のまとめ―中世日本語とはどのような言語であったか |
| テキスト | プリントを配布する。 |
| 参考文献 | 土井忠生他『邦訳日葡辞書』（岩波書店）<br>大塚光信『キリシタン版エソポのハブラス私注』（臨川書店） |
| 評価方法 | 発表（80%）、発表への質問・コメントカード（20%） |
| 自己学習に関する指針 | 自分の発表は入念に準備してください。そうでない場合も該当箇所を読んだうえで参加し、積極的に質問してください。 |
| 履修上の指導・留意点 | 発表についての質問は担当日の１週間以上前であれば受けつけます。<br>但し、メールにて事前予約すること。<br>y-yamamura@u-shimane.ac.jp |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 日本の言語と文化Ⅲ | | | | | | |
| 担当教員 | 山村　仁朗 | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 2 | 配当期 | 春学期 |
| 授業形態 | 演習 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M8020240 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | この授業では、平安時代の文学作品『竹取物語』を国語学的に購読する。初めの数回は教員が講義を行う。以後は担当箇所を決めて、受講生が発表を行う。発表に際して、受講生には翻字、語句調査、現代語訳、日本語の問題点についての調査・考察を課す。それらの作業を通して、当時の人々がどのような日本語をもっていたのかを理解することを目標とする。併せて、自分で問題を設定し適切な用例（データ）を収集したうえで、調査・考察する力を養成したい。 |
| 授業の到達目標 | （１）変体仮名を読むことができる。<br>（２）日本語の調査・考察ができる。<br>（３）調査・考察した内容を用いて発表することができる。 |
| 授業計画 | 第１回　発表の仕方、授業の進め方<br>第２回　担当箇所の決定、変体仮名の読み方<br>第３回　中古文学概説<br>第４回　『竹取物語』概説<br>第５回　中古語概説<br>第６回　受講生による発表（１）「貴公子たちの求婚」前半<br>第７回　受講生による発表（２）「仏の御石の鉢」<br>第８回　受講生による発表（３）「蓬莱の玉の枝」<br>第９回　受講生による発表（４）「火鼠の皮衣」<br>第 10 回　受講生による発表（５）「竜の頸の玉」<br>第 11 回　受講生による発表（６）「燕の子安貝」<br>第 12 回　受講生による発表（７）「帝の求婚」<br>第 13 回　受講生による発表（８）「かぐや姫の昇天」<br>第 14 回　受講生による発表（９）「富士の煙」<br>第 15 回　授業のまとめ―平安時代の日本語とはどのようなものであったか |
| テキスト | ・『字典かな』（出典明記・改定版　笠間書院）<br>・本文についてはプリントを配布する。 |
| 参考文献 | ・『角川古語大辞典』１～５（角川書店）<br>・『日本国語大辞典』１～１３（小学館）<br>・『日本古典文学大辞典』１～５（岩波書店） |
| 評価方法 | 発表（70%）、発表に対する質問・コメントカード（10%）、定期試験（20%）、 |
| 自己学習に関する指針 | 自分の発表は入念に準備してください。そうでない場合も該当箇所を読んだ上で授業に参加し、積極的に質問してください。 |
| 履修上の指導・留意点 | 発表についての相談は担当日の１週間以上前であれば受けつけます。<br>但し、メールで事前連絡すること。<br>y-yamamura@u-shimane.ac.jp |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 英米の言語と文化Ⅰ | | | | | | |
| 担当教員 | 藤吉　知美・中井　誠一 | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 春学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M8020250 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | この授業では、いわゆる語学としての英語学習のみではなく、英語学習を通して言葉と文化の関係にも思いを致し、言葉と文化の間にある相互的な影響や作用について考えながら、基礎的な英語の四技能を総合的に身につける。初回授業で１年生共通のプレイスメントテストを行い、２回目の授業からA、Bの２クラスに分けて各担当者で授業を実施する。 |
| 授業の到達目標 | 1. 英語の基本的あるいは日常的な語彙力がある。<br>2. 基本的あるいは日常的な語彙を使用した基礎的英語表現を「聞く」「読む」作業をとおして理解している。<br>3. 基本的あるいは日常的な語彙を使用して、「話す」あるいは「書く」ことを通して基礎的な英語表現ができる。<br>4. 上記2、3の技能を可能にする統語的法則（文法）についての基礎理解がある。 |
| 授業計画 | 第１回　１年生共通プレイスメントテスト<br>第２回　イントロダクション（A、B クラス別）<br>第３～15 回　第２回授業でA、B 各担当者より示されたクラス別シラバスによって進めます。<br>期末試験 |
| テキスト | A、B 各クラスの担当者によって指示されたテキスト、あるいはプリント教材を用います。4 月ガイダンス時に指示する予定ですが、テキストはプレイスメントテストの結果が出て受講クラスが決定されたのち、指示に応じて必ず購入してください。購入価格はおおよそ 2000 円前後の予定です（価格が変更される場合もあります）。 |
| 参考文献 | 担当者が適宜紹介します。 |
| 評価方法 | 毎回の演習、課題の提出、定期試験の得点を合計 100 点満点で評価します。詳しい説明は 2 回目の授業で担当者から説明があります。 |
| 自己学習に関する指針 | 先ず覚えること（インプット）とそれを自分で使ってみる（アウトプット）ことが大事です。自分の考えや気持ちを伝える時は、「何とか伝えたい」という気持ちを態度に出して何か発することが大事です。 |
| 履修上の指導・留意点 | 英語の基礎力を身につけたい人、英語力を高めたい人は履修してください。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 英米の言語と文化Ⅱ | | | | | | |
| 担当教員 | ダスティン・キッド、中井誠一 | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 秋学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M8020260 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | この授業では、いわゆる語学としての英語学習のみではなく、英語学習を通して言葉と文化の関係にも思いを致し、言葉と文化の間にある相互的な影響や作用について考えながら、英語の基礎的な四技能を、特に「話す」「書く」の発信型技能に焦点をおきながら身につける。初回授業で１年生共通のプレイスメントテストを行い、２回目の授業からA、Bの２クラスに分けて各担当者で授業を実施する。 |
| 授業の到達目標 | 1. 英語の基本的あるいは日常的な語彙力がある。<br>2. 基本的あるいは日常的な語彙を使用した英語表現を「聞く」「読む」作業を通して理解するとともに、「話す」ことを通した積極的なコミュニケーション、「書く」ことによる基本表現ができる。<br>3. 上記2の技能を可能にする統語的法則（文法）についての基礎理解がある。 |
| 授業計画 | 第１回　１年生共通プレイスメントテスト<br>第２回　イントロダクション（A、Bクラス別）<br>第３～15回　第２回授業でA、B各担当者より示されたクラス別シラバスによって進めます。<br>期末試験 |
| テキスト | A、B各クラスの担当者によって指示されたテキスト、あるいはプリント教材を用います。秋学期開講までには指示する予定です。テキストはプレイスメントテストの結果が出て受講クラスが決定されたのち、指示に応じて必ず購入してください。購入価格はおおよそ2000円前後の予定です（価格が変更される場合もあります）。 |
| 参考文献 | 担当者が適宜紹介します。 |
| 評価方法 | 毎回の演習、課題の提出、定期試験の得点を合計100点満点で評価します。詳しい説明は2回目の授業で担当者から説明があります。 |
| 自己学習に関する指針 | 英語を話すためには、英語圏や日本の文化についての情報も併せて、先ずは語彙・英語表現を覚えること（インプット）を常日頃から心がけておくことが大事です。インプットが無ければ、アウトプットは不可能です。さらに「相手に伝えたい」という積極的な気持ちも必要です。 |
| 履修上の指導・留意点 | 英語の基礎力を身につけたい人、英語力を高めたい人は履修してください。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 英米の言語と文化Ⅲ | | | | | | |
| 担当教員 | 玉木　祐子 | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 2 | 配当期 | 春学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M8020270 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 基礎的な、大学生レベルの英文読解に必須の語彙、構文、英文法等を習得する。使用するテキストは主に近現代のイギリス、アメリカ、カナダの文学作品を扱い、「食」という切り口から考察を行うものである。このため、語学力養成に加えてテキストに収められた作品を手掛かりに、その背景となる地理、歴史、文化についての知識と理解を深めることを目標としている。授業において履修生は毎回、あらかじめ指定する範囲の予習に基づいてペアワーク、発言、発表、ディスカッションなどを行うことになるため、授業に対する主体的なかかわりが求められる。 |
| 授業の到達目標 | （１）英米の代表的な文学作品の概要を理解し、文化についての知識を深める。<br>（２）英文の基本構造を理解できる。<br>（３）基礎的な語彙・文法を習得する。<br>（４）他者と協力をし、課題解決を行う能力を習得する。 |
| 授業計画 | 第１回　オリエンテーション　テキスト、予復習に関する説明等<br>第２回　Chapter1 Harry Potter and Chocolate frogs<br>第３回　Chapter2 Peter Rabbit and Pie<br>第４回　Chapter3 Mrs. Rabbit and Herb Tea<br>第５回　Chapter4 Winnie-the Pooh and Honey<br>第６回　Chapter5 Daqddy-Long-Legs and Ice Cream<br>第７回　Chapter6 Kenji Miyazawa and Tomatoes<br>第８回　Chapter7 O.Henry and "Witches' Loaves"<br>第９回　Mid Term<br>第10回　Chapter8 The Old Man and The Fish<br>第11回　Chapter9 East of Eden and Lettuce<br>第12回　Chapter10 Laura and Cheese-Making on the Prairie<br>第13回　Chapter11 Breakfast and Tiffany's<br>第14回　Chapter12 "Mujina" and "Soba"<br>第15回　Review<br>定期試験 |
| テキスト | A Taste of English : Food and Fiction (朝日出版社) |
| 参考文献 | 教場にて配布<br>（オンライン資料については　https://quizlet.com/class/1378127/　を用いる。） |
| 評価方法 | Mid Term (45%), 定期試験 (45%), 授業参加度(10%) |
| 自己学習に関する指針 | テキストおよび配布資料、オンライン教材を用いて予、復習を行う。 |
| 履修上の指導・留意点 | 授業中は演習形式で行い、受講生にはペアワーク、発言等の場における意欲的な参加を求めます。予習、復習は必須です。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 英米の言語と文化Ⅳ | | | | | | |
| 担当教員 | ＪＭマユー | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 2 | 配当期 | 秋学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M8020280 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | The class offers:<br>A. the opportunity to develop individual writing skills through:<br>1. analysis of style and word choice employed by representative modern English writers.<br>2. consolidating grammatical skills.<br>3. improving vocabulary and word usage.<br>B. a gu |
| 授業の到達目標 | The objectives of the class are:<br>A. To acquire the ability to express ideas in correct, clear and attractive English.<br>B. Gaining confidence when formulating sentences.<br>C. Stimulating self-study of, and interest in English literary sources. |
| 授業計画 | 1. Introduction to the craft of writing. Discussion of the elements of fiction with special focus on style at both word (vocabulary) and sentence (grammar) level.<br>Discussion on class preparation and materials (texts, dictionaries).<br>2. Introduction and discussion of Text 1. Detailed analysis of elements (plot, characters, setting, mood, style).<br>3. Discussion of Composition 1 based on Text 1.<br>Introduction, discussion and analysis of Text 2.<br>4. Discussion of Composition 2 based on Text 2.<br>Introduction, discussion and analysis of Text 3.<br>5. Discussion of Composition 3 based on Text 3.<br>Introduction, discussion and analysis of Text 4.<br>6. Discussion of Composition 4 based on Text 4.<br>Introduction, discussion and analysis of Text 5.<br>7. Discussion of Composition 5 based on Text 5.<br>Introduction, discussion and analysis of Text 6.<br>8. Discussion of Composition 6 based on Text 6.<br>Introduction, discussion and analysis of Text 7<br>9. Discussion of Composition 7 based on Text 7.<br>Introduction, discussion and analysis of Text 8<br>10. Discussion of Composition 8 based on Text 8.<br>Introduction, discussion and analysis of Text 9.<br>11. Discussion of Composition 9 based on Text 9.<br>Introduction, discussion and analysis of Text 10.<br>12. Discussion of Composition 10 based on Text 10.<br>Introduction, discussion and analysis of Text 11<br>13.. Discussion of Composition 11 based on Text 11.<br>General revision of all compositions.<br>14. General Revision and discussion of main problems.<br>Introduction, discussion and analysis of Text 12<br>Discussion of exam composition based on Text 12.<br>15. Recapitulation<br>16. Examination |
| テキスト | No textbook (teaching materials will be provided) |
| 参考文献 | |
| 評価方法 | Evaluation based on:<br>1. Performance in class(20%)<br>2. Weekly assignment(50%)<br>3. Final examination(30%) |
| 自己学習に関する指針 | |

| | |
|---|---|
| 履修上の<br>指導・留意点 | |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 中国の言語と文化Ⅰ | | | | | | |
| 担当教員 | 鳥谷　聡子 | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 春学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 1 | 授業コード | M8020290 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 中国には 56 の民族があり、広東語や上海語など、実際には多種の言語や方言が使われている中で、現在中国の標準語になっている“汉语の普通话”を学ぶ。ピンイン、四声、発音から始まり、テキストの会話や作文の練習を通して中国語の基礎を学習する。中国語は漢字を使う言語のため、同じく漢字を使う日本人には親しみを感じる言語ではあるが、文化が違えばその発想も違うため、日本語との違いを通してその文化の違いを感じ取ってもらう。また、中国の音楽や中国人から見た日本の文化に対するエッセイなどに触れて、中国語を通して中国への理解を深め |
| 授業の到達目標 | ①ピンイン表記の中国語が読める。 ②<br>テキスト内の単語と文法を覚え、それを使って作文や簡単な会話ができる。<br>③中国語検定試験準 4 級レベルを目指す。 |
| 授業計画 | 第１回　中国語ウォーミングアップ、発音・声調・簡体字<br>第２回　発音の練習、人称代名詞、“是”の文<br>第３回　一般動詞の文、疑問詞“什么”、“的”の使い方<br>第４回　数字・年齢の言い方、副詞“也”“都”<br>第５回　“有”の構文、“喜欢”<br>第６回　方位詞、年月日・時刻の言い方、時を表すことばの位置<br>第７回　動詞“在”、指示代名詞、助数詞、形容詞述語文<br>第８回　助動詞“想”“要”、疑問詞“几”“多少”<br>第９回　“有点儿”“一点儿”、程度補語<br>第 10 回　“好好儿”、二つの“了”<br>第 11 回　助動詞“会”“能”“打算”<br>第 12 回　動作の進行を表す“在”、前置詞“在”<br>第 13 回　経験を表す“过”、時間・回数<br>第 14 回　動詞の重ね型、連動文<br>第 15 回　総まとめ、会話テスト<br>定期試験 |
| テキスト | 「ちからになる中国語」金星堂 |
| 参考文献 | 適宜プリント配布　　中日辞典と日中辞典(電子辞書だと便利) |
| 評価方法 | 期末試験(60 点)会話テスト(30 点)、残り 10 点は授業への取り組みと出席状況を総合して評価します。 |
| 自己学習に関する指針 | テキストを何度も繰り返し音読すること。その際、発音と四声に注意して、大きな声で読むことが大事。文字や文章も書いてみること。 |
| 履修上の指導・留意点 | 質問は授業時間中と授業の前後で対応します。<br>受講者は、前から詰めて着席してください。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 中国の言語と文化Ⅱ | | | | | | |
| 担当教員 | 鳥谷　聡子 | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 秋学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 1 | 授業コード | M8020300 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 「中国の言語と文化１」に引続き、中国語(汉语) の基礎を学ぶ。テキストの会話や作文の練習を通して、中国語の文法を学習する。また、中国の音楽や文化に触れるだけでなく、日本の文化を中国語で説明することにもチャレンジする。今後中国人に限らず、台湾やシンガポールなど、多くの中華圏の観光客が日本に来ることが期待されるので、中国語を使って日本、特に島根県や山陰地域の観光地の説明を、観光パンフレット等を利用して学び、その学習で得た中国語で日本や山陰地域の魅力を伝え、相互理解を深めることを目的とする。 |
| 授業の到達目標 | ①ピンイン表記無しで、簡単な中国語が読める。　②テキスト内の単語と文法を覚え、それを使って作文や簡単な日常会話ができる。<br>③中国語で自己紹介ができる。　④中国語検定試験準４級以上のレベルを目指す。 |
| 授業計画 | 第１回　中国語で自己紹介、前期の復習、中国語検定試験準４級の説明<br>第２回　比較表現、試験対策(1)<br>第３回　前置詞“给”、試験対策(2)<br>第４回　動詞　+“一下”、試験対策(3)<br>第５回　簡単な方向補語、試験対策(4)<br>第６回　試験対策(5)<br>第７回　試験対策(6)<br>第８回　試験対策まとめ<br>第９回　使役形、助動詞“可以”、禁止表現<br>第 10 回　“太～了”、結果補語、持続を表す“着”<br>第 11 回　選択疑問文、動詞　+“起来”<br>第 12 回　“把”の構文、可能補語“得”、“是～的”の構文<br>第 13 回　“从～到…”、受身文<br>第 14 回　理由の言い方、“跟～一样”<br>第 15 回　総まとめ、会話テスト<br>定期試験 |
| テキスト | 「ちからになる中国語」金星堂 |
| 参考文献 | 適宜プリント配布　　中日辞典と日中辞典(電子辞書だと便利) |
| 評価方法 | 期末試験(60 点)会話テスト(30 点)、残り 10 点は授業への取り組みと出席状況を総合して評価します。 |
| 自己学習に関する指針 | テキストを何度も繰り返し音読すること。その際、発音と四声に注意して、大きな声で読むことが大事。文字や文章も書いてみること。 |
| 履修上の指導・留意点 | 質問は授業時間中と授業の前後で対応します。<br>受講者は、前から詰めて着席してください。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 韓国の言語と文化Ⅰ | | | | | | |
| 担当教員 | 崔　貞美 | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 春学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 1 | 授業コード | M8020310 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 基礎的な韓国語を「読む」「聴く」「話す」というバランスを考えながら身に着けていきます。また、言語を学ぶということは、その背景にある文化を理解することも必要です。そこで歴史、風習にも折々触れていきます。 |
| 授業の到達目標 | ・ハングル（母音、子音）を読めるようにします。<br>・簡単な日常会話ができるようにします。 |
| 授業計画 | 第１回　ハングルの特徴、文字の仕組み（教室用語）<br>第２回　文字と発音１　基本母音、基本子音（平音９コ）、簡単なあいさつ①<br>第３回　文字と発音２　基本子音（激音５コ、濃音５コ）、簡単なあいさつ②<br>第４回　文字と発音３　二重母音（11 コ）、簡単なあいさつ③<br>第５回　文字と発音４　パッチム、２文字パッチム、発音のルール<br>第６回　第１課《私はクマモトマキです。》（～は）（～です）（～ではありません）（～と申します）<br>第７回　第１課《私はクマモトマキです。》○グループ練習、韓国人の名字<br>第８回　第２課《これは何ですか？》（指示代名詞）（疑問詞）（～も）<br>第９回　第２課《これは何ですか？》○グループ練習、家族の呼称<br>第 10 回　第３課《いつありますか？》（～が）（～に）（～ます、～です）（あります、います／ありません、いません）<br>第 11 回　第３課《いつありますか？》○グループ練習、韓国料理<br>第 12 回　第４課《誰の歌が好きですか？》（～が好きだ、～を好む）（～しない）（～と）（～を）<br>第 13 回　第４課《誰の歌が好きですか？》○グループ練習、体の部位<br>第 14 回　復習（文字と発音のまとめ）、ハングルとひらがなの対照<br>第 15 回　会話（自己紹介）<br>定期試験（会話も含む） |
| テキスト | グループで楽しく学ぼう！韓国語（朝日出版社）朴美子他　定価 2,500 円 |
| 参考文献 | 授業において適宜紹介します。※プリント配布 |
| 評価方法 | 期末試験 60 点、会話テスト 30 点、小テスト、課題提出、出席状況等で 10 点、総合 100 点で評価します。 |
| 自己学習に関する指針 | 週に１度しか授業がないので、復習することが上達の近道です。特に発音の練習などは何度も繰り返しやることがとても大切です。 |
| 履修上の指導・留意点 | 欠席が６回になると原則試験は受けられません（但し、公欠の場合は事前に公欠届を提出すること）。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | しまねの文化を歩く | | | | | | |
| 担当教員 | 渡部　周子 | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 春学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M8020330 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 文化と一言にいっても多彩であるが、「芸術」「教育」をキーワードとして、学んでいくこととする。加えて、今日では、意識することが少なくなってきた時候の変化についても、適宜、言及する。このことによって、日本文化に示された「心性」（メンタリティ）、とりわけ「美意識」について考えて行くことを目標とする。教室での座学を通して学んだ上で、学生自らが文化（短大の近隣である松江を軸として）に接することで、主体的に学び取って行くものとしたい。 |
| 授業の到達目標 | |
| 授業計画 | 第１回　ガイダンス　　履修に関する諸注意<br>第２回　時候と文化１　　初春から春へ<br>第３回　教育と文化２　　文化施設情報<br>第４回　教育と文化３　　文化施設の沿革と歴史<br>第５回　教育と文化４　　特色ある文化施設情報<br>第６回　芸術１　　美術と文化<br>第７回　芸術２　　美術の様々なジャンル<br>第８回　芸術３　　美術の解釈　～現代的作品<br>第９回　時候と文化　　初夏<br>第 10 回　芸術４　　美術と象徴的なモチーフ<br>第 11 回　芸術５　　美術の解釈～歴史的作品<br>第 12 回　教育と文化５　松江キャンパスから考える 女性と文化～戦前１<br>第 13 回　教育と文化６　松江キャンパスから考える 女性と文化～戦前２<br>第 14 回　教育と文化７　松江キャンパスから考える　女性と文化～戦後<br>第 15 回　統括<br>（進行順序や内容は変更される場合があります） |
| テキスト | プリントを配布する他、講義に際して適宜案内します。 |
| 参考文献 | プリントを配布する他、講義に際して適宜案内します。 |
| 評価方法 | 平常点（小課題、コメント等）(65%)、課題（35%）の総合評価となる予定です。 |
| 自己学習に関する指針 | 授業で挙げた参考文献、図像資料について、各自で読んだり、鑑賞する時間を設けること。 |
| 履修上の指導・留意点 | 受講希望者は、１回目の授業に必ず出席すること。出席できない事情がある場合は、必ず事前に連絡をすること。受講生数については制限する場合もありえる。学外の見学に際して、実費での負担が発生することがある。土日等の課外の時間を含む場合も想定される。受講生数や受講生の理解度等に応じ、授業の順序、進行、評価方法に変更がある場合がある。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 韓国の言語と文化Ⅱ | | | | | | |
| 担当教員 | 崔　貞美 | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 秋学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 1 | 授業コード | M8020320 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 「韓国の言語と文化Ⅰ」の授業を終了したことを前提に授業を行います。基本会話をグループ練習を通じて身に付くよう学習します。「読む」「話す」ことが大切です。そして「書く」という３段階を経て韓国語を習得していきます。<br>ハングル能力検定５級のレベルを目指します。 |
| 授業の到達目標 | ・ハングル（文章）を読めるようにします。<br>・様々な場面での会話ができるようにします。<br>・言語学習を通じて、韓国文化に興味を持ってもらい、それを機に積極的に異文化に触れていくようにします。 |
| 授業計画 | 第１回　第５課《誕生日はいつですか？》、漢数詞、（～です）<br>第２回　第５課《誕生日はいつですか？》◦グループ練習、辞書における子音、母音の配列<br>第３回　第６課《郵便局とコーヒーショップがあります》、位置、（～します）<br>第４回　第６課《郵便局とコーヒーショップがあります》◦グループ練習、韓国の教育制度<br>第５回　第７課《３個１万ウォンです》、固有数詞、副詞<br>第６回　第７課《３個１万ウォンです》◦グループ練習<br>第７回　第８課《韓国語の授業は何曜日ですか》、時間と曜日、時刻<br>第８回　第８課《韓国語の授業は何曜日ですか》（～から～まで）、（～だが、～だけど）◦グループ練習<br>第９回　年賀状作成<br>第 10 回　第９課《週末に何をしますか》、過去形<br>第 11 回　第９課《週末に何をしますか》◦グループ練習、（～で）<br>第 12 回　第 10 課《週末に映画を見にいきましょうか》<br>第 13 回　第 10 課《週末に映画を見にいきましょうか》◦グループ練習、会話文作成①<br>第 14 回　会話文作成②<br>第 15 回　後期のまとめ<br>定期試験 |
| テキスト | グループで楽しく学ぼう！韓国語（朝日出版社）朴美子他　定価 2,500 円 |
| 参考文献 | 授業において適宜紹介します。※プリント配布 |
| 評価方法 | 期末試験 60 点、会話テスト 30 点、小テスト、課題提出、出席状況等で 10 点、総合 100 点で評価します。 |
| 自己学習に関する指針 | グループ会話練習を通して音読の能力を高めていくことに重点をおくので、まず個々の練習を積極的にやることが大切です。予習をしっかりやりましょう。 |
| 履修上の指導・留意点 | 欠席が６回になると原則試験は受けられません（但し、公欠の場合は事前に公欠届を提出すること）。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | しまね歴史探訪 | | | | | | |
| 担当教員 | 杉　岳志 | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 15 | 配当年次 | 2 | 配当期 | 春学期 |
| 授業形態 | 演習 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 1 | 授業コード | M8020340 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 講義・フィールドワーク・プレゼンテーションにより、島根および松江の歴史について学修する。本学が位置する松江は、江戸時代の城下町の雰囲気を色濃く残し、「美しい日本の歴史的風土 100 選」に選出されている。フィールドワークでは、江戸時代と現在の地図を比較しながら、松江の街中に残る江戸時代の痕跡をたどる。プレゼンテーションでは、フィールドワークを踏まえて松江の城下町を紹介する。 |
| 授業の到達目標 | １．地域の歴史について記述することができる。<br>２．地域の歴史について口頭で説明することができる。<br>３．授業の内容に対し、自分なりの疑問・感想を述べることができる。 |
| 授業計画 | 第１回　歴史的にみた島根<br>第２回　松江藩<br>第３回　松江城下町①　松江城下町の歴史<br>第４回　松江城下町②　松江城下町の特徴<br>第５～６回　フィールドワーク<br>第７～８回　プレゼンテーション |
| テキスト | テキストは使用せず、プリントを配布する。 |
| 参考文献 | 授業の中で適宜紹介する。 |
| 評価方法 | コメントシートの記述内容 30%、プレゼンテーション 30%、期末レポート 40%の割合で評価する。 |
| 自己学習に関する指針 | ・フィールドワークで回ることのできない場所も自主的に歩き、歴史の痕跡を見つけ出してください。 |
| 履修上の指導・留意点 | ・履修人数を 18 人に制限します。<br>・講義（第 1～第 4 回）・フィールドワーク（第 5・6 回）・プレゼンテーション（第 7・8 回）とも 9 月中の実施を予定しています。<br>・質問はその内容に応じて授業時間中・研究室・e-mail で対応します。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 異文化理解演習 | | | | | | |
| 担当教員 | 塩谷　もも | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 春学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M8020350 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 島根県立大学浜田キャンパスの「短期日本語・日本研修プログラム」に参加する各国（北東アジア中心）からの研修学生と交流し、互いの文化を学ぶために企画された科目（演習）である。海外の文化を学び、同時に日本（松江）を紹介することを通して、自らの文化と地域を再発見することを目標とする。異文化交流に関する講義から基礎知識と留意点を学んだうえで、学生が主体的に松江や留学生の出身国について学習する。留学生に松江を紹介するツアーの企画を行ない、実際にガイドする。ツアー後は留学生と協力して成果発表をし、事後学習とレポート課題 |
| 授業の到達目標 | ⑴各国の学生との交流により、習慣や考え方の類似点・相違点について学び、多様な人と接する力を身につける。<br>⑵松江市内ツアーの企画、テーマに沿って松江を紹介することを通して、自らの文化と地域を再発見することができる。<br>⑶市内ツアーの企画、成果発表などを通じてグループで協力し、課題を成し遂げる力を磨く。 |
| 授業計画 | 第１回　導入：異文化理解とは<br>第２回　異文化交流プログラムに向けて<br>第３回　松江の文化と異文化交流<br>第４回　松江市内ツアー案の作成<br>第５回　留学生の出身国について<br>第６回　松江市内ツアー案のプレゼンテーションと再検討<br>第７回　松江市内ツアーの資料作成<br>第８回　交流に向けた準備作業とリハーサル<br>第９～14 回　異文化交流プログラムへの参加<br>１日目：交流活動（アイスブレイク、市内ツアーの事前学習）<br>２日目：松江市内ツアー<br>３日目：成果発表（プレゼンテーション）<br>第 15 回　異文化交流を振り返って |
| テキスト | テキストは特に定めず、適宜プリントを配布します。 |
| 参考文献 | 上水流久彦（他編）2017『東アジアで学ぶ文化人類学』昭和堂。<br>片山隆裕（編）2008『アジアから観る、考える：文化人類学入門』ナカニシヤ出版。<br>平田オリザ 2012『分かりあえないことから：コミュニケーション能力とは何か』講談社。 |
| 評価方法 | 演習シート（30%）、口頭発表課題（20%）、レポート課題（50%） |
| 自己学習に関する指針 | ⑴ 留学生の出身国について、文献、インターネット、ニュースや新聞報道から日常的に関心を持ち、知識を深める。<br>⑵ 日本文化、松江、観光について知識を広め、留学生にしっかりと伝えられる力を身につける。 |
| 履修上の指導・留意点 | ⑴ 来日する留学生数にあわせ、履修人数を制限・調整する。<br>⑵ 連携事業の一環として開講しますので、内容・日程が変更になる可能性がある。また、海外情勢等の都合で、やむをえず中止になる場合もありうる。<br>⑶参加費として、市内ツアーの実費（交通費・昼食代・施設見学代等）３～４千円程度がかかる。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | へるん探求 | | | | | | |
| 担当教員 | 松浦　雄二、小泉　凡 | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 15 | 配当年次 | 2 | 配当期 | 春学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 1 | 授業コード | M8020360 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | １．２回の日帰りバス研修によって山陰地方にゆかりの深い作家へるん（ラフカディオ・ハーン／小泉八雲）の足跡地を、訪問、視察する。<br>２．上記１に先立ち、研修とハーン作品についての事前授業を行う。<br>３．上記訪問地における「へるん」の文化資源的活用について実践的に学ぶ。 |
| 授業の到達目標 | １．事前授業、2 回の現地研修に積極的に参加する。<br>２．五感を通した体験的学習からハーンの作品世界への理解を深めることができる。<br>３．ハーンゆかりの地における「へるん」の文化資源的活用について、具体的な意見を述べることができる。 |
| 授業計画 | 島根県・鳥取県のへるんゆかりの地を 2 回に分けて訪問し、現地研修を行い、終了後には各自レポートを提出する。<br>１．事前授業：5 月中（予定）<br>作品「杵築」「日御碕」「日本海の浜辺で」「盆踊り」の抜粋講読と訪問地の文化的特色について<br>２．研修①<br>出雲大社・日御碕・一畑薬師を訪ねる。<br>(5～9 月の平日または土曜日に実施予定)<br>３．研修②<br>大山町の妙元寺・琴浦町の旧中井旅館や花見潟墓地・鳥取県日野町の幽霊滝など、おもに伯耆地方(鳥取県西部)のハーンゆかりの地を訪ねる。琴浦町では地域の方との意見交換会を、妙元寺ではハーンが魅了された「いさい踊り」を見学し習得する。<br>(5～9 月の平日または土曜日に実施予定)<br>※なお、天候その他やむを得ない状況・都合等によって、上記計画における実施時期・内容に変更を生じる場合もある。 |
| テキスト | |
| 参考文献 | ・小泉八雲名作選集、平川祐弘訳『明治日本の面影』講談社学術文庫（1990 初版）<br>・小泉八雲名作選集、平川祐弘訳『神々の国の首都』講談社学術文庫（1990 初版）<br>・ラフカディオ・ハーン著・池田雅之訳『新編　日本の面影』角川ソフィア文庫（2000 年初版）ほか、適宜紹介する。 |
| 評価方法 | 原則として事前授業と 2 回の研修に参加することが成績評価の基本条件となる。研修終了後にレポートの提出をもとめる。(参加状況 80%、 レポート 20%) |
| 自己学習に関する指針 | ・事前授業で配布した資料、紹介した参考文献を、積極的に読むことが望ましい。 |
| 履修上の指導・留意点 | ・履修希望者多数の場合は抽選を行う場合がある。2 回の研修について、貸切バス・昼食代の負担金として、1 回につき 1,000 円程度が必要となる。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 文化とガイド | | | | | | |
| 担当教員 | ダスティン・キッド | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 2 | 配当期 | 秋学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M8020370 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 本授業では、松江を中心に山陰両県の観光スポットを英語で効果的に説明ができるようになることを目標とする。そのために必要な語彙と情報を学びながら、歴史や文化に焦点を当てる。さらに、学生が住んでいる場所をより理解し、関心を持てるようになることも目指す。 |
| 授業の到達目標 | ・松江近辺で簡単な観光ガイドをできるようになる<br>・山陰の文化や歴史の知識を深める<br>・実際のガイドに役立つレベルのコミュニケーション能力と英語の語彙・表現力を向上する |
| 授業計画 | 第１回　Introduction and Overview<br>第２回　Being a Guide for Others（ガイドをするにあたって）<br>第３回　Shimane and Matsue's Appeal　（島根と松江の魅力）<br>第４回　Yaegaki Shrine Visit　（八重垣神社訪問）<br>第５回　Matsue Castle（松江城）<br>第６回　Izumo Taisha（出雲大社）<br>第７回　Location Guiding（松江城）<br>第８回　Oki Islands　（隠岐諸島）<br>第９回　Hot Springs　（温泉）<br>第 10 回　Iwami Ginzan Silver Mine　（石見銀山）<br>第 11 回　Matsue's Tea Culture　（松江のお茶文化）<br>第 12 回　San'in Mythology　（山陰の神話）<br>第 13 回　Festivals　（祭り）<br>第 14 回　Location Guiding（グループで選択した場所）<br>第 15 回　Review and Presentations　（振り返りと発表） |
| テキスト | プリントを配布する |
| 参考文献 | 適宜に配布する |
| 評価方法 | 課題・宿題 －　20%　ガイド実践 － 50%　発表 －　30% |
| 自己学習に関する指針 | 山陰両県の観光・歴史・文化に関する情報を収集する。 |
| 履修上の指導・留意点 | 積極的に参加する気持ちで授業に臨む。ガイド実践の前に、事前その場所に行ってガイドの下調べやコース決めも大切である。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 読み聞かせの実践 | | | | | | |
| 担当教員 | 岩田裕子、尾崎智子、内田絢子、沼田友美 | | | | | | |
| 科目分類 | 専門基幹 | 授業時間 | 60 | 配当年次 | 2 | 配当期 | 春学期 |
| 授業形態 | 演習 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M8020380 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 学内の絵本専門図書館「おはなしレストランライブラリー」を学習の拠点として、絵本の選定と読みの練習を重ね、大学近隣の幼保園・小学校に出かけて行き、幼児・児童を対象に読み聞かせを実践する。本科目専用のノートと多面的な評価を取り入れながらＰＤＣＡサイクルを生み出し、実践を重ねながら着実に力をつけていけるように工夫する。 |
| 授業の到達目標 | ①絵本の基礎的知識を身に付け、絵本を解釈・鑑賞する力を修得する。<br>②絵本の読み聞かせの知識・技能を身に付け、心のこもった読み聞かせができる。<br>③実践を通して、挨拶やお辞儀などの基本的なマナーを身に付ける。<br>④グループで協力しながら取り組むことができる。 |
| 授業計画 | 第１回　ガイダンス、班編成<br>第２回　ポイントのまとめ「おはなしレストラン 10 カ条」の確認<br>第３回　絵本の選定、絵本の解釈、読み聞かせの練習<br>第４回　グループ練習<br>第５回　グループ練習<br>第６回　幼保園のぎ・のぎ小学校での実践１、待機組はライブラリーで模擬実践<br>第７回　幼保園のぎ・のぎ小学校での実践２、待機組はライブラリーで模擬実践<br>第８回　幼保園のぎ・のぎ小学校での実践３、待機組はライブラリーで模擬実践<br>第９回　幼保園のぎ・のぎ小学校での実践４、待機組はライブラリーで模擬実践<br>第 10 回　幼保園のぎ・のぎ小学校での実践５、待機組はライブラリーで模擬実践<br>第 11 回　幼保園のぎ・のぎ小学校での実践６、待機組はライブラリーで模擬実践<br>第 12 回　幼保園のぎ・のぎ小学校での実践７、待機組はライブラリーで模擬実践<br>第 13 回　幼保園のぎ・のぎ小学校での実践８、待機組はライブラリーで模擬実践<br>第 14 回　幼保園のぎ・のぎ小学校での実践９、待機組はライブラリーで模擬実践<br>第 15 回　幼保園のぎ・のぎ小学校での実践１０、待機組はライブラリーで模擬実践<br>まとめ |
| テキスト | 「おはなしレストラン 10 か条」「作品解釈ノート」「実践記録ノート」など、授業で適宜配布する。<br>絵本は、おはなしレストランライブラリーの絵本を利用する。 |
| 参考文献 | 必要に応じて紹介する。 |
| 評価方法 | 「おはなしレストラン１０カ条」に基づく自己評価（20%）、活動記録（作品解釈ノート、実践記録ノートなど）のまとめ（40%）、期末レポート（40%）を総合的に評価する。 |
| 自己学習に関する指針 | 「おはなしレストランライブラリー」に積極的に足を運び、絵本とともに過ごす時間を楽しんでください。 |
| 履修上の指導・留意点 | ◇総合文化学科・地域文化学科合同で行います。<br>◇授業時間以外の実践活動が入ります。<br>◇活動用のおはなしレストラン専用ポロシャツ、絵本バッグの代金 3,000 円程度を徴収します。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 総合文化研修計画Ⅰ | | | | | | |
| 担当教員 | 総合文化学科教員 | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 15 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 春学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 1 | 授業コード | M8020390 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 本科目は、１年生の夏期休業期間中に実施する「総合文化研修Ⅰ」の事前準備を行うことを目的としている。<br>「総合文化研修Ⅰ」では、島根県東部の石見銀山（大田市大森町）においてフィールドワークを実施する予定である。そのための準備として、本科目では、フィールドワークや文化資源に関する基礎知識と、石見銀山および大森町に関する予備的な知識を身につけたうえで、「総合文化研修Ⅰ」の実施計画案を作成する。 |
| 授業の到達目標 | ①フィールドワークを行うための基礎的な知識を習得している。<br>②文化資源に関する基礎的な知識を習得している。<br>③石見銀山と大森町に関して、フィールドワークを行ううえで必要となる基礎的な知識を習得している。<br>④フィールドワークの実施計画案を作成することができる。 |
| 授業計画 | 第１回　フィールドワークの基礎（フィールドワークとは何か、フィールドワークを行うために）<br>第２回　文化資源とは何か(1)（文化資源とは何か）<br>第３回　文化資源とは何か(2)（文化資源を発掘するために）<br>第４回　大森町の歴史、町並みと人（世界遺産センター訪問、ガイドによる大森案内）<br>第５回　大森町を代表する企業（群言堂、中村ブレイス）<br>第６回　フィールドワークの実施計画案作成(1)<br>第７回　フィールドワークの実施計画案作成(2)<br>第８回　まとめ |
| テキスト | テキストは特に使用しない。 |
| 参考文献 | 『フィールドワーク心得帖 新版 』　滋賀県立大学環境フィールドワーク研究会　2015 年　サンライズ出版<br>『ぐんげんどう』　石見銀山生活文化研究所編　2015 年　平凡社<br>『昭和のくらし博物館』　小泉和子著　2000 年　河出書房新社<br>その他、必要に応じて紹介する。 |
| 評価方法 | 単位認定は、毎回の授業の小レポート（20%）、課題レポート（40%）、フィールドワークの実施計画案（40%）によって総合的に評価する。 |
| 自己学習に関する指針 | |
| 履修上の指導・留意点 | ＊この科目は「総合文化研修Ⅰ」に参加する学生（20 名程度）を対象として開講する。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 総合文化研修Ⅰ | | | | | | |
| 担当教員 | 総合文化学科教員 | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 春学期 |
| 授業形態 | 演習 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 1 | 授業コード | M8020400 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 本科目は、以下のことを目的として１年生の夏期休業期間中に２泊３日のフィールドワークを行う演習科目である。①フィールドワークの難しさを知るとともに、その楽しさをも体感すること。②フィールドに出て実際に様々な体験をすることを通して、地域の社会や文化に対する興味・関心を高めること。<br>本科目のフィールド候補地としては、島根県東部の石見銀山（大田市大森町）を予定している。 |
| 授業の到達目標 | ①フィールドワークを行うための基礎的な知識と技能を習得している。<br>②「総合文化研修計画Ⅰ」で作成した計画に沿ってフィールドワークを行うことができる。<br>③フィールドで学んだことを自分の言葉で説明することができる。 |
| 授業計画 | ＜事前学習＞<br>・日程確認、グループ編成、注意事項など<br>＜１日目＞<br>・石見銀山センター訪問<br>・ガイドツアー体験<br>・生活文化調査⑴（群言堂、中村ブレイス、地元の方々）<br>＜２日目＞<br>・熊谷家住宅にて昔の生活体験<br>・生活文化調査⑵（熊谷家住宅、地元の方々）<br>＜３日目＞<br>・生活文化調査⑶（各自フィールドワーク）<br>＜事後学習＞<br>・発表会<br>・礼状書きなど |
| テキスト | テキストは特に使用しない。 |
| 参考文献 | 『ぐんげんどう』　石見銀山生活文化研究所編　2015 年　平凡社<br>『昭和のくらし博物館』　小泉和子著　2000 年　河出書房新社<br>その他、必要に応じて紹介する。 |
| 評価方法 | 単位認定は、毎日の活動についての小レポート（20%）、成果発表会でのプレゼンテーション（40%）、課題レポート（40%）によって総合的に評価する。 |
| 自己学習に関する指針 | |
| 履修上の指導・留意点 | ＊この科目はフィールドでの演習科目であるため、受講登録できる学生を 20 名程度とする。<br>＊交通費・宿泊費・食費などの実費は、受講生から徴収する（1 万 5 千円程度の見込み）。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 総合文化研修計画Ⅱ | | | | | | |
| 担当教員 | ダスティン・キッド | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 15 | 配当年次 | １・２ | 配当期 | 春学期 |
| 授業形態 | 講義 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 1 | 授業コード | M8020410 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | アメリカ合衆国ワシントン州にあるセントラルワシントン大学で行われる語学研修の事前研修を行い、参加する学生に十分の準備ができる機会を与える。アメリカで元気で過ごすために必要な情報を伝え、学生が研修中で交流できるためにプレゼンテーションの準備もさせる。 |
| 授業の到達目標 | 授業テーマ：語学研修に参加する学生が一人ひとり、アメリカで有意義な時間を過ごせるため、そしてできる限りの英語学習と異文化交流ができるための準備。<br>到達目標：①自己紹介及びに個人の目標を英語で伝えるようになる、②グループに分かれてアメリカで発表するプレゼンテーションを完成させる、③研修に必要な知識を身に付ける。 |
| 授業計画 | 第１回　オリエンテーション、グループ分け、役割決定<br>第２回　グループプレゼンテーションの内容決定<br>第３回　研修プログラム歴史と狙い<br>第４回　出国・入国審査、税関について<br>第５回　荷物について（預かり荷物、持ち込み荷物など）<br>第６回　一回目のプレゼンテーション練習<br>第７回　旅行代理店の説明<br>第８回　アメリカのお金（特に硬貨）、チップのルール<br>第９回　アメリカの日常生活やマナーについて<br>第 10 回　ワシントン州とエレンズバーグ市の概要<br>第 11 回　二回目のプレゼンテーション練習<br>第 12 回　セントラルワシントン大学の概要、寮の生活<br>第 13 回　アンダーソン・ヘイ（企業訪問先）の紹介<br>第 14 回　行先の気候、体調管理<br>第 15 回　グループプレゼンテーション、結団式 |
| テキスト | なし |
| 参考文献 | 別途プリント配布 |
| 評価方法 | ・自己紹介と個人の目標の発表　－　４０％<br>・グループプレゼンテーション　－　４０％<br>・取り組む態度　－　２０％ |
| 自己学習に関する指針 | |
| 履修上の指導・留意点 | |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 総合文化研修Ⅱ | | | | | | |
| 担当教員 | ダスティン・キッド | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 60 | 配当年次 | １・２ | 配当期 | 春学期 |
| 授業形態 | 演習 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M8020420 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | Language & Culture の授業(3 時間/平日)受講、現地大学生との交流、地元主要産業の牧草会社訪問、学長・副学長などとの交流会、日本や島根、大学等を紹介するプレゼンテーションの実施など。その他、地元の美術館・博物館訪問、ドイツ村観光、牧場での乗馬、大リーグ観戦等を通して、アメリカ文化を体験する。 |
| 授業の<br>到達目標 | ・セントラルワシントン大学で、UESL が提供する約 3 週間の研修に参加する。語学・文化講座の受講、現地大学生との交流、企業訪問、文化体験などを通して、多文化社会アメリカについての理解を深めるとともに、英語でのコミュニケーション力の向上、および国際的視野の醸成を目的とする。<br>[到達目標]<br>①英語でのコミュニケーション能力を、授業の受講、現地での生活に十分なレベルまで向上させる。<br>②アメリカでの学びや体験を説明できる。<br>③主体的に英語学習に取り組み、異文化理解を深めようとする姿勢を身に付ける。 |
| 授業計画 | 第１回　オリエンテーション、自己紹介<br>第２回　英会話（好き嫌い、やってみたいこと）、ワシントン州の地理<br>第３回　英会話（買い物）、開拓時代のアメリカ<br>第４回　英会話（道の訪ね方）、エレンズバーグ市の歴史<br>第５回　英会話（趣味）、エレンズバーグ市の散策、歴史館訪問<br>第６回　英会話（スポーツ）、シアトル市の名所と歴史<br>第７回　英会話（将来の夢）、レーニア山の自然<br>第８回　英会話（家族について）、アメリカの原住民の歴史と文化<br>第９回　英会話（応援の仕方）、アメリカの野球<br>第 10 回　英会話（故郷紹介）、乗馬の必要知識<br>第 11 回　英会話（大学生の生活）、ロズリン市の歴史と文化<br>第 12 回　英会話（アメリカの礼儀）、キティタスバレーの現在企業、地元の企業訪問<br>第 13 回　英会話（理想の生活）、レヴェンワース市の歴史とドイツとの関係<br>第 14 回　英会話（アメリカの思い出）、ギンコ化石森の歴史<br>第 15 回　英会話（別れのスピーチ）、川下りの注意点<br>課題レポート提出 |
| テキスト | なし |
| 参考文献 | 別途プリント配布 |
| 評価方法 | 事前研修への出席および事後のレポート提出と報告会実施：30%　（大学での担当者が評価）<br>現地での研修：70%　（UESL プログラム担当者・授業担当教員が、授業での学びやその他の研修への参加姿勢などを評価） |
| 自己学習に<br>関する指針 | |
| 履修上の<br>指導・留意点 | 「総合文化研修計画Ⅱ」の受講も必要 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 授業科目 | 海外企業研修 | | | | | | |
| 担当教員 | 総合文化学科教員 | | | | | | |
| 科目分類 | 専門科目 | 授業時間 | 30 | 配当年次 | 1 | 配当期 | 春学期 |
| 授業形態 | 演習 | 選択/必修 | 選択 | 単位数 | 2 | 授業コード | M8020430 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | グローバル化が進展するなかで、グローバル化や国際化に対応できる人材の社会的ニーズが高まっています。また今後、皆さんが活躍する舞台は、日本国内に留まらず、世界に開かれています。<br>グローバル化や国際化に対応する力は、語学力だけではありません。海外のビジネス動向・慣習・産業構造等の知識が必要になります。また外国人の思考様式やコミュニケーション様式に触れ、それらに対応する力も求められます。<br>海外企業研修は、グローバル化・国際化に対応できる力を培い、世界に眼を向けながら活躍するための第一歩を踏み出す授業です。 |
| 授業の到達目標 | ①海外のビジネス動向・思考様式・コミュニケーションの在り方について理解を深めることができる。<br>②グローバルな視野から日本と海外企業の位置・役割を見据え、企業研究に活用できる。<br>③海外で得た学びを自己成長と将来のキャリア形成につなげることができる。 |
| 授業計画 | 2019 年度は、【2019 年 9 月上旬～中旬の時期】に、タイのバンコクを中心に約 1 週間滞在し、グローバルに展開する企業への訪問や現地大学生との交流を通じて、海外のビジネス動向・思考様式・コミュニケーションに触れ、自己成長の起点を得ます。なお研修では、チームで取り組む課題解決型のワークを導入する予定です。事前研修の段階から、積極的に課題解決のワークに取り組むことを期待します。<br>実習に先立ち、履修者は、事前研修（3 回程度）に出席する必要があります。事前研修は、2019 年 6 月上旬から 8 月にかけて、合計 3 回実施する予定です。詳しい事前研修の日程については、説明会等でお知らせします。<br>企業訪問では、グローバルに展開する企業を対象とし、企業見学・企業スタッフとの対話などを行います。大学訪問では、現地大学生との意見交換・交流・ディスカッションなどを行います。研修後は、報告書を提出します。 |
| テキスト | プリントを配布します。<br>適宜、ワークシート等を配布し、活用します。 |
| 参考文献 | 適宜、紹介します。 |
| 評価方法 | ・事前研修への参加姿勢：30%<br>・実習状況：40%<br>・報告書の内容：30% |
| 自己学習に関する指針 | 他の学生と協力し、課題解決型のワークに積極的に取り組んでください。 |
| 履修上の指導・留意点 | 【履修上の注意】<br>〇参加学生が決定してから、学生に代わって事務局が履修登録を行います。<br>〇2019 年度の海外企業研修の参加者の応募と選考面接は、4 月～5 月（予定）に行いますので、募集期間・応募締切日・選考面接の日程に注意してください。<br>〇海外企業研修の内容や応募方法・応募締め切りについてお知らせする説明会の詳しい日時については、メールやチラシ等でお知らせします。海外企業研修の応募を考えている学生は、説明会に参加してください。そして決められた締め切り日までに、応募書類を提出してください。<br>〇応募者から選抜して、参加者を決定します。参加定員は、浜田キャンパスと松江キャンパスから 12 名程度です。そのうち松江キャンパスからは、2 名程度の参加者を選抜します。<br>〇事前研修を 8 月にも行うことから、「総合文化研修Ⅱ（アメリカ）」と「海外企業研修」に二つとも参加することはできません。どちらか一方の参加は可能です。<br>〇参加希望者は、1 年間に履修登録できる単位数に注意して、履修計画をたててください。<br>〇選抜の結果、参加できない場合もあります。また、研修では、課題解決型のワーク等に取り組むため、学生のチームを編成します。<br>〇学生のチームを編成するため、選抜の結果、松江キャンパスからの参加学生も含めて参加学生が原則として 5 名に満たない場合は、研修を実施しませんのでご注意ください。<br>〇申し込み方法等については、説明会やメール・チラシ等でお知らせするので、メール等を頻繁にチェックしておくこと。 |